

遠い祭

佐々木 涼子

第一章

「あのふたりね、あんなことになるまでろくに口をきいたことがなかったはずだって、お豆腐屋さんのおばさんたら言うのよワタシに。まあ、言うにこと欠いて、ねえ」

母屋の奥さんはそう言いながら、心外そうに下唇をつきだした。まるで、他でもないこのワタシに向かっていい加減なことを言うものだど、腹を立てているように聞こえるが、彼女が言いたいのはそのことではない。つづけて、こう言ったからだ。

「それだけじゃないのよ、なんだか羨ましくなっちゃった、なんて言うの、あのおばさん。息子たちがこんなところまで行って、ですって。どうしたらそんなことになるのか、あたしらなんかには、考えることもできない

って。まったく、あきれた話だよ、よりによってこんな時に」

いかにも怒っているような口ぶりだが、それでも母屋の奥さんは、こんなにスキャンダラスな、好奇心を掻きたてる状況が身近に起こって、じつは内心このうえもなく上機嫌なのだ。まったく、こんなにワクワクすることとは、一生でそう何度もあるものではない。

「あんなことって、いったい何のことを言っているのかしらって、ちょっと混乱しちゃったわよ。だって、こんな騒ぎになったのはあの事件のせいだけど、でもそれが起きた時にはふたりはいっしょに暮らしていたんだからね。だとすれば、お豆腐屋さんのおばさんが言うのはその前の、いっしょに暮らしてこととか、そのまた前の駆け落ちのことかしらって、やっと分かったわけ」

そうでなくても、つまりこんな事件のないときでも、母屋の奥さんはいしゃべりだった。もう十年もこの町に住んでいるのに、ろくに知り合いない私が、まあまあ町の事情に通じているのは、もっぱら母屋の奥さんのおしゃべりのお陰だと言っている。彼女には確かにテレビのワイドショーのレポーターの素質がある。というよりはたぶん、あのレポーターという職業は、こういう町のおしゃべり奥さんたちの思いが一つに大きく結実して実現したものなのかもしれない。

「それにしたって、話をしたこともない者どうし駆け落ちなんかするう？ そんなことしないわよねえ、ふつう。ま、親ってもんは分かっているようで自分の子どものことは知らないからね、お豆腐屋さんのおばさんも事が起こって始めて知ってびっくりしたんだわね。なんてったって、同じ屋根の下に住んでいた親にしてみれば、ほんとに納得のいかないことだったでしょうからねえ。ショックで病気になるなかっただけで、もうけものだよ。ほんとよお、世間に顔向けできないことだもの」

母屋の奥さんは自己流の深い感慨でもって締めくくって、ひとり納得してうなづいていた。レポーターしている時の、いつもの流れだ。

こんな騒ぎとはいふものの、しかしその事件ははじめのうち、とても慎重まじやかなものだった。つまり、たいして世間の注目を集めるほどのものではなかったのだ。

東京のはずれの町、たしか豊島区か板橋区にあるアパートの一室で女が殺された。数時間後、いっしょに暮らしていた若い男が、自分が殺したと自首して出た。殺すつもりではなかったが、はずみで手に力が入って、気

遠い祭

がついたら相手は息が絶えていた。警察は詳しい事情を男に尋ねている……。たぶん、新聞をよく読めば、社会面にそんな小さな記事くらいは出ていたのだろう。テレビでも言ったのかもしれない。でも私は気づかなかった。客観的には、ありふれた話なのではないかと思う。同棲している男女が、痴話喧嘩のはてか金銭がらみか、口論になって、男が手を上げた。女が負けん気の性格で、ひるまず言いつめた。男はそこまでやる気はなかったのに、ついやりすぎて相手が死んでしまった。そういうことはあるだろうと、私でも想像できる。広い東京の向こう側でそんなありふれた事件が起こったとしても、この山の手の住宅街でさしたる騒ぎになることではなかった。

それが騒ぎになったのは、その殺された女と殺した男が、この町の人間だったと分かった時からだ。つまり、みんなが知っている人だったのである。

ある朝、私が会社に行こうとして裏門を出ると、角のところで近所の主婦が三人、輪になって立ち話をしていた。そのようすが、ちよつといつもと違っている。私にとっては、それが事件の発端だった。

出勤のときに主婦たちに会うのは、べつに珍しいことではない。このあ

たりは火曜と金曜が生ゴミの日で、収集車が回ってくるのが少し遅いものだから、主婦たちは朝の九時頃、子どもたちを学校へ送り出し夫たちも出勤した後、やおらゴミの袋を持って出ても、じゅうぶん間に合う。彼女たちは大きな袋を置いてしまうと、たまたま来合わせたご近所の奥さん同士、ひとしきり井戸端会議をする。もちろん、必ず決まってしまうわけでもなく、暑くもなく寒くもない気候で、お天気もそこそこ、今日はとくにでかける用事もない、そんな人がたまたま二人、三人と集まると、暇つぶしの話に興じるだけのことだ。

彼女たちにしてみれば、そんなふうに日頃から努めて友好的な関係を築いておくのも、主婦という職業の一部なのかもしれない。心から楽しそうというふうでもなく、頬にお愛想笑いの仮面を張りつけて、気乗りのしない表情で話していることもある。

その主婦たちのゴミ捨て場会議にでくわすことが、私にとっては何とも気の重い関門だった。

ゴミ出しの日、私も出勤の時にポリ袋を持って家を出る。主婦たちと違って、たいていは小さな袋だ。ほとんど自炊で、昼のお弁当も冷蔵庫に有り合わせのもので作っていくのだけれど、会社勤めのひとり暮らしから

出るゴミはまとまりがよくて、たいしたものにはならない。「節子さんはほんとに始末のいい人だわねえ」と、母屋の奥さんも私の住む離れのドアからなかを覗いて言うことがある。感心してるのか見下してるか、聞いている私にもわからない言い方で。

裏門を潜って外に出ると、かんぬきを挿したところで角のゴミ置き場のほうを見る。主婦たちの姿がなければラッキーな日だ。通りすがりにゴミの山の上に小さな袋をポンと置いて、後はすっかり前向きに、そのまま今日一日をマイペースで行けそうな気分になる。

主婦たちがたむろしているときは、近づいていく歩幅もつい狭くなりがちだ。私が裏門を出る物音で、彼女たちはいっせいにこちらの方を見る。べつだん、悪気があってのことではない。人通りの少ない住宅街だから、何か気配がすれば、そちらを振り向いてどうぜんなのだ。それでも視線の一斉射撃を浴びた私は、一瞬いたたまれない気持になって、門を締めるのもうつむきがちになってしまふ。そしてゴミの山へ近づいて行くのだけだと、なにしろずっと見られたままなので、胸の奥に発生した氣づまりの泡の粒がどんどん膨らむのをじっとがまんする感じだ。

主婦たちから数メートルの距離まで近づいたところで、頭を下げる。「お

はようございます」と小声で言うこともある。彼女たちもいっせいに頭を下げる。けっして意地悪な雰囲気ではない。それぞれににこやかに、優しくさある物腰である。わざわざ身をよけて、私の通り道を開けてくれる人もいる。私は遠慮がちにゴミの山に近づいて、そっと袋を置く。そして訳もなく、袋が小さくて肩身が狭い、そう思うのである。

袋を置いてしまっても、それで開放というわけではない。主婦たちは、私が次の角を曲がって姿が見えなくなるまで、目を離さずに見送っているからだ。ほんとうに見ているのかどうか、振り返って確かめたわけではないのだけれど、少なくとも私には、見られている、上から下まで点検されているという感覚がぬぐい去れず、どうしても背中が強張ってしまう。とくに新しいスーツを着た日とか、ボーナスで念願のハンドバッグを買って、初めて持った日などは、大変な思いをする。たとえば、あの地味めのプラダのバッグ。デビューの日に主婦たちの眼でケツつまづいたものだから、再度チャレンジして閑門をくぐり抜けるまでに二週間もお蔵入りさせてしまった。

裏門を出るときに、ついゴミ捨て場を気にしてしまうのは、そういうわけ。でもゴミ収集日以外はそんなことはない。私がもう十三年も借りて住

んでいる離れは、母屋の家族が使う表門からではなく、裏庭の脇の木戸から出入りできるようになっていて、その独立した気楽さも、私がここを借りる決心をした理由の一つだった。

木戸に覆いかぶさるように大きな柿の木がある。始めて部屋を見に来た夏の日、こんもり茂った深緑の葉の裏にもう累々と実がなっているのが、始めは気がつかなかったのに、じっと眼を凝らすと恥ずかしがりの小坊主たちのようにわらわらと見えてきた。それが何ともかわいくて、ここに住もうと決めた。

で、その事件の発端の朝。裏門を出た私は、主婦たちの集団を見ていささか気が重く、でも気を取り直して近づいて行つた。だが彼女たちはまったく私のほうを振り返ろうとしなかった。四、五人が完全な円形をなして、いっせいに中心を向いている。そばをすりぬけた私がいつものように袋をそつと置き、ついでに会釈をしても、いちばん近くにいた一人が振り向いて、首を少し傾けただけだ。それも耳はしっかり輪の中心に向けたままで。

私はほつとするような、気抜けがするような変な気分だった。自分がいささかも注目の的になっていないことは確かだった。いつもは主婦たちの目が嫌だったのだから、その日はうれしくていいはずなのに、それが全面

的にそうというわけでもない。私は、ふーん、という心持ちでそばを通り過ぎた。それでもふしぎなことに、みんなが何をそんなに熱心に話しているのか、そこまでは考えなかった。

夕方帰宅したら、時を置かずに母屋の奥さんが顔を出した。手にひじきの煮物の小鉢を持っている。その日のお総菜のおすそ分け。それを私に差し出す眼が光っていた。何か話がある証拠だ。案の定、小鉢をテーブルに置いている私の背中に向かって、

「ねえ、こないだの殺人事件、鳥つ根の若奥さんとお豆腐やのおにいちやんだったんですって。節子さん、知ってた？」と言った。

私はちよつと動揺した。でもそれは単純に、「殺人事件」という刺激的なことばと、「鳥つ根の若奥さんとお豆腐やのおにいちやん」というあまりに日常的な事柄とが並べられたせいと、そのふたつをどう結びつけたらいいのか、とっさに判断できなかったからだ。

私は何も言えずに振り向いた。母屋の奥さんの丸い目が、ふくよかな顎といっしょに上下運動を繰り返している。私の衝撃を見て、満足しているのだ。《ねえ？ 驚いたでしょう？》と声には出さず、その眼は言っていた。

「殺人事件が…、あったんですか？」

ようやく私は言った。とろすぎる反応のような気もしたけれど、でもほんとうに知らなかったのだから、しかたがない。

「ああら、それも知らなかったの？ あったのよお。一週間くらい前だったかしらねえ。お昼のテレビでも言ってたわよ。名前もちゃんと言ったらしいんだけど、ほうら、何しろ私たち、鳥屋の奥さんとかお豆腐やさんのおにいちゃんとか思ってた、名前なんて知らないじゃない。で、その時はつきりわからなかったのよ。でも、そうなんですって、鳥屋さんちの奥さんとお豆腐やさんのおにいちゃんだったんですって。まあ、あきれたわよねえ」

母屋の奥さんは、また何度か首を上下に振った。あきれた、と言いながら、なぜかとてもうれしそうに見えた。そして私がほとんど何も知らないのを幸い、事件の概要をもう一度、話してくれた。

近くの商店街でも古株の店である鳥つ根の若奥さんと、その筋向かいにある豆腐屋のドラ息子が、どうしたわけか「できちゃって」、去年の秋口、駆け落ちをしてしまったのだそうである。若奥さんが男を作って逃げたらしい、という噂はそのうちに町中に広がったのだけれど、その相手がまさ

かお豆腐やさんのお兄ちゃんだとは誰も知らなかった。少なくとも、母屋の奥さんは知らなかった。

「垣田さんの奥さんも知らなかったんですって。いえね、きのうの夕方買い物に行こうとしたら、垣田さんとそのところすれちがって、それで教えてもらったの。ほら垣田さん、鳥つ根さんとこの上の子と同級の子のお母さんと知り合いで、それで名前やなんかで分かったらしいのよ。でなきゃねえ、ただニュース見ただけじゃ、わかんないわよ」

なるほど、それで今朝、ゴミ出しの時に主婦たちが頭を寄せあって話し込んでいたのだと、私はようやく納得がいった。

駆け落ちした後、ふたりは江東区の盛り場のはずれで同棲していたのだが、次第にうまくいかなくなつて、ついに先日ニュースのような事態になった。つまり若い男が年上の女を絞め殺してしまったのだった。

こうして、この静かな住宅街には珍しい事件が、しばし人々を騒がせることになったのである。

京王線の下高井戸駅の南口を出るとすぐ、東急世田谷線の改札口がある。この世田谷線を沿線の人たちはいまでも玉電と呼び慣わしているが、その

玉電は、車内で切符を買う方式なので、改札の必要がない。だから改札口とはいっても小さな駅舎の脇に入り口らしきものがあるだけで、駅員が改札をしているわけではない。

この電車は走り出すとき、チンチン！と音を立てる。昔の都電と同じく、チンチン電車である。今の家を見に来た時、開け放した窓からそのチンチン！が聞こえて、なんだか懐かしい気がした。玉電に乗ったのは初めてだったのに懐かしかった。

終点の下高井戸から三つ目の宮の坂で降りる。出かける前、念のために地図を見たら、ごちゃごちゃと細い道が入り組んでいて、訳がわからなくなった。それで、不動産屋で書いてくれたメモを見ながら、花屋の角を曲がり、鳥屋の角を曲がりと、指示のとおり歩いたら目指す家についた。

貸間を見に来たとはいうものの、半分は冷やかしだった。学生時代から借りていたアパートの契約が終わるので、気分転換に住まいを変えてみようかと思ったのだ。勤めている出版社が新宿だから、そこを起点にした私鉄沿線の住宅街がいいと思った。大学に入って東京に出てきたときは都会らしい雑踏が珍しくて好きだったけど、卒業してそのまま東京に就職したら、少し静かなところに住みたいと思うようになった。それで、新宿から

伸びている京王線、小田急線の沿線を探すことにしたのだった。住んでみたことがないという物珍しさもあった。

それにしても、下高井戸からまた乗り換えて行くというのはちょっと面倒だと思わないでもなかった。だから、始めはさほど本気でもなかったのだけれど、それでも行くだけ行ってみようと思ったのは、家探しを口実に知らない土地を散策してみるのもいいという遊び心が半分、あとはその物件にちょっと心を引かれたからである。

それは母屋から独立した離れだった。見れば小さいながら築山も池もある庭の裏手に、こじんまりしたりビングルムに小さな食卓の置けるキッチン、それにお風呂場がついているだけの洋館で、母屋の台所口まで歩いて数歩。反対方向に行けば、やはり数歩のところ裏門の木戸があった。

画家のアトリエを思わせる造りだったが、後で母屋の奥さんから聞いたところでは、ご主人の下弟さんがまだ若い頃、結核に罹って、自宅療養のために建てたのであったそうだ。その弟は結局亡くなってしまったのだが、昭和三十年代の初めといえ、まだ結核が怖ろしく思われた時代でもあったし、近所の手前もあって、離れは住む人もなくそのまま物置代わりになっていた。

遠い祭

やがて先代、つまり結核の青年の両親も相次いで世を去り、今のご主人の時代になってからは、大きくなった子どもがしばらく住んだこともあったが、その彼らも結婚して別に所帯を構え、さほど大きいとは思わなかった屋敷が、やたら広々と感じるようになった。

「それでね、誰か心配のない心安そうな人が住んでくれたらいいかもって思うようになったの。誰でもいいとは思わなかったんだけどね…。だから、山根さんが見えるまえに、三人くらい断ったんですよ」

奥さんはちよつと思着せがましい言い方をした。ということとは、私は初対面の人物審査に合格したということなのだろう。そういえば最初の日、奥さんはなんだかいそいそと、部屋案内をした。それで私もつい、最初はあまり本気でなかったにもかかわらず、決めてしまったのだった。

住んでみると、なかなか暮らしやすい土地だった。

関東大震災の後に急速に開発された地域だということだったが、東京とはいえまだ土地にゆとりのあった時代の古い住宅が残っていて、木造の家屋と庭のまわりをサカキやサザンカの生け垣で囲ってある。日曜の午後など、散歩しながら垣根のすき間から覗くと、たいていは縁側とガラス戸、その奥に仄暗い座敷が見えた。緑が多く、いつもどこからか子どもと犬の

声がする。

すぐ近くに商店街があるのもうれしかった。どれも小さい構えながら、必要な店はひととおり揃っている。傾斜のある平たい置き台のうえに野菜や果物を並べた八百屋、ガラスのショーケースに気取らぬ数種類、大福、すあま、お萩なんかを置いてある和菓子屋、大きなウィンドーに嫁入り寝具一揃いを積み上げた布団屋など。店の前に竹簾、長い取っ手のついた木製のチリトリを並べた雑貨屋は、細い土間が店の奥まで伸びていて、その奥は暗がりになって定かに見えない。その店の前を通るたびに、奥はどうなっているのか、一度入ってみたいものだと思いつながら、通り過ぎた。

強いて言うなら、良い魚屋がなかったが、玉電のとなりの駅の山下が小田急線の豪徳寺と隣接していて、その商店街には市場そのものの魚屋がある。下高井戸にも、京王線の踏切を挟んで世田谷線の駅とは反対側に大きな魚屋があって、威勢のいい呼び声が響き渡っていたから、帰りの早い日の夕方、新鮮な刺身や煮魚が食べたいと思えば、そこで買ってからチンチン電車に乗ればいいのであった。通いなれた道とは逆方向に行けば、十分で経堂の商店街に出ると、引越した早々に、母屋の奥さんは教えてくれた。つまりここは、世田谷の住宅街のなかにあっても、経堂、豪徳寺、

下高井戸といった賑やかな商店街のどれからもさらに引込んだ閑静な谷間のようなどころだった。

日常の小さな買い物のためだけにあるような店は、客の顔ぶれが限定しているだけにつきあいも深いのだろう、買い物がらみでのんびり交わす世間話が、どちらにとってもいい気晴らしになっているように見えた。

良い魚屋はなかったけれど、しかし鳥屋は小さいながらしっかりとあったのがあって、それが鳥つ根だった。

この鳥つ根の鶏肉が思いの外に良質なのである。鶏肉の料理は魚よりも保存しやすいし、お弁当のおかずにもいい。そんなわけで、良い鳥屋があることは、良い魚屋がないことを補って余りあった。

私がそんな宮の坂に住むようになったのは昭和五十七年の夏だったが、当時、鳥つ根では二十代の若い男がいつも店頭に立って働いていた。時々もう一人、若い男性を見かけることがあったが、ふたりは面立ちが似ていたから、兄弟だろうとすぐ見当がつく。

しかし母屋の奥さんにとっては、鳥つ根の主人は今なお、兄弟の父であるらしかった。「鳥つ根さんがね」と、たまさかだが話に登場する。その言い方が、親しげだが、どことなく一目置いているようなところもあった。

はじめのうち私は、その「鳥つ根さん」が兄弟の兄の方を差して言っているのだと思って聞いていたのだが、ある時「鳥つ根さん」の体の不具合の話をして「もう年だしねえ…」というのを聞いて、どうもおかしいと気がついた。

「まだ二十代かと思ってました」

私が言うと、母屋の奥さんはびっくりして、

「ええ？　いくらなんでもそんなに若くは見えないでしょう」

そこではじめて気がついて、

「あ、節子さん、息子さんのほうとまちがえてるんじゃないの？」

と笑った。

「そういえば、鳥つ根さんも最近はお奥に引っ込んでることが多くなったわねえ。お客さんの相手も息子さんたちに任せっぱなしで。でも今でも仕入れの注文とか、仕分けなんかは自分でやってるみたいよ。店に顔を出すのはほとんど昼間だけだけどね。年とったら日が暮れるともう疲れちゃうんですって」

どうりで、もっぱら会社の帰りがけに食料品の買い物をする私には、ほんものの「鳥つ根さん」を見かける折がなかったのだった。

遠い祭

「鳥つ根さんはね、いえ、その親御さんのほうだけど、若い頃は夫婦揃って着物で店に出ていたのよ。ご主人は、あれ何て言うのかしらねえ、ほらよく和食の料理人の人なんかが着てるじゃないの、作務衣？ 紺緋みたいな生地、それに襷をかけて。奥さんのほうは真つ白な割烹着でねえ。私がお嫁に来たばかりの頃はふたりともまだ若くて、しゃきつとして、ほんとにすてきだった」

母屋の奥さんはこんもり盛り上がったお腹に両手をあてて、感慨深げな遠い目つきをした。私はといえば、そんな奥さんがお嫁に来た頃を想像して、そっちのほうが感動だ。

奥さんの昔話によれば、鳥つ根の家は代々このあたりで大きな地主だった。戦後の農地改革で財産は大幅に減ったものの、そここに家作やアパートを持っているので、今でも顔役といった立場はそのままである。

「ほら、この町会長さんはずっとあの家だったのよ」

土地の一部に養鶏場があって、そこで飼っている鶏を売っていたのが、もとはといえば鳥つ根の店の前身だった。

「といっても、べつにご当主が店に立って売るっていうんじゃない、番頭さんみたいな人が仕切って、若い衆が二、三人いて。で店の裏座敷が町

の集会場みたいになってたらしいのよ。でも、わたしもその頃のことはあまり知らないの。うちの姑から聞いた話。その時代って、つまり戦前ね、日本人はあまりお肉食べなかったじゃない、鶏肉だったまにしか食べられないご馳走だったから、鳥屋さんというのも今とはちょっとちがうものだったのかもしれないわねえ」

ところがその鳥つ根に、跡継ぎの男の子が生まれなかった。そこで婿に入ったのが現在の鳥つ根の当主、つまり父親のほうである。昔は和服に割烹着を着て店に立つこともあったという女房のほう、じつは跡取り娘だった。

「べつに鳥肉業界でなくてもよかったらしいけど、だれかお婿さんをつて捜していて、白羽の矢が当たったのが今の鳥つ根さん。あ、お父さんのほうね。なんでも、上野の不忍池の近くにある鳥料理の老舗で板前の修行中だったんですって。でお見合いさせたら、お嬢さんがすっかり気に入ってしまった。で、頭を下げてお願いしてお婿さんに来てもらったそうなのよ」

そんな昔のことを、どうして母屋の奥さんが知っているのか、大方お姑さんからでも伝え聞いたのにちがいない。日頃、「姑がうるさくて」とか「気むずかしかったから」と、往年の恨みを言うには言っていたものの、

遠い祭

こんな昔のことを新参のお嫁さんに語り聞かせ、お嫁さんのほうでもそういう情報を少しずつ蓄え込んで、いつの日か物知りの老女になり、また若い人に伝えていくというのも悪いことではない。台所仕事や繕いものの合間合間に、姑の言うことに興味津々、耳を傾けている母屋の奥さんの若い頃は、思い描くだけでもほほえましい。だからこそ、長じて町のレポーターともなったこんにちの奥さんがある。

しかし考えてみると、そうして姑に仕えてレポーター修業をした奥さんに、惜しむらくは後継者がいないのであった。長男も長女も、いつてもともと男の子と女の子ひとりずつしかいないのだが、結婚と同時に家を出てしまった。ここで両親と同居する気は毛頭ない。奥さんもハナから期待していなかったもので、べつに子に背かれたとは思っていない。

「姑と暮らすなんて苦労は今の若い人には無理よ。それどころか今じゃ親のほうで遠慮する時代でしょ。それじゃあ、こちらが気詰まりだもの。ほんとに私たち大正生まれって損なのよお。上からはさんざんいばられたのに、下には遠慮しなくちゃいけないんですものねえ」

そうは言いながらも、特に口惜しそうではないから、それはそれでいいのかもしれないが、問題は地域のレポーターという文化伝統をいかに継承

していくかという重大な事案だ。そこで離れの借家人たる私が、ちよつと甘めのヒジキの煮物ともども、世代間を橋渡しするボールを、当座、受け止めることになる。

「もともと鳥つ根の店は、地主の常村さんが、あ、常村さんという名字なのよ鳥つ根さんとか。一番ふつうの常村ね。常に、とか言うときの常。店の名前は字画とか何かで、縁起のいい字に変えたんですって。」

で、店は常村さんが副業みたいにしてやってて、そんなに気張っていたわけじゃないんだけど、そんなわけで鳥料理の老舗の板前さんが来たものだから、勢い、良い鶏肉屋さんになっちゃったんですって。なんかこう、並べ方なんかも、それまでとはぜんぜんちがった感じになったらしいのね、姑^{はは}の言うところだと。それに奥さんまで店に顔を出すようになったんですって。ほらあ、住宅街の商店街って、おなじみの奥さんたちが毎日のように来るじゃない？ で、すてきな若いだんなさんを一人で出しておくのが心配だったんじゃないかって姑^{はは}は言ってたわねえ。分かるような気がするわ。だって、鳥つ根さん、ほんとにかっこよかったんだから」

奥さんがお姑さんのことを「はは」と呼ぶのには、大別すると二種類の場合があった。ひとつは彼女を担ぎ挙げて、例えば「近頃の若い人」なん

かに居丈高な苦言を呈するとき。もう一つは彼女を全面に押し出して自分はその裏に隠れ、秘めやかな自分の意見の代弁をさせるとき。今のような場合は、その後者にあたる。

鳥つ根の店を任されるようになった若旦那は、その仕事に専念した。じっさいは一介の小さな鶏肉屋の主人として婿入りしたというよりは、もう少し御大家の跡継ぎになったのかもしれないが、当面この店だけは少なくとも彼一人の城でありえたから、鳥つ根の店はそれまでのように使用人の手に任せられることなく、隅々まで眼の行き届いた商店になったのである。

それに加えて、育ちがよくて身仕舞いのいいおかみさんが、好いた亭主が近所の奥さんと親しくなりすぎないように監視がてら、愛想のいい顔で客をあしらう。

「ほんとにね、私なんかちよつと羨ましかったわよ。うちなんかホラ、主人は会社勤めでしょう？ 新婚早々からいっしょに何かする時間なんて、ほとんどなかったもの。毎日あんなふうにしゃきつと着物なんかきて、ハンサムなだんなさんのそばで働くの、かっこいいなあなんて思ったりしたわ。まあ、年取ったらね、亭主が朝すつきり出勤してくれて家にいないっていうのもよかったけど。あの頃はまだ私も若かったから……」

若かった奥さんが姑と過ごす毎日は、たしかに気楽いっぽうなものではなかったかもしれない。それにその頃はたぶん、いま私が住んでいる離れに結核の末弟が自宅療養していたのではなかったか。

「それがね、その時はまだ信州のサナトリウムに入ってたの。だってずるいのよお、お仲人さんたら、末の弟さんは信州の大学に行ってますって言ったの。ほんとだと思って調べなかったのよ、うちの親も。ほんとに仲人口よねえ。結婚して少したってから、主人に聞いたんだけど、いまさらそんなこと知らなかったって言ったってしょうがないじゃない？ 主人は主人で、お仲人さんにはそんなこと言った覚えはないって言うし。そうですかあって言うしかなかった」

鳥つ根の主人が婿入りしてから数年後、常村家が経営していた養鶏場が廃止になった。そのすぐ近くに木造のアパートを二棟建てたところ、その住人たちが、臭いがどうの、ゴミがどうの、鳴き声がうるさいと苦情の絶え間がない。そんなことなら、養鶏場はもうやめにして、その場所を駐車場にしたらいという事になった。養鶏場を預かっていた爺やさんが年をとって働けなくなったのも、止める理由の一つだった。

その爺やさんは少年の時に常村家に雑用をする奉公に入ったのだが、足

が少し不自由で引っ込み思案な性格だったため、ついに結婚もせず、養鶏場の管理という仕事をあてがわれて、いわば一生飼育殺しの使用人だった。血筋も仕事も跡継ぎのないままに年を取り、とうとう養鶏場の仕事も荷がきついという日が来た。

爺やさんには頼れる身寄りもいなかったもので、しかたなく施設に入れ、養鶏場は人手のいない駐車場になった。当時、マイカー族というのが流行語になったように、たとえ小さな民間アパートに住んでいても自家用車は持ちたいと考える若い人たちが増えたので、駐車場にしたのは当たり前だった。

養鶏場をやめたことでの問題は鳥つ根の店で売る鶏肉の仕入れ先だったが、こちらのほうも話はかえっていい方に転んだ。というのは、鳥つ根の主人が婿入り前に勤めていた店の取引先から、それまでよりもずっと上等の肉を仕入れることになったからだ。

「驚いちゃったわよ、いろんな種類の鶏肉が並ぶようになったんだから」母屋の奥さんは感動も新たに、その時を思い出す「地鶏とか、時には合ガモまで……。あたしねえ、それまで合ガモっていうの知らなかったのよ。で、舅に言われちゃった、カモがネギを背負って来ると言うだろうがって。だ

けど、あの鴨って、合ガモのことなのかしら？」

さあ、私もよくは知らない。知らないが、今も鳥つ根の店の品揃えが立派なのは事実だ。引越してきたとき、それにはすぐに気がついて感心した。

「品質はよくなったんだけど、ついでに値段もずいぶんよくなったの。それはそうなんだけどね、でも良い品があると評判になったら、ちよつと遠くの人もわざわざ買いに来るようになったのよ。それで結局、お店は前より繁盛するようになったってわけ。ほらあ、このへんで、ぼうつとしてるけど、そんなに悪くない住宅地だし、ひまな奥さんも多いからね、そういう評判の店があると、口コミでお客さんがどんどん広まるのよねえ」

奥さんの言うとおりだ。ほんとに小さな商店街なのだけど、鳥つ根の店だけは、近所で見かけたことのない人が買いにくる。店の空気に艶とでもいうか、よそいきの張りつめたものがあつて、ちよつと構えた気分になる。少なくとも、その三軒先の和菓子屋さんとはまったくちがう。

この和菓子屋ときたら、ふつうのしもたやのガラス戸二枚を広げて棚を置いただけの店で、看板もない。何という店なのかわからないので、母屋の奥さんに、「あの和菓子屋さん、なんていう店ですか？」って聞いた

ら、「村田さんていうのよ」と答えた。それは名字であって、店の名ではないのではないか、私はそう思ったけど黙ってた。軒下に下がっている《手づくり》と書いた札などなくても、見れば一目瞭然の手作りの店で、たいていは誰もいないので声をかける。すると奥から、おばあさんのようなおじいさんが出てきて、売る気もないみたいなお顔をして売ってくれる。一つくささいと言っても、ぜんぜん恥ずかしくない。ところが、その売る気もないようなすあまやうぐいすもちが絶妙な柔らかさで、ほんのり薫って、減法おいしい。

鳥つ根と田村さんの二軒が、このあたりで私のお気に入りのお店だった。夕方遅くなると品物がなくなってしまうことでも、この二軒は同じだった。もつとも、その理由はだいたいがっていたのだけど。

母屋の奥さんにとっては、板前のような紺色の和服をきた主人がほんものの「鳥つ根さん」であつたようだが、私がここに引越してきた頃は、もうその人はほとんど店に姿を見せなくなっていて、代わりに真っ白なコック長スタイルの長男が立ち働いていた。面長の青白い顔で、板前にしてもコックにしても包丁を握るのには似つかわしくない、ちょっと知的な顔つきをしている。

「そうね、鶏肉屋なんかするのはあまり気が乗らないのかもねえ」

息子の話になると、奥さんの口調はとたんに素っ気なくなる。

「あの子ちいさい時、ほんとに泣き虫でねえ。なんかつていうとべそべそしてたの。睦子と同じ年なのよ。幼稚園から中学まで、ずーっと同じ学年。だから、よく知ってるの、小さい頃から」

うんざりしたような口調だ。

睦子さんというのは、母屋の長女の名前である。結婚して、電車で小一時間のところに住んでいるのだが、時々子どもを連れて遊びにくる。遊びに来るといふよりは、子どもを預けにくるといったほうがいいみたいで、まだ上の女の子が赤ん坊の頃から、やってきてしばらく母親と話していたかと思うと、赤んぼうを残して一人で出かけてしまう。

すると奥さんは、私がいれば必ずといっていいほど、その子を抱いて離れへやってきた。赤ちゃんというのとはほんとに成長が早くて、いつもその前に見たときよりも目に見えて変化している。それを見るのは、私にとっても大きな楽しみだった。それが休日で、私がのんびりしていると見ると、奥さんは私に赤ちゃんを預けて、そのひまに家事をしたり、近所に簡単な買い物に行ったりすることもできる。

「ほんとうに、節子さんがいてくれて大助かり」と奥さんは言い、
「久美子も節子おばちゃんにアチヨンデもらってウレチかったねえ」

赤ちゃんの背中をトントン叩きながら、あやすのである。久美子ちゃんは、またまた笑顔をふりまき、それはほんとにかわいい笑顔だったので、そのどきくさに、私は生まれてはじめておばちゃんと言われたショックを乗り越えた。

睦子さんは、私が越して来たときには確か二十七歳、久美子ちゃんはまだお誕生前だった。とすると睦子さんと同年の鳥つ根の若主人も、当時二十七歳だったことになる。

大学も卒業した。「何とかいう私大の商学部。ですが後を継ぐ気なんぞ、ハナからありやしませんよって、鳥つ根さん言ってたけどね」

卒業後は会社に勤めた。しかし思ったほど面白くなかったのか、数年後に止めて、鳥つ根の店に出るようになった。

鳥つ根の若主人が結婚したのは、その次の年ではなかっただろうか。もっぱら若い男たちだけが立ち働いていた店に、ある日、見たことのない若い女性がいた。パーマをかけた髪をふっくらとまとめて、色白の丸顔にピンクの口紅を引いた、なかなかの美人だった。これまで白木の大まな板と

真つ白な冷蔵庫のあいだを白衣の男たちが行き交っていた店内では、その人が着ている黄緑のセーターが場違いに見えるほど色鮮やかだった。

声もはきはきしていて、通りがいい。

「ねえねえ、鳥つ根さんとお嫁さん、短大出てるんですって。すごいじゃない、それに美人じゃない。よくそんな人が来てくれたものだよ、あんなグズの泣き虫のところに。やっぱ家が良いいかしらねえ」

いまだに若主人が小学生だったころの印象を変えようとしないうちに母屋の奥さんは、ちよつと口惜しそうに言ったが、それでもケチのつけようのないお嫁さんだと思っていることは、その口ぶりからも感じられた。

一年もした頃には、鳥つねの店はすっかり若奥さんに仕切られているように見えた。お客が入ってくると、

「いらっしやいませえ！」

すかさず、女の明るい声が響きわたる。なじみの客だと、お愛想の一つも言う。返事によつては笑い声で応じる。ひまな時なら、じっくり世間話もする。そうしたことが以前の鳥つ根の店にも無かったわけではないのだけれど、しかし、若奥さんから発散するエネルギーなものが、店の雰

困気をまったく変えてしまったのだった。

いまの若主人は寡黙に奥で働いているという役回りだった。客の注文を聞いて分からないことがあると、若奥さんがそれを主人に向かって繰り返す。主人は女房に小声で応じ、それを女房がしっかり自分のことばにして客に返す。客にとっては、若い女がこの店の顔で、主人の存在はまるで店の奥の暗がりにな置かれた重石のようなものだった。

それで店が繁盛するようになったのかどうか、私にはわからない。少なくとも品物の品質には変わりなかった。ムネ肉は柔らかいのには弾力があったし、もも肉にはしつかったコクと甘みがあった。スーパで買うパック入りとはまったく違っていた。母屋の奥さんの言うところによれば、以前と同じところから仕入れて、昼のうちに「ほんものの鳥つ根さん」が目を光らせて仕分けをしていたようだし、若主人も奥でしっかり働いている。かんじん要は以前と少しも変わってはいなかったはずだ。

若夫婦の仲がどうだったか、これまた私などには知るよしもないのだが、外見には円満このうえもないように見えた。少なくとも、大学を出て一人暮らしをしながら会社勤めをしている私から見れば、夫婦揃って同じ狭い店のなかで働く毎日など、傍目にも照れくさいような、眩しいような光景

に思われた。

そうした印象は、他の客にとっても同じだったのかもしれない。

ある日のことだ。早く引けた会社帰りに鳥つ根の店に寄ると、見るからに主婦めいた中年女性が一人、先客でいて、若奥さんと世間話をしていた。

「ああら、そんなあ、ただのお見合いですよ」

はなやいだ声で、若奥さんの応じたところをみると、客の女性はふたりのなれそめについて何か艶っぽい冗談でも言ったのかもしれない。

「ねえ？」

そう同意を求めるように若奥さんは店の奥で大きな調理台に向かっている夫に声をかけた。だが夫は向こうを向いたなりで、何とも答えない。その動かない背中をしばらく見ていた若奥さんは、そのまま目を足元に落とした。彼女の心の中を、何かが静かに沈んでいったようだった。小さな石が波紋も立てずに沈んで見えなくなるように……

やがて赤ちゃんが生まれた。女の子だった。それでも若奥さんは店に出ることをやめなかった。店では以前にもまして張り切っているように見えたが、そのかわりに、しばらく姿を見ることのなかった先代の奥さんが、また時どき現れて、赤ん坊の世話をしていることがあった。先代の夫婦は

元からこの店に住んでいたわけではなく、道を二筋ほど奥まった、そのぶん閑静な住宅地に昔からの家を構えていた。つまり「鳥つねさん」はそこへ婿に入ったのであって、いつもそこから店へ通っていたのだ。先代の若夫婦にとってはたぶん、店は舅姑の目の届かない自分たちだけの空間であつたにちがいない。

とうぜん若主人もその家で育つたが、結婚と同時に家を出て、鳥つねの店舗の奥を今ふうに改造して住むようになっていた。

鳥つねさんもすてきだったけど、奥さんも上品だったのよお、いつもきちんと着物をきて、真っ白い割烹着をきててねえ、と母屋の奥さんは言うのだけれど、私はそういうところは見たことがなかった。私がここへ引越した頃には、もう店には出なくなっていたからだ。私をはじめてその人を見たときは、セーターにズボンという何の変哲もないふだん着だった。たしかに、ものきれいな身じまいではあったけれど、孫の世話をさせられている祖母という、どこにでもいそうな初老の女性でしかなかった。私が彼女をそれと知つたのも、たまたま彼女が息子から「かあさん」と呼ばれているのを耳にしたからだつた。

孫の顔が見たくて自分から出向いてきたのか、あるいは息子夫婦に頼ま

れてしかたなく孫の面倒を見ていたのか、裏の事情は私などには何とも判断のしようはないのだけれど、ヨチヨチ歩きの子どもの上にかがみ込んでいるその女性の表情には、いそいそしたところが少しもなくて、ため息つきつき、うんざりしながら、押しつけられた仕事をしているように見えた。まれに顔見知りの古いおなじみさんが来ると、そのときだけは話に熱中しているが、話題はもっぱら体のあちこちの不調のこと。といって、そんな重大な病気というわけでもないらしい。わがままな跡取り娘が、不自由ないぶん不満の多い中年女になって、自分のことで頭がいっぱいというのが、ありそうな筋ではなかっただろうか。その人と若奥さんがことばを交わしているのは、ついぞ見たことがなかった。

その若奥さんとは言えば、じつに張り切って客の応対をしている。誰の手にも委ねようとせず、すべて自分ひとりで客の応対にばかり切っているところは、ほとんど意地になつているようにさえ見えた。どうしてそんなに熱心でなくてはならないのか、客の一人である私にも理解しがたいことだった。もとは先代の夫婦の店だったのだし、彼女が嫁に来る前は、たまに弟が手伝うくらいで、ほとんど若主人が一人で切り回していた。それで十分やっていけるほどの店の大きさなのである。乳飲み子がいるのに、そ

の世話を誰かに頼んでまで店に出なくても、立ち行かないはずはないと思われた。

最初の子は女の子だった。女の子だったが、まるで男の子みたいだった。赤ん坊に男も女もないようなものだけれど、私がお子に多少とも心を留めたのは、生まれたのがたまたま母屋の孫の久美子ちゃんと数ヶ月違いで、赤ん坊を身近に見る機会があったからだ。それに母屋の奥さんから聞いた話では、鳥つねの若奥さんは私と同じ歳のようだった。自分と同じ年齢の女性が子どもを生んで育てているということに對して無関心ではられない何かが、私のなかにもあったのかもしれない。

ほんとに、鳥つねさんちの赤ちゃんは男の子のようだった。

それに引きかえ母屋のクミちゃんは目鼻立ちも穏やかだったし、抱くとこちらの腕の中にすっぽりと収まって、溶けてしまいそうだった。クーちゃん！ とあやすと、こちらが恥ずかしくなるほどトロリと甘えた目をして笑う。女の子は、いや女というのは、こんなにちいさい時から他者に身を委ねるようにできているものなのか、私は腕の中のクーちゃんを揺すりながら、深く気づかされることがあった。

ところが鳥つねの赤ちゃんはどうもそうではなかった。髪が生えそろう

ていなくて、坊主刈に見えたせいもあるが、なにしろ活発で、抱いているおばあちゃん腕の中で激しくあちこちと向きを変える。おばあちゃんは「おっとっと！」と言いながら、自分の腕の中の赤ん坊を追いついて回しているみたいだった。

「落ち着きのない子だよ、まったく。いったい誰に似たのかねえ。あんたのおとうさんはこんなじゃなかったけどねえ」

鳥つ根の大奥さんは、そうでなくても病弱で疲れているのに、そのうえ子守までさせられてという思い入れで、言うのだったが、若奥さんのほうは聞こえているのかいないのか、振り向くことさえしなかった。

赤ん坊のお守りが思いの外に重労働だと知ったのも、その頃のことだ。体力が要るだけでなく、精神的にもなかなかきつい。母屋の奥さんの手が足りないとき、クーちゃんを見ていてあげるのは確かに私の楽しみだったけれども、それも小一時間もつづくと、早く迎えにきてくれないかしらと思ってしまう。一時間でそうなのだから、丸一日、そして次の日も、また次の日もとなれば、心が出口を失ってしまうだろう。自分の子でも孫であっても、責任をもって世話をするとすると、気持ち詰まってしまう。母屋の奥さんにしても、娘と孫の顔を見たいのは山々なのに、それでも愚

痴をこぼすのである。

「睦子もわがままなお嫁さんよ。私なんか里が遠かったから、そんなに簡単には帰れなかったし、姑がいたって、預けて遊びにいくなんて、とんでもなかったもの。お炊事しているときぐらいお守りしていてくれればいいと思っても、あんまりやってくれなかったわねえ。おんぶして水仕事してたから、肩は凝るし、それで胃下垂になったのよ」

胃下垂とはどうてい思えないふくよかなお腹をなでながら言う。

「ほんと、胃下垂だったのよ、若い時。すぐくやせてたし。こんなに太ったのは、そうねえ、健郎が大学に入ってから

じゃないかしら。それまでほんとに苦劳ばかりだったのよ、これでも。でもね、だから睦子には楽をさせてやりたいという気になるの。自分の娘だしねえ」

そのとおり、何を言っても傍目には幸せな母娘である。

「でもね、正直いうと、孫はかわいいけど、一回十分くらいでたくさん」

私のことはつい忘れたらしく、まことに正直な感想を言う。確かにそうだろうと、私も深くうなづく。

でも睦子さんは、どうもそんな母親の思惑をまったく気にせずにいるよ

うだ。たまたまクーちゃんを引き取りに私の離れまで来るようなことがあると、

「来い来いって、うるさいの。親に子供を見せに来るのもひと仕事」なんて、ケロリとした顔だ。

「お守りもけっこう大変なんじゃないですか」と言うと、

「そんなことでもしなきゃ、ますます太る一方でしょ。親に苦劳をかけるのも親孝行のうち！」

そんなものなのだろうか。そうなのかもしれない。親の近くに住んでいて、子どもが生まれたら、私も同じことをするのもかもしれないし、同じことを考えるのかもしれない。

とはいえ、子どもの成長は他人の目にも驚きにみちている。たまたま私がそういう方面の感受性が活性化している時期だったのかもしれないが、鳥つねさんの上の子についても、私の脳裡に何枚もの印象的なスナップ写真が永久保存されることになった。

あれは生後十ヶ月ぐらいだったか、釣り銭を待ちながらふと眼をやると、店と奥を仕切っている戸が細めに開いていて、そこから赤ん坊が見えた。仰向けに寝ころんで、足を柱にもたせ掛け、哺乳瓶をわしづかみにして、

遠い祭

ひとりでミルクを飲んでゐるのだった。クミちゃんのお守りをしなれてゐる私にも、それはちょっとびっくりするような光景だった。何ともユーモラスなのだが、じつに豪快でもあった。悠々自適の伸びやかさもあった。赤ん坊ながら、見ていて羨ましくなるほど、マイペースな姿だった。

そう言えば、よちよち歩きを始めた頃のことだ。ある日、店の土間を歩き回っている子に、帰りがけの女客が「ぼうや、いい子ねえ」とお愛想を言った。まだ髪の毛が坊ちゃん刈ていどしか生えそろうていなくて、それを上から見下ろしていたので、男の子に見えたのも無理はなかった。すると、

「スカートをはいてるのよねえ」

唄うような澄んだ声で、母親が言ったのだ。女の子なんですよ…でも、男の子に見えます？ でもない、まるで遠くの空に向かって語りかけるような言い方だった。

見れば幼な子は確かにスカートをはいっていた。薄いブルーの、ほんとに短いスカートだった。とても短くて、スカートだかパンツだか、よく見なければわからない布地から大きなソーセージのような足を出して、短い髪を振って歩いていた姿を、私は十年の後に胸の痛みとともに思い出すことになる。

になる。

と、母親はつと土間にかがみ、女の子をすいと抱き上げた。

「おでことおでこをごつつんこ」

小さな声で口ずさみながら、母親と幼子は額を寄せ合い、目を閉じて二人だけの世界に浸り込んでいる。母親の腕を覆ったアジサイ色の小さなスカートは、仄暗い店のなかに開けた二人だけの青空かと見えた。

後に鬼母のように言われたことがあったにしても、彼女は彼女なりに自分の子を育て、慈しんでいた。

大学を出て私が勤めた会社は、小さな出版社だった。といっても、書店の棚に並んでいるような、みんなが名前を知っている雑誌や本を出版する会社ではなくて、たとえばどこぞの研究所の年鑑とか、営業所の業務案内とか、そういう単発だったり年刊だったりするパンフレットを制作する会社である。

ある意味ではとても地味な仕事だ。たとえば人に仕事を聞かれて「編集

遠い祭

をします」と言うのと、たいていは「え、どんな本？」という期待にみちた答えが返ってくる。そういうとき相手は必ずと言っていいほど、書店の本を思い浮かべている。でも、私はまだ書店で売られる本を編集したことがない。で、しかたないから「***会社のパンフレット」とか答えると、「ああ…」とか「へえ!」とか、いずれにしても期待の風船がすーっとしぼむような顔をする。その瞬間が、私にはちよつと悲しい。でも、何度もうりかえし起きることなので、それには慣れなくてはいけないのだ。いつか、このちよつと悲しい感じを小さなジョークに変える方策を考えようと思っている。でも、今はまだ、できていない…。

地味な仕事なのだけど、でも予想外の面白さもある仕事だ。というのは、新しい注文のたびに、それまで考えたこともない世界に足を踏み入れることになるからである。

たとえば入社して始めてやらされた仕事は、乾物卸売りの店のパンフレットだった。

「あした松村くんがキノエシヨーテンの打ち合わせに行くから、君もいっしょに行きなさい」

そうデスクに言われて思わず、

「キノエシヨー?」と聞き返したら、

「カンブツ、カンブツ」と言うので、ますますわからなくなってしまうが、それ以上追求するのはまずいような気がして黙った。

翌日、言われたとおり待ち合わせの場所に行って、松本さんという先輩の後からついて行ったら、着いた先は「甲子乾物店」という大きな乾物屋だった。店頭には削り節とか、とりどりの豆、煮干しの類がわんさと並んでいる。甲子園と同じ字でキノエネと読むのかあ、と妙に感心していたら、頭の禿げた丸っこいかんじの紺の前垂れをかけたおじさんが出てきて、それが専務だった。

ご贈答品に入れるパンフレットがちよつと時代遅れになったので、新しく作り変えたいという注文だった。豆や煮干しを贈り物にする人なんているのかしら、と思いつながら松本さんの手の中のパンフレットを覗き込んだら、すべて文字だけで、しかもなんと旧仮名だった。水茎も麗しく「御結納」と書いてある。

「乾物店といえば、昔は結納の品揃えというふうに決まっておったのですが、昨今ではそういうもんは引くくめてデパートあたりで眺めるお方が多くて、ま、それもその次ぎにうちへ発注されては来るんですが、そう

いう古い習わしよりも何かこう、昔ながらの和食の味わいというか、新しい考え方でも宣伝したほうがいいちゅう意見があるんですわ。それでもまあワタシなんかは、やはり乾物屋は昆布に熨斗、たとえそれが今日きょうび使われなくってもですわね、伝統ちゅうか、精神ちゅうか、ですね、見かけどんなに時代が変わっても、変わらないものはやはりあるだろうと、思うわけなんですわ」

聞いているうちに私の頭は混乱して、何のはなしをしにきたのかわからなくなっていた（じつは最初からわかっていなかったのだ）が、松本さんは落ちついたものだった。

「おっしゃるように結納の図柄というのは、デザイン的には大変インパクトがありますし、顧客に与えるエフェクトという点につきまして、パンフレットとしても非常に効果的ではないかと存じます。たとえ単なる形式にすぎないとしても、結納の決まりごとというものが古来あって、それは乾物なのだと、これは御社の宣伝としては、何とも申しますか、基本的な戦略としてメインなコンセプトになりうるものではないでしょうか。そうした確固としたコンセプトは、弊社の経験から申しまして、年齢を問わず顧客の関心に訴えることができるものだと考えられます。ワタク

シなぞも、結婚するときには、しきたりどおりの結納をしたいなあと思いますもの、ホーツ、ホツホ」

三十に手が届くかどうかという年頃の松本さんは、締めくくりにちよつと恥じらいを見せ、晴れやかに笑った。

専務さんは妙齢の女性が専門用語をちりばめてまくし立てるのをほればれと眺めている。その日の打ち合わせは、結局おじさんの「うちの品物」の自慢に終始した。こちらにはこちらの専門用語があり、特にややこしい製造方法にまで立ち入って、ずいぶん長かった。それを松本さんは時々メモなんか取りながら、じつに辛抱強く聞いていた。そして専務が満足のいくまで話したと見たところで、おもむろに、

「では、今日うかがいましたことを盛り込みまして、御社の製品カタログに関しましてのパンフレットの試作品と申しますか、見本を幾つか作られて頂きます。それをお届けいたしますので、ご検討いただくといいことで、いかがでございましょうか」

きりりと真剣な表情で提案した。専務はおなかの底から納得した面もちでうなづき、

「それでけっこう、けっこうです。いやあ、宣伝を外の会社に依頼するち

ゆうのは、じつを申しますと、ワタシは始め気乗りせんかったのですじゃ。うちの品物はワタシらがいちばん知つとるわけですからに。物がよければ、宣伝なんぞせんでも売れる、思つております。んでも今風に宣伝するべきじゃ言うもんがおりましてなあ、そういう時代じゃ、言いましてエ、ま、ワタシが押し切られたんですわ。しかしお話を伺つて、シヨージキ、考えを改めました。いやあまったく、餅は餅屋ですなあ。よろしくお頼み申します」

広げた両手をがっしりと膝に置いて、頭を下げた。松本さんもきつちり頭を下げ、専務さんが頭を上げるまで、そのまま姿勢を崩さなかった。私もいっしょにお辞儀をしたのだけれど、もういいかと思つて頭を上げかけたら、まだ二人とも下げたままなので、もう一度、もっと深く下げた。専務さんはポン、ポン！と手を叩いて、若い社員を呼び、私たちにお土産を持たせてくれた。

「昆布茶です。わが社の新製品ですわ。むかしは乾物屋はこんなもん売らなかつたもんですがねえ」

若い社員が私たちに渡すのを見ながら、専務さんは言った。こぶ茶だいきの私は、とてもうれしかった。

帰り道、松本さんは上機嫌だった。もっと手間がかかると覚悟してたけど、あんがい早くすんだわ。そう言つて、にと笑つた。私は、専務さんの言つたことが頭の中にごちゃごちゃになつていたので、なにがなんだか分からなくなつてしまつたと、小さい声で言つた。

「わたしだってぜんぜん分からなかつたわよ。そんなこと、どーでもいいの。これから本読んで乾物の勉強して、もらったパンフレットをちよつぴつと参考にして、あくまで自主的に作るのよ」

「それじゃあ、今日行つた意味がないじゃないですか」

「そんなことないわよお。ひとつ仕事が決まつたじゃないの。ここでチャラだったら、行つただけ損だけど。こんど見本持つてくでしよ、そうすると向こうがまた、ああだこうだ、訳のわからないこと山ほど言うから、またトコトン話を聞いてあげるの。そんなこと二、三度くりかえしてるうちに、なんとかまとまるのよ。最後はねえ、たいていのクライアントは自分でパンフレット作つたような顔するから。で、すごく満足するの。見ててごらんなさい」

松本さんの言うことはなんだかマツバだと、そのときは思つたのだが、結果としてはほんとうだった。松本さんに言われて、私は乾物の本を何冊

か読み、それを整理して彼女に報告した。彼女は私を雑用に使いながら、当たり前散らし励まして、何度かデザイナーさんと打ち合わせし、二ヶ月の後にはスマートなパンフレットの見本を三種類、作り上げた。

そして半年後に、この仕事が終わったとき、私は乾物について少し物知りになっていて、食器棚にはいくら飲んでも減らないこぶ茶があった。

もともと私が入りたかったのは出版社だった。で、大学の就職センターで出版関係の会社を探して片端から受けたのだけど、名前が知られている大出版は片端から落ちてしまった。出版業界はすごく人気があったから、期待も薄かったし、だから落ちてははじめのうちはあまりメゲなかったが、さすがに残すところこ一社となったときは焦った。で、通りすがりの神社をみかけると、お願いしますと頭を下げた。その祈りが通じたのか、最後の一社で拾ってもらえた。スベリ止めということばを身に痛いように体感した内定だった。

入ってみたら、じっさいにやっているのは想像していたような出版ではなかった。

それで改めて出版とは何か考えみたら、自分のイメージそのものも曖昧だったことに気がついた。まあ、就職運動の最後に拾ってくれたことだし、

東京暮らしを可能にしてくれた恩人でもあることなので、感謝して勤めることにした。

入社して一か月ぐらいした時だったか、そう、初仕事の乾物屋の契約がとれた次の土曜日、大学時代の同級生数人で集まる飲み会があった。みんなが入ったばかりの会社でどんな仕事しているのか順繰りに話していて、私もグダグダと説明したら、

「それって出版社じゃなくて、広告業界なんじゃないの。いま流行じゃない。かっこいいねえ」と言われた。

えっ、そんなことないでしょ、とその時は焦って、そういえばそうなのかも、と思って、つぎの週に松本さんに、この会社は出版社なのか、と小声で聞いた。

「なに言ってるのよ、あんた、自分のいる会社のことじゃないの、ちゃんと分かってなくちゃだめでしょ」

松本さんは笑いながら大きな声で言って、まわりの人たちに、

「この子ったら、この会社は出版社なのですか、だって。あっはっは」

私は顔がかあっと熱くなった。たぶん真っ赤になっていたと思う。

「出版社なんだよ、元はねえ」

と、部屋の反対側に机を置いてある四十代の男の人（その時はまだ名前を覚えていなかったのだが、山崎さん）が、これまた笑いながら応じた。「ああら、いまだってれっきとした出版社なのよ。少なくとも、そのつもり、会社自身はねえ」

松本さんがそれを受けて言った。会社自身という言い方がおかしくて、部屋中が笑った。松本さんて、こういうところであつとセンスがいい人なのだ。乾物屋さんの専務さんの前なんかだと、シトヤカお姉さんとテキパキ・キャリアアウーマンの二つの顔をじつに上手に使いこなしたりするのだけれど、素顔はガラッぱちの江戸っ子だと私は思い始めていた。で、ときおりジョークのヒットを飛ばす。江戸っ子だと思っただけ、小さいときから東京のことをよく知っているような口ぶりだったから。もつとも、「松本さんは江戸っ子ですか」と聞いたら、「ケ、埼玉育ちよ。あんた古いねえ、江戸っ子なんて」と言われた。どう違うのか、よく分からない。私が言ったのは、東京あたりで育った人という意味だったのだけだ。

で、松本さんのおい話ししてくれたところでは、うちの会社「マガジン・ホープ」は、先代の社長が大いなる野心をもって創立した純然たる出

版社だったのだそう。先代社長は総合雑誌を刊行したいと考えていた。いや考えていただけでなく、じつさに刊行したのだが、資金がつかなくて月刊を季刊に変更したり、それも続かなくて休刊を繰り返して、ついにはそれが半永続的になっていくあいだに亡くなってしまった。雑誌がではなくて、社長が亡くなってしまった。

元も子もなくなってしまった出版社の後を継いだのは、中くらいの商社会社でサラリーマンをしていた息子だった。彼はもともと父親のロマネスクな野心を冷ややかに見ていたので、残された会社を出版社として大きくしようという努力はしなかった。そんな気はハナからなくて、それよりももっと業務の幅を広げて、総合雑誌ならぬ総合編集出版業みたいなことを志したのだそう。私が入社する十五年くらい前のはなしである。

「そしたらさあ、そのほうが会社の業績がよくなったんだって。まあ、社長は元商社マンだからね、せっせと外回りの営業して、次から次ぎにいろんな仕事取ってきた。そういうところは先代とぜんぜん違っていらした。先代はね、池島晋平みたいな大編集者になりたいっていうのが夢だったんだって。だからいつも編集部奥の大机にどーんと座って、原稿や校正の山に囲まれて、世相に対して檄を飛ばしつつ社員を叱咤激励してるのが

大好きだったんですって。でもいまの社長は会社にじっとしていることがほとんどないでしょ。新しいインクの匂いかぐと、頭が痛くなるっていうんだもんね。親子で正反對なのよ」

そもそなぜ就職のときに出版関係を選んだのかというと、大学が国文科で、周囲が教職か出版関係を志望するのが当たり前みたいな雰囲気があった。先生になるというのは気が進まなかったし、自然に出版業界と思っただけ、そう考える下地には、高校の新聞部の経験があったかもしれない。高校一年のとき、部活に何を遊ぶか迷っていたら、親友が新聞部に入るというので、引きずられていっしょに入った。彼女はお父さんが地方新聞の記者だったせいか、新聞作りにえらく情熱を持っていたけど、私はそれまで新聞のシモ、編集のへも考えたことがなかった。でも見よう見まねで大きな紙に割付なんかやったのが妙に楽しくて、生まれてはじめて手作業に熱中して時を忘れるという体験をした。二行、三行を足したり削ったりしてその結果、印刷所からきれいな新聞が届いたときの感激は、何ともたえようがなかった。親友のムラちゃんは記事を書いたり、校長先生にインタビューをしたりするのがすごく嬉しいらしくて、そういう日は目尻もピンとつり上げて張り切って出陣する（でも本心は少し怖いので、いつ

も私にいっしょに行こうと言う）のだけど、私の方は出てきた原稿を整理したり、シコシコ地道に校正したりするのが自分でも意外なほど楽しかった。

自分ではつきりそうと自覚していたわけではないが、出版業界を選んだ気持ちの根っこには、あの部活のような作業と時間だったら続けていけるのではないかという漠然とした思いがあったのかもしれない。就職活動をしているときには、なにしろ世間で脚光を浴びている雑誌とか単行本のほうが目先にちらついて、じっさいに会社に入って何をするかということまで気が回らなかつたけれど、いまこうして自分の会社で仕事をしてみると、もしかしたらこれがを自分でも気づかずに望んでいたことだったのではないかと思えてきたのだ。

出版社のつもりで入った会社は、入ってみたら予想とは少し違っていた。それでもそんなに意外でもなく、じつはこれが私にいちばん向いていたというような感じもある。そんなことを言うと、あまりいい加減なようだし、そうでなければ負け惜しみと取られそうなので、口に出して言ったことはないけれど、ほんとうはそれが正直なところなのだ。そうなるうと思いい詰めてしたことではないけれど、気がついてみたら、これはこれでよかった

のだ、こうなるべくしてなったのだと思っっている自分がいた。そう思っ
ている自分も好きだった。

時間がちよつと自由なのもうれしいことだった。ちよつと自由というの
は、すぐく自由なわけではない、ということ。その微妙なところがだいじ
だ。決まりは九時―五時だから、ふつうの会社と変わらない。で、私はち
やんと九時に行く。ラッシュアワーにばっちりぶつかるので、それは大変
なのだけれども、そのところを一本ネジで締めておくと、あとは誰にも
文句言われないという安心感があつて、これが精神衛生にとってもいい。だ
つて、私の二年前に入つた倉田さんは朝がルーズで、日によつては十時過
ぎに出社すると、もうあらかたの顔ぶれが揃つていたりする。そうすると、
まずは、ドウモスマセン！を連発し、結局一日中、スマセンという
顔を引きずることになる。それで、五時になつても仕事が片づかないこと
があると、満面の笑みに力を入れて「あ、いいです、いいです。私がやつ
ときます」と言うことになる。彼女はそれで遅い出勤の借りを返している
つもりなのだ。ほんとには彼女より前に出ていた人だつて、それほど仕事を
やっていたわけではないのだけど。でも私はちゃんと九時には出社してい
るという、小さくて大きなポイントを稼いでるので、何もいわずに「す

みません、では」の一言で帰ることができる。私つて、ほんとにはズルい奴。

それでも倉田さんは、「この会社、時間にうるさくないからいいのよね
エ」と、その点ばかりに至極ご満悦だ。早く出てきたら、もつと自由にな
るのじゃないかと思うのだけど、どうしてもそうはできない。したくない。
そうしなければいけないなら、この会社にはいられない、と言うのだから、
しかたがない。それで、倉田さんは傍目にもすぐく仕事をたくさん抱えて、
「スマセン」と言いながら満足している。

もちろん、五時には必ず帰れるというわけではない。小さなパンフレッ
トでも、納入期限に間に合わなかったらそれこそ一大事、もう契約は取れ
なくなるから、そんな時は長時間の残業になる。一日中印刷所に詰めて、
夜の十時過ぎにやっと開放ということだつて、それほど頻繁ではないけれ
ど、まったくないわけではない。家に仕事を持ち帰ることだつて、しよつ
ちゅうだ。朝の遅い出勤だつて、前の晩にたっぷり寝てる時間がなかった
という理由は立つのである。

でも、そんな時もあるから、その必要がないときには融通がきく。この
会社では、外の打ち合わせの後なんか、電話一本入れておけば、行動はか
なり自由である。会社に居つづけで息が詰まりそうになると、「ちよつと

調べ物してきまーす」とか、「資料探してきまーす」とか、かんたんな口実をもうけて外出することも割と楽にできる。そのあたり、どうも新社長がすぐに外に行きたがる質だというのが幸いして、お互いうるさく言わないという習慣ができあがっているらしい。

定刻出勤の私も、遅刻常習犯の倉田さんも、この会社は時間が自由だと喜んでいいる。私は人の後にくっついてそこその仕事をし、倉田さんは何やかにや両手いっぱいの仕事を抱えて、どちらもけっこう満足している。ふしぎである。これでもうちよつと月給が高ければ言うことはない。この点でも、二人は同意見だ。その他には、接点はほとんどない。

早く帰れた日には、納豆を買うのが楽しみだった。鳥つねの店の斜め四十五度向かいに古びた豆腐屋があつて、自家製の豆腐を売っていた。

この豆腐がじつにまずい。いや、まずいと言うより、たぶん下手なのだ。なにしろ日によって固さがちがう。これにはさすがに私もあきれて、母屋の奥さんに、

「あの店のお豆腐、あんまりおいしくないですね」

と言った。まだ越してきて間もない頃で、その頃は奥さんのほうでも、生活に便利な近所の情報をあれこれ教えてくれている、いわば私の仕込み期

間だったので、そのご教示、ご指導に応えての感想だった。奥さんは、

「そうかしらねえ、困ったわねえ」

と、まるで他人事のような遠い眼をして、そのくせ自分が後ろめたいような、いわく言いがたい表情で曖昧な返事をした。私は、なにか悪いことを言ってしまったのか、もしかしたら豆腐屋は母屋の親戚だったりのだろうかと、内心少しあせって、奥さんの顔を見たのが、奥さんはそれきり何も言わなかった。

豆腐のことはどうでもいい。スーパーでもどこでも買うことができるのだから。いかにも昔ながらの豆腐屋でござい、そんな佇まいが気に入ってはいたけれど、ただそれだけのこと。それ以上でも以下でもない。奥さんの気分を損ねてしまったかなあと、いつとき気にはなったけど、その次の日だか、そのまた次の日だけに上機嫌の奥さんを見て、それきり豆腐屋のことはすっかり忘れてしまっていた。

二度目に奥さんとお豆腐屋さんについて話したのは、それから二、三年後のことだった。

ある土曜日の夕方、久しぶりに銀座で映画を見て家に戻った私は、買い物帰りの奥さんに出会って、家までの道をいっしょに歩いた。奥さんは手

に下げた白い小さなポリ袋の中を気にして、少しイライラしているように見えた。

「いやだわあ、また崩れてる。これだから困るのよ」

奥さんがぶちぶち言うので、つられて覗いて見ると、袋の中には、お豆腐が一つ入っていた。薄いプラスチックのケースにはめ込まれたそのままで、濡れた表面を空気に晒している。スーパ一の、上下左右を完全に包装されたお豆腐を見慣れた眼には、その白く小さな直方体が生々しく夕方の風を呼吸しているように見えて、一瞬はつとするほど新鮮だった。しかし奥さんが腹を立てているのは、そのことではないようだった。

「柔らかすぎる日があるのよ。日によって違うの。柔らかいとねえ、ほら、見てご覧なさいよ、家に帰るまでに角のところから崩れてきたりするの。ね、欠けてるでしょ？ だからやなの、入れるとき、気をつけないからよ、あのおばさん」

奥さんは珍しく機嫌が悪く、言いつのっている。私にしても、ずっと前から言いたかったのはつまりそういうことだったので、そうだ、そうだ、と声に出して言いはしなないけれど、ちよつとばかり我が意を得たり、の感なきにしもあらずである。

「ほんとに、気の毒だと思ってわざわざ買ってあげてるのに、これじゃしようがないじゃないの。やる気がないっていうのか、それともやつぱりバカなのかしら、あのおばさん。ねえ、お豆腐ひとつ作るにしても、才能ってもんがあるのよねえ」

私に聞かせる気なのかどうか、言いつづけているが、私としては何て返事をしていいのかわからない。相づちの打ちようがなくて困っているうちに、表門に着いてしまった。ところが、ここで別れるのだと思っていたら、奥さんはまだ気持ちの整理がつかないのか、あるいは豆腐の文句だけで去るのは区切りが悪いとでも思ったものか、もう半身は玄関のほうに体を向けた体勢で、

「あのお豆腐屋さんねえ、昔はこのあたりで一番おいしいお豆腐を作る店だったの」

と言った。流れとしては、さよならに代わるメめの一言だったが、内容的には納まりが悪い。で、付加的説明として、

「まだあのうちの親父さんが生きていた頃のはなしだけど…」

しみじみと、言った。これがまずかった。話がこういう展開になった時はぜったいにひと高座ぶち上げないでは収まらないのが、町の語り部たる

奥さんの習性。しばらく部屋には入れないと、私は覚悟した。

「親父さんが亡くなったのは、あれはいつだったかしらねえ。あの息子が確かまだ中学生だったし、それにうちの姑の三回忌をやって、その後の挨拶でお寺へ行ったら、和尚さんが豆腐屋がそろそろ危ないって。ねえ、お寺の和尚さんで地域の病人のこと、よく知ってるのよお、さすがだわね、やっぱり職業上の情報なのかしら」

奥さんは突然、遠くを見遙るかす語り部の面差しから眉根を寄せて額を突き出す井戸端会議の口調に急転直下する。そのシートが聴衆に与えるシヨックの快よさも、じゅうぶん計算のうちだ。私も、しみじみするやら、おかしくなるやら、首を縦に振ったり横に振ったり聴衆活動に忙しい。

「だとすると…、もう10年になるのねえ。月日のたつのは早いものだわ。ほんとよ、あつという間に歳取るの。とくに女はねえ」

私をじつと見つめて言った。まるで何か、他にも言いたいことがあるかのように。今日は彼女、虫の居所が悪い。しかも照準の当て方がややコントロールを欠いている。その矛先がこっちに向いてきた予感で、私は少々緊張する。

「でね、その頃までは、とてもおいしいお豆腐屋さんだったのよ。親父さ

んがすっかりしててね、親父さんていったって、まだ若かったんだわよねえ。でも親父さんて感じだったわね、他に言いようはないわ。私より若かったけど、でもずつと前から親父さんて思ってた。すっかりしてたからね。だって夫婦二人して働いて、あの店持ったのよ、まだ若いのに…。その頃はほんとにおいしいお豆腐だったの。朝早くからお豆腐作って、ずつと前なんか、日に二回も自転車で売り歩いてねえ、お昼と夕方と。で、おいしいし、お豆腐って買いに出るの、ちょっと面倒じゃない、だから二日に一度は寄ってちようだいって約束で、ううん私が頼んだんじゃなくて、姑が仕切ってた時代からそういう約束になってたのよ。姑はその親父さんをちよつと顛覆にしていたのね、若くて働き者で、それに、張りのあるいい声じゃないか、なんて言って。ふふ姑^{はは}ってば」

またもや、お姑さんの登場。恩讐の彼方…。

「お豆腐屋さんて、ラッパ鳴らして売り歩くでしょ。あら知らないの？ そうなのよ。その鳴らし方に個性があるのね。あ、あのお豆腐屋さんだあって、慣れると聞き分けられるようになるのよ。ほんとだってば、聞いてすぐ分かるようになるの。で、あ、うちのお豆腐屋さん、て思っていると、それが裏門の前ですつと止んで、で木戸を開けるながら、そう、いま節子

さん専用になっているあの木戸ね、で、豆腐屋でござい、って言ったの。その声にサビがあるっていうのよ姑がね、ほんとに何度も何度もくりかえし言ってたわ」

奥さんも、私のために「豆腐屋でござい」を真似して、声色のサビを聞かせてくれる。しかし、ソプラノの奥さんが渋い男の声を真似ているので、いいのか悪いのか、よくは分からない。

「前からの出入りだからっていいことで、私が台所を預かるようになって、そのあと姑が亡くなっても、ずっと外回りのときは寄ってくれてたの。ま、二日に一度がそのうち週に二度でなふうに減ってはきたんだけど。ほら、だってうちも親は亡くなるし、子どもは出て行くし、所帯がだんだん小さくなったから」

ムキになって弁解している。私が当のお豆腐屋さんなわけでもないのに。きつと契約変更したときに断りを言うのに苦労して、そのトラウマが今も消えないのだ。

「そのうち、親父さんが体こわして前みたいに仕事ができなくなってしまうのよ。時々店を開めたり、また開けたりって調子でねえ。始めはそんなに長引くとは思ってなかったらしいんだけど、でもどんどん痩せていっ

て、かわいそうみたいだった。それで、しばらくは親父さんの兄貴分とかで、むかし同じ店で奉公した人が、その、玉電のふたつ先の豪徳寺でお豆腐屋さんやってるっていうので、その人が手伝ってくれたりしてたみたいよ。おばさんがそんなこと言ってたから。自分の店もあるから大変なんだけど、でも自分の店のほうは大きな子が手伝ってくれるようになって、何とかなるからって、言ってくれたんですって」

落語か講談かと言いたいほどの物語だが、ここまで詳しくなると、ほんとの話？　と言いたくなってしまふ。そこは面白い物ついでの話で、店先で聞き出したのだからけれど、奥さんの創作も、かなりの部分、混じっていないという保証はない。

「その頃はまだ、息子が小さかったからねえ。ぼうやが大きくなって何とか手伝えるようになるまで、がんばってみようかしらって、おばさん言ってたの。あ、山根さん知らなかった？　息子がいるのよ、あのうち。一人息子」

知らなかった？　とか言われても、私が商店街の一軒一軒について、どのうちにどんな子どもがいるか、知るわけがない。せいぜいが、母屋の奥さんの世間話でぼんやりイメージをつかむていどだ。それに、知って忘れ

られないような奇体な話でもない。どこにでもありそうな、つまらない話ではないか。それに私は、ここに越してきてまだいく日も月日がたっていない。とは思ったけれど、おとなしく領いた。このへん、われながら不甲斐なくくらい素直である。

「その子がね、ちよっと勉強ができるんですって。うちの裏の藤田さんちの下娘さんと高校が同級だったらしいのよ。勉強もできるし、それにかっこいいって言ってるって、いつか奥さんが言ってたわ。きっと親父さんに似たんじゃね。あのおばさんに似たんじゃあ、あんまりパツとしそうにないじゃないの」

そうかな、そうかもしれない。お豆腐屋のおばさんについてだけは、私にも薄ぼんやりとしたイメージがある。あまり身なりも構わないし、商売上手でもない、それは確かなのだが、でもふしぎに気のきいたところのある人なのだ。エスプリとでも言ったらいいか、お豆腐屋さんにエスプリなんて、変だけど。

ときどき、ふっと思い出すことがある。肝心の豆腐はまずいけど、この店の納豆はとてもおいしい。それで、会社から早く帰れた日は忘れずに買うことにしていた。買って、冷凍庫にしまっておく。納豆は冷凍がきくと

いうことを教えてくれたのは会社の松本さん。しかもその割りに味が落ちない。これはありがたい発見だった。だって私は納豆が大好きだから。買物している暇のないときでも、うちにおいしい納豆があると思うと、それだけでちよっぴり幸せになる。何とか生きていけそうな気分になる。

で、帰りの早い日はできるだけ納豆を買うことにしているのだが、これがけっこう面倒だった。というのは他の食料品はスーパーで買うので、わざわざ納豆だけのためにお豆腐屋さんに寄り道をするからである。ところがせっかく行っても、品切れのことがしょっちゅうだった。それというのも、毎日少ししか仕入れをしないからである。もともと客が少ないし、作ってる豆腐も少ないので、それに釣り合う量となると、納豆もほんの数個になってしまう。どうもそういうことのようにだった。その代わり新鮮である。

いつの年だったか、晚い春の一日、私は会社を早目に少し早めに退社した。つまり定刻の五時より一五分くらい前に出たのだった。その日は一日ちよっとグルーミーな気分、社にいてもはかばかしいことはできそうにないし、やりかけの仕事もちよっと行き詰まっいて、同僚の顔をも見たくない、そんな感じだった。

映画でも観ようか、デパートでプチ・アクセサリーを買おうか、と思ったのを結局やめにして、さっさと家に帰ることにした。玉電宮下の駅を出ると、町にはもう早いネオンがつき始めていたけれど、空にはまだしっかりと昼の明るさが残っている。それが何か、ものすごく贅沢に思えた。平日のこんな時間に、まだこんなに空が青いのに、仕事を終えて自宅の近くにいる。そのことで、日中の鬱々とした気分からちよつと開放された。

早く帰る予定ではなかったので、冷蔵庫のなかには当面の食料は収まっているし、これ以上貯蔵量を増やしてもしかたがない。そうだ、納豆を買おう。この時間なら残っているかもしれない。そう思っ、お豆腐屋さんに近づいて行くと、店頭の納豆のケースがまだしまい込まれずに残っている。それを遠目に確かめて、心持ち急ぎ足になった。と、同じ店をめがけてもう一人、近づいて来る者があるではないか。学生ふうの若い男だ。争う気ではないけれど、私は少し足を早めた。すると気のせい、向こうも早足になる。またちよつと急ぐ。向こうも明らかに速度を上げる。そんなふうで、私たちはほとんど同時に店に到着し、私はすかさず、

「納豆ください！」
声をかけていた。ケースには、納豆が一つしかなかった。

いっしょに到着した青年は、ゆっくり七つ数えるほどの時間、その場に立ちつくしていた。それから何も言わずに向きを帰ると、音もなく立ち去った。素足にゴム草履をはいているところを見ると、この近くに下宿している学生なのだろう。私の言葉を聞いて、そのまま立ち去ったのだから、彼も納豆を買いに来て、競走に敗れて空しく帰るのだ。店の奥の暗がりから、やおらおばさんが姿を現すまで、私は上目遣いでその後ろ姿を見送った。白い踵と細いアキレス腱が目についた。

おばさんは、これで納豆が売り切れたことにも別段の感想はないように、至極平静に納豆を包んでくれた。でも私が、

「悪いことしちゃった…」

学生の去ったほうを見て、小声で呟くと、彼女は

「何事もタイミングです」

思いがけずも潔く、アツケラカンと応えたのだった。そう言うところを見ると、一部始終を見ていたのだろうか。それとも、分からないままに当たり障りのないことを口にしただけなのだろうか。ひんやりと冷たく湿った三和土の真ん中に突っ立って、私の眼を見ようともせず、言い放つ彼女には、まるで山奥のさびれた神社の巫女とでもいった雰囲気があった。

その納豆を、私は心して味わいつつ、食べた。食べながら、あの学生は今夜、何を食べたのだろう、と考えていた。遠ざかる細くて白い踵が、幻のように目先にちらついた。若い男を押しつけて納豆を取ってしまった、と思った。学生と自分を隔てている年齢差を数えてみた。いつの間にか、あつかましい年齢になったのだと、自分を振り返った。ちょっと後ろめたい思いで食べた納豆は、恥ずかしさの隠し味のせいでいっそうおいしかった。

「そうお、そんなことがあったの？ そうなのよねえ、あのおばさん、ちょっとピントが狂ってるのよ。悪い人じゃないのよ、バカでもないの。でもどこかわわってるのよ。風変わりっていうのかしらねえ、ああいうの。だから息子があんふうになっちゃったんだわ」

母屋の奥さんは、私のかいつまんだ告白に相づちを打つついでに、厳しいことを言った。もっとも、私はその頃まだ、豆腐屋の息子がどんなことになったのか、詳しいことは何も知らなかったのだ、奥さんのやや言いかがりじみた感想も、ただ聞き流していただけたのだけれども。

「親父さんが病気になる前からよ、あそこのお豆腐が出来が悪くなったのは。まぶくなっただってというより、出来が不揃いになったのよねえ。まく出

来てる日があるかと思うと、なんだか水っぽかったりしてねえ」

なんだ、奥さんもわかってるんじゃないの。

「でも、しかたがないの、作る人が日によってちがうんだから。そんなふうになってからも、はじめのうちは親父さんが働ける日もあって、そうすると前と同じような品ができるんだけど、親父さんの兄貴分という人が作るお豆腐は、ま、それなりにおいしいんだけど、でも親父さんのよりちょっと硬めのね。ふしぎだね、お豆腐っていつも慣れてるものがないのよ。で、あんまり日によってちがうとね、柔らかくても硬くても、どっちでもいいから、どっちかにしてよって言いたくなるんだわ」

そう、そう、私もそう言いたい。そもそもそれを言ったのだ、最初に。「でもねえ、苦勞してるのを知ってたから、そんなこと、かわいそうで言えなかったのよ。それで、できるだけ買ってあげてたわけ、ずっと。それがいまだにつづいていうわけなのよ」

正直な話、ことお豆腐に関しては、このお豆腐屋さんのよりスーパーで売っているもののほうがおいしい。少なくとも品質がいつも一定で、それに安い。売り切れということがないし、包装がしっかりしているから、その日に使わなくても冷蔵庫での保存に便利だ。つまり、いいことづくめな

のである。それでも母屋では、お豆腐屋さんの豆腐を買いつづけている。それはたぶん、とても正しいことなのだろうと、私も思う。そのようにして、日々に、年々に、出来のちがうものを、作っている人の事情まで考えながら食べるのが、ほんとうは深い食べ方なのかもしれないけれど、でも私はそこまでつきあう義理はないので、お豆腐はたいていスーパーで買う。でも、納豆は…。

「納豆はおいしいですよ、あの店」

お豆腐を評価しないことの埋め合わせ、でもないけれど、つい声に力を入れて私は言った。

「そうね、でもすぐ売り切れるでしょ。その日に売れるぶんしか仕入れないから。納豆は冷蔵庫にいれちゃだめっていうのが、親父さんの主義だったんですって」

主義…。私は内心、憮然とする。納豆にまるわる主義…。だからこそ買いたての時に滅法おいしいのだと、改めて得心がいったけれども、でも私はその納豆をいつも冷蔵庫どころか冷凍庫で保存する。そうすると、解凍が完璧ではなくて味が今ひとつということもあるけれど、でも、これはおいしい納豆だと思いいこんでいるので、そこはそれ、自分の不首尾はやさし

く許して、おいしい納豆だと思って食べることができる。何と偽りにみちた私の食べ方。

「うちはあまり納豆は食べないの。舅が関西の出で、ずっと嫌いだったから、こどもたちも馴染がないのよ。でも、睦子がなぜだか好きでね、買ってきて冷蔵庫に置いてたけど、それはスーパーで買ってたみたい」

ほら見なさい、それが若い世代の納豆行動なのだ。

「そうね、確かに山根さんの言うとおりですよ、あの店のお豆腐はおいしくありません」

いや…、別に…、そう言っただけじゃないんじゃないの？ 私はある。「でも息子がおとなになって、家業をやる気になってくれたら、何とかなるかもしれないし、私もそれまではと思って、ようすを見ているんだけど。どうなることやら。あらあら、また遅くなっちゃった。ごめんなさい、お引き留めしたわね」

奥さんの世間話は、始まるときにも否応なしだが、終わるときも唐突だ。お豆腐と納豆でちやぐちやにかき回されたままの気持ちを抱えて、私は目の上の柿の木を眺めた。柿は花の盛りだった。小さな壺のような形の花が一面についている。小さいが肉厚の、しっかりした花だ。

柿の木というのはふしぎだ。なんだか、すごく温もりのある繁り方をする。木には体温があるわけでもなく、どれも一様に外気にさらされているのに、木によってなぜか涼しげだったり、妙に暖かそうだったりするのは、どうしてだろう。なかでも柿の木は、いつ見てもぬくぬくと、まるで体温があるような感じた。気のせいだということはわかっていてのだけれど、でもそんな気がするの、私だけのだろうか。

初めてこの家を見に来た日、この柿の木はもう実がかなり大きく、でもまだ葉と同じ青さで、繁った葉蔭に紛れていた。はじめは丸くて平べったい実に気がつかなかったのが、一つ目につくとこんどは次々に見えてきて、柿の実の大合唱が聞こえたような気がした。そのとき、この家に住もうと決心した。

その柿がいま、何度目かの花をつけている。

クリーム色の小さな花は、数ヶ月の後に大きな実になるのが信じられないほど小粒で地味だが、篤実な優しさがあって、実と同じくらい私は好きだ。人目を引かないけれど、着実な実りをもたらす。柿の木に何度か花を咲かせた歳月は、この平和な住宅街のあちこちにも小粒の花と大きな実りをもたらしているはずだった。

第二章

「いつのまにか君も五年選手になっちゃったねえ。一つの会社に五年居つづけられれば、あとは何とかやってけるよ。辞めるのは、ほとんど五年以内だ」

沢田さんにそう言われたとき、誉められてるのか貶されてるのか、わからなかった。萩原さんは、名目は人事課長である。と言っても、別に人事課という看板がついた立派な部屋があるわけではなくて、みんながいる部屋の隅を可動式の衝立で仕切った場所が彼の城だ。その仕切も、何か特別の事情があるときを除けば、たいして畳まれているので、萩原さんはいって大部屋の隅から斜めにみんなを見渡している。

辞めるのはほとんど五年以内、と沢田さんは言うけれど、松本さんによ

れば、「それはうちの会社が楽だからよ」となる。楽なので一応は続くのだけれど、発展性がなくて、退屈してしまうのだそう。人生このままじゃいけない、そう思って辞めてしまおう。そう感じるのが、ちょうど五年足らずなのだそう。

「これをもっと派手で、もっと忙しい会社だと、人と仕事にしがかれて、疲れて辞めちゃう。その場合は三年でとこらしいけど、うちはその逆」

そう言いながら、松本さんはムフフと笑った。松本さんはじつは小説家志望で、それでこういう楽でパツとしない会社が自分には向いていると達観しているのだそう。「そうでなきゃ、もっと給料のいいところ狙うわよ。でもそしたら忙しいからね」

そう言って、仕事が早く片づいた日など、浮き浮きと帰っていく。とは言っても、この五年間に小説が出来上がったというはなしは聞いたことがない。たぶん、小説家志望という生き方なのではないかと、私は思っている。そういう生き方だってあっていい。あすなろうみたいに、遠くの星に向かっているという姿勢がだいじなのだ。松本さんの日常にはそれがある。

では、五年勤めた私には何があるのだろうか。徐々に慣れたという実感があるだけ。それは人に自慢できるようなものではないが、自分では納得の

いくものだ。快いといってもいい。はじめから大きな期待を持たなかったぶん、失望も少なかった。結果的にはそれが当たりだったようだ。

「一つの会社で長つづきするっていうのは、じつさいは当人にとっても得なことが多いのさ。キャリアを開拓するとか、チャンスを追いかけるとかいうけどさ、長いこと見てると、勤め先を変えてレベルアップしたって子は、まずいないよね。男でも女でも。結局、変化のないことに耐えられないだけじゃないかと思うなあ。何かやったっていう感じとか、何かが起こったっていう刺激というか、そんなものが欲しくなるんじゃないのかね。それでついつい目先を変えるんだよ」

それが沢田さんの意見である。

そういえば、私の前の年に入社した人も、四年で辞めた。親しくなっているひまがなかったけれど、送別会のように始めて口をきいたら、フリーターをしながらもう一度大学を聴講するつもりだと言っていた。彼女、あの後どうしただろう。

「会社にとっても長つづきするのはありがたいことだよ。だいたい入社したての子なんて、何にも知らない、何の役にも立たない。五年くらいたつて、やっとようすが分かって、仕事ができるようになるんだから。どんな

仕事だって、そのあたりから面白くなるんだし。それまでは遊ばせて育てて、それで給料はらってるようなもんだよ」

さすが、人事課長らしい発言だ。つまり私はこれまで遊んでもらったようなものなんだ。と思っても腹が立たないところを見ると、きっとその通りなのにながい。だって、世間並みにはそんなに高くない月給だけれど、貰うたびに内心、こんなに働いているかな、と思ってしまうのだから。

「会社のためにも本人のためにも、ひとつ会社で長つづきするにこしたことはない。それは確かだが、会社で長つづきする人にかぎって縁遠い。なぜだろうねえ。しっかり落ち着いた、いい嫁さんになるだろうと思うのねえ」

縁遠いという言葉、私はその時まで知らなかった。少なくとも、自分に関係のある言葉として聞いたことがなかった。でも、なかなか結婚しないということらしいのは、沢田課長の言うことをきいて何となく想像できた。課長は私のほうを見るときもなく見て、

「こんなところかなと思っただけなら妥協しちやえよ、あんまり高望みしないでさ」と言った。当の相手の私までホロリとしてしまうような、優しい口調だ

った。

「高望みなんか、してません！ ご心配いただくなくてもだいじょうぶ。ねええ？」

松本さんが私の代わりに弾ける声で言って、顔を覗き込んだ。

「松本くんが保証してくれてもねえ、ますます心配になるだけだよ」

沢田さんが言って、みんな笑った。どういうわけか、珍しく私が話題の中心になった日だった。ささやかな勤続五年祝だったのかもしれない。

縁遠いという言葉聞いたのは初めてだったが、私の周辺に何とはなし、結婚問題の心配が感じられるようになったのもその頃だった。その少し前までは、大学や高校の友人が結婚するという話があっても、

「ずいぶん早いねえ！」

はしゃいで言い合って、それきりだった。それが、ふしぎな沈黙に代わった。焦っているわけではない、第一、まだ結婚のことなんて考えてもないのに、どこかに、してやられた…、という思いがある。あれはいったい何なのだろう。卒業して五年たったということは、年も二十七、八になったということだ。単純計算じゃないか。三十歳まで、あと僅か。ひよっとして問題はそれか。そんなこと、当たり前だし、だからどうだって言う

の。頭の中で堂々巡りをする。

しかも、そんな時にかぎって、いつもはほとんど連絡のない伯母が電話してきて、

「節ちゃんもそろそろいい年ね。何かすてきなお話とか、ないの？」

思わせぶりに、わけのわからないことを言ったりする。遠回しにじりじりと責め立てられているような気分になってくる。これが高じて、つまりは世に言う《あせり》という事態になるのだと、思い当たる。なるほど、これが世間という奴か。

「どう考えてるのかしらねえ、節ちゃんは」

「別にどうも考えていません！」

さあらぬていの伯母の言葉に、ついわれにもあらず語気が強くなり、早々に受話器を置いた。

どう考えてるって？ 考えてどうなるというものでもないでしょうが？ 腹は立てたけど、それきり気持ちが逸れてしまった。何を考えるべきなのか、分からなかったし、それに常々嫌いというわけでもない伯母だったから。こういうふうに追求心の薄いところが、いけないのかもしれないけれど。

これまで男の子とまったく関わりがなかったというわけでは、もちろんない。モテたー、と胸を張って言えるほどではないけど（だいたい、モテるってどういうこと？）、高校時代から身辺に親しい男の子がいなかったことはなかった。大学時代には、つき合っていたボーイフレンドがいたけれど、その彼が単位が足りなくて卒業しそこねたとき、本人がえらく傷ついて、電話をかけてこなくなった。私も、そっとしておいてあげたほうがいいんじゃないかと思ったのだけど、今にして思えば、ちょっと冷たかったかもしれない。

就職してから、映画を見たり食事したりした人はいた。その都度、世話になったからとか（こちらのほうが駆け出しで世話になってるのに）、たまたまチケットが余ってるからとか、当たり障りのない理由がついていたけど、でも深いつき合いにはならなかった。大学時代の友人や会社の先輩なんかで、そういう軽いデートをした相手は、数えてみると、ああ、やっぱり四人くらいはいる。五年で四人もいれば、充分じゃないの。

そういえば、最初に誘ってくれた人は既婚者だった。二番目の人とは三回会って、その三度目にいっしょに見た映画の話をしているときに、主人公の男性のことで意見が合わなくなった。その人は、はっきり主張する女

の人がいいと、前に言ったので、はっきり思ったことを言ったら、数日後に手紙をくれて、そのなかでやたらひがんだ調子で、弁解していた。どうも、映画の主人公と自分を混同したようだった。うざったくて返事を出さずにそのままにしておいたら、そのままになった。

どの人も、先へ発展しなかった。発展しなくて残念だとも思わなかった。まだ、ほんとうの相手に出会っていないのだと思っていた。今でもそう思っている。自然に、たとえば木の実が熟すように熟していく関係というのがあるのじゃないかと思っているのだけど、ちがうのだろうか。

そして入社して五年たった今、ふと気がついてみたら、つき合っている男性が一人もいない。こんなこと、これまでにあっただろうか。あったかもしれない、いや、あったにはちがいないけれど、そんなふうに自分の身の回りを考えたことはなかった。

会社で珍しく話題の中心になったあげくが、思いがけずも我が身を省みる結果になって、中途半端な気持ちをもてあまして会社から帰ってくると、鳥つねの若奥さんが眩しく見えた。私が就職した年に結婚した彼女は、ちやうどその頃、二番目の子を妊娠していた。大きなお腹を誇示して、小さい娘の世話をしながら店で働いている若奥さんは、女の人生のパワー全開

というふうに見えた。身づくろいにも手間暇かけていられないのは当然だろう。髪もあっさりしたショートカットで、ほとんど化粧つ気もない。それでも、二十七歳の妊婦は健康と自信で輝いていた。

どうやったら、あんな生き方が可能になるのだろうか。彼女のような人生と私の人生では、どこかで何かが、すでに決定的にちがってしまったているのだろうか。それは鳥つねの若奥さんをはじめ同年の女性として意識した日だった。

仕事は順調だった。いや、ほんとに順調などと言ってはいけないうもの、先の知れない森の中をさまよっているようなものであるはずだ。そういう無我夢中の思いの中でこそ、新しい地歩が築かれるだ

そう社長は言う。その通りなのかもしれない。親から受け継いだ、かなりひしゃげた出版社を何とか建て直した今の社長は、たぶん彼なりに、ずっとそういう気持ちを抱いてきたのだろう。それは、彼のことをいつも社にいない人、それゆえ遊んでいる（のかもしれない）人としか見ていない社員には、うかがいがい知れないことだった。彼を評価しているのは、私と同

じ部屋の人間では沢田さんだけだ。

「頑張りやだよ、遊び人だけどさ」

社長のことをそう言うのだが、私たちは後半を聞いて笑った。その笑いに悪意はなかったけど、すべてを帳消しにした。それに社長は社員を評価するが、社員は社長を評価しないものだ。

私はといえば、誰かを積極的に評価するような立場にいなかった。そして、夢中で改革しなければならぬほど重大な局面に立ち会うこともなかった。社長の言葉を使わせてもらうなら、崖をよじ登ろうにも、近くに崖がない、それが正直な本音だった。私の前にあるのは定められた仕事、それだけ。崖って、いったいどこにあるのだろうか？

たしかに、会社に入ったばかりの頃は乾物屋に行くのさえ珍しかった。珍しいから、人のお尻についていてもワクワクしたし、楽しかった。

しばらくすると定期刊行物のスタッフに加えられた。わが社は単発のパンフレットなどの他に、たとえば都下の市立劇場の事業案内とか、私立の家政学院の年報などといった半永久的な契約を幾つも持ついて（社長の営業の成果！）、社員をそれらの担当に三、四人ずつ張り付けている。

大部屋にくっついている二つの小会議室（といってもステイールの机と

椅子だけのがらんだりの小部屋）と、大部屋の半ばを占める大机は、それらの仕事で修羅場を迎えたときの《現場》になる。

社員はそれぞれ、幾つもの仕事に参加しているから、それパンフレットの現場、それ大学年報の現場といっても、集まる顔ぶれはそんなに変わるわけではない。それでも、仕事によって話の内容は変化するし、頭に思い描く相手先の顔も当然ちがう。大学関係ならちよつと物堅い抽象的な顔だし、食品関係なら即物的にくだけた顔、劇場関係なら華やいだようす、といったふうだから、こちらのスタッフが同じでも、そのつど違う気持ちになれる。めちやくちや忙しくなると、部分的にアルバイトに外注したり、短期で派遣社員を迎えたりもするから、なおさらだ。仕事ごとに具体的な《現場》を作るというのは社長のアイデアだそうだが、さすが遊び人だけあって、気分転換という点ではよく出来た仕組みだと思う。

「自分が、あっちの女、こっちの女って、マメに気分転換してるせいよ、きつと」

松本さんは肩をすくめ、赤い舌の先をチロツと見せた。小説家志望だけあって、さばけたことを言う。

細ごまと気分が変わる。それは確かだが、しかしそれでも慣れというも

のがやってくるのは避けがたい。で、私もいつのまにか、すっかり情性で仕事をするようになっていた。わたしの仕事が順調だというのは、つまりそういうことである。

もともと私は、どこでもすぐに居心地がよくなってしまいう質らしい。新しい場所だと、いつも最初はちよつとばかり苦痛だ。でも万事控えめにして、少しだけ辛抱していると、遅かれ早かれ、その場に慣れてしまう。みんなが私のことを、居て当たり前という顔で見てくれる時がやってくる。まるで、小さなお座布団が温もったみたいな感じだ。誰もちやほやもしてくれないけれど、じゃまにもされない。それがすごく安らかないい気分なのだ。

もちろん、そういう自分を嫌だとか、これじゃだめだ、とか思うことがないわけではない。部屋の間壁にいて、みんなの言うことを聞くばかりで大きな声も上げず、あまり気にもされずにいなんて、と思うこともあるのだ。でも、私を見ると、なぜか誰もが情性路線になってしまう。

こないだもそうだった。それはある区の文化事業の一環で、小さなしろうと演劇集団の年報の編集なのだけれど、もう十年以上も表紙のデザイン

が変わっていない。その仕事のサブ・チーフになった時、チーフの山谷さんが私に、

「このへんで図柄を一新してみたらどうだろうねえ。二色刷で木の枝に小鳥なんて、ほんとにセンスないし、古くさいじゃん。今度行ったとき、聞いてみてよ」

と言った。山谷さんはベテランのやり手なので、文字通り八面六臂、この会報の編集のような小さな仕事は、他のメンバーに任せっぱなしだ。

私はその次の打ち合わせで、それを提案してみた。特にデザイナーに頼んだりせず、わが社のスタッフでやりますから、経費はほとんど要りません、とまで言った。ほんとに、長いおつき合いだからサービスで、というつもりだったのだ。

区の集会所のステールの机を取り囲んだ十人ほどのシロウト演劇人たちは、私の話をじつと聞いていた。それから黙ってお互いの顔を見合わせ、何も言わず、また私の顔に視線を戻して、一、二分の沈黙を楽しむと、やおらリーダー格の人が、

「まあ、これはこれでいいんだと思うんですよ。これまで十二年もこうだったんですし、こうなると変わらないのもまた一つのこだわりだって、

「私たち考えてるんです」と言った。

私はその時、事態がこうなるのは自分のせいではないかと、思わずにいられた。私のなかに、こういうふうな情性で事態を粘りつかせてしまうものがあるのだと、鈍く響き返すものがあった。それは正直、ちよつとショックだった。

リーダーや他の人たちは、私の内心の思いを察したように、優しい笑みを浮かべて言葉をついだ、

「変わらないくつたっていいじゃないですか。それもまた良し。最近の世の中、何でも変わりすぎですよ。だから、すぐまた前のがよく見えて後悔したりする」

はじめは私のことを慰めているみたいだったが、そのうち苦々しさを吐き出すような口調に変わった。彼自身、腹に何か憤懣があるのは確かだったが、その糸が具体的にどこへ通じているのか、私には察するすべもなかった。

ほんとに些細な一件で、チーフに報告したかどうかとも覚えていないような些細な一件だったが、それが私の心の羅針盤の針をまた少し、軌道修正

したようだった。このままここにじっとしていても構わないのではないかという、ふしぎな安定を私にもたらしたのだった。少なくともある時点から、ある種の焦りが消えた。あらゆる焦りが消えたというわけでは、もちろんなかったけれども。

杉原さんと出会ったのも、思えばそんな時期だった。

うちの会社は、ある社会調査機関の紀要の編集をしている。これも今の社長がコネを活用して取ってきた仕事の一つだが、しかしまあ、仕事としてはこれほど退屈なものではなかった。なにしろ、無味乾燥な文章に時たまグラフが入るだけ。あるいは、似たようなグラフが幾つもつづいて、あいだに味もそっけもない短文が入るだけ。一つの記事の最後の頁がたった一行切りで、あとは真っ白な余白がドベーツと出たからといって、それを埋める必要がないばかりか、イラスト一つ付けることも考えなくていい。丹念に校正をしさえすればいいのだが、これも著者校正がしっかりしている、というか書いた本人じゃなきゃ読めないような学術論文まがいの文章なので、編集サイドがかかる手間と言ってはほとんどないにひとしいのだった。

しかしどうもその研究所は、政府の補助金をたっぷり貰っているうえに、有名企業とも関わりがあるとかで、財政がとても豊かなようなのである。

他の仕事に比べて法外に高い編集料を、（べつにこちらがふんだくったわけでもないのに）出してくれる。それに絶対に支払いを延ばさないばかりか、ある年など、まだ肝心のブツを納入していないというのに、短期の会計処理がなんとやらという理由で、前払いしてくれたことさえあった。つまり、作業が退屈ということさえ別にすれば、わが社の上得意なのだ。「あの研究所みたいな仕事があと幾つか入れば、うちの経営も楽になるんだけど…」

ある日、人事会計課長の沢田さんが呟いた。それを聞いて私は、会社の経営とは、社員がどれほど働くかということとはどうも別の次元にあるらしいと、認識を改めた。

私が勤続五年を完了して六年目に入った年、私はその研究所関係のスタッフに加えられて、初めてそこを訪れた。甲州街道の一本裏手の通りに面して立つビルの四階と五階を占有しているその研究所は、一歩足を踏み入れると都会の喧噪から完全にシャットアウトされて、まるで別天地である。入口で私たちを迎えた若い男性は直立不動で緊張した面持ちだったが、見ればジャンパーにゴム草履という出立ちだ。私と一緒にいた小泉さんがまわりを見回して、

「ほんとにこちらは爽やかで近代的な雰囲気ですねえ」

とお世辞めいたことを言うのと、

「ここの接客空間だけです。仕事してる場所は部屋全体がゴミ箱です。資料の山の間にペットボトルとカップラーメンが埋もれてたり。なにしろ学生気分の抜けない連中ですから、身の回りの品なんか持ち込んで、もう合宿状態」

とたんにくだけた笑顔になった。

その日は私の紹介というか、引き継ぎのようなもので、小泉さんが上半身を私のほうにねじって、

「これからは、この山根が伺うことが多くなるかと思っています」と紹介し、私が名刺を出すと、

「すいません。ボク名刺持ってないんです」

ジャンパーの男は言った。それからお互いに「よろしくお願いします」と言い合って頭を下げて、仕事は終わった。注文も打ち合わせも要らない、きわめてシンプルな委託業務だった。

帰ろうとしたとき、

「これからみんなで飲みに行くんですけど、ホープさんも一緒にどうで

すか」

と誘われた。ちゃんとしたクライアント相手の食事は気が張るし、へたにお金を使わせるわけにもいかない。面倒なので、いつもなら口実を言っ
て逃げるところなのだけれど、ジャンパーの男の人がすごく気さくに言っ
たので、小泉さんも断るきっかけを失ったようだ。

「どうする？ なにか予定ある？」

私を振りかえって言う眼を見ると、はんぶん気持ち動いている。

「うーん、別に」

このさき連絡交渉係を引き継ぐ私としては、ちょっと気が重い。でも、
だからこそ断りにくくもある。そうこうしてる間に、ジャンパー男の周り
に人が集まってきて、ぜんぶで十人足らずのグループになった。

「男ばかりでしょう、女性がいてくれるとうれしいんですよ。だいじょ
うぶ、悪さをするような甲斐性のある奴はいませんか」

ジャンパーの人が、ちよっと年かさらしく、みんなの方にアゴをしゃく
って言う。

「なに言ってるんだよ、失礼な。甲斐性がないのは鈴木さんだけでしょ」
周囲の反撃で盛り上がり、私たちがはつきり返事をするまえに、合流と

決まってしまった。鈴木さんと呼ばれた人の言ったとおり、まだ学生らし
さの残っている肩の凝らない人たちばかりのようだったので、気が抜けた
のも事実だった。

出ようとしたとき、

「あ、杉原さんを忘れちゃった」

と、鈴木さんが叫んだ。

「たいへん、たいへん、お財布を忘れたら無銭飲食になっちゃう。オレ、
呼んでくる」

駆け出す人がいて、その人といっしょに私たちの後から追いついてきたの
が杉原さんだった。

それは研究所のあるプロジェクトが終わった打ち上げだったらしいのだ
が、学生のコンパとさして変わらない気取らぬ飲み会だった。ガヤガヤみん
なが好き勝手に大声でものを言っている。結局だれの言うことも、だれに
も聞きいてもらえないみたいだ。それでも、みんなすごく楽しそうに、は
しゃいでいる。

私のとりなりに座った杉原さんだけ、ひとり背広にネクタイを締めてい
る。かなり年上らしく、見たところちよっと場違いな感じなのだが、それ

でも当人もみんなもぜんぜん気にはしていないらしい。

「みんないい年してガキっぽいと思いませんか？ 知能指数だけ高くて、精神的に子どもなんです。研究者ってそんなところあるじゃないですか」

杉原さんは同意を求めるように言っただけで、私もまだその研究所について詳しいことを知らなかったもので、返事のしようがないのだった。いい年と言っても、みんなどのくらいの年齢なのか、研究者ってみんな、と言われても、よくわからない。どういう人を研究者というのか、身近にそういう人がいたかな、記憶の隅を探ってもぜんぜん心当たりのない私には、答えようもないのだった。

私は目の前で騒いでいる若い男たちを改めて眺めた。→シャツに型くずれしたジャケットやセーター、コットンのパンツなんかはいて、たしかに学生ふうだけれど、でも学生の年齢はどうに過ぎていく。態度はリラックスした感じだが、妙に小うるさそうな目つきをしている者もいる。不健康に疲れた肌をしている者があるかと思うと、俳優にでもしたいような端正な美貌も混じっていた。ほんとに、外見を見る限り、統一基準がまったくない、それでいてすごく仲がよさそうな、ふしぎな人たちだった。

「大学院出て空きポストを待ってるオーバードクターがほとんどなんです

よ。腰かけてやつ。最近では企業に金が余って、こういう研究所に回してくれるんですよ。ありがたいもんですよ」

杉原さんは少しもありがたくなさそうに言う、私の顔を見て笑い、ミソ田楽を食べた。それを見て、なんだか栄養のなさそうな食べ物だなと思ったことは覚えているのだけれど、そのあと、どんな話をしたのだから、すっかり忘れてしまった。その記憶の淡泊さが、いまとなってはかえって懐かしい。

「杉原さん、自分だけ女性を独占して、ずるいんじゃない」

途中で、テーブルの向こうから大きな声が飛んできた。それで杉原という名前を再確認したのだった。それでも、その杉原さんが研究所で何をしている人なのか、まだ知らなかった。正確には研究所のことも知らずにいたのだから、私もずいぶんいい加減なものだ。それでもたいていは何とかなった。その頃はまだ、私が判断しなくてはならないことなんか、ほとんどなかったし、だからたいがいのは知らずにいても困ることはなかった。そんなふうに私は仕事に慣れ、つまるところ、すべて順調だった。

それから何度か、研究所へ足を運んだ。ひとりの時も、だれかといっしょの時もあった。お金のことが絡んでいたり、荷物が大きくなりそうな時

は、だれかが来てくれた。というより、私が先輩の誰かのお供をした。軽い色刷り見本を届けるとか、ゲラの受け取りなんかは私ひとりでじゅうぶんだった。原稿の受け取りは、こちらとしてはけっこう緊張するのだが、これがほとんど片手に入るほど小さなフロッピーディスクとやらで、小さいぶん、かえって緊張してしまうのだった。

フロッピーディスクをじっさいに見たのも、その研究所がはじめてだったが、コンピュターをはじめて見たのも、そこだった。

「ねえ、コンピュター、見たくありませんか」

ある日、ゴム草履の鈴木さんが、すごく得意そうな顔で私に聞いた。

「コンピュター？ わ、見たいです」

私はあいそよく応えたけれど、ほんとはそんなに心をそそられたわけではなかった。というより、何を見せられるのか、よくわからなかった。

コンピュターということばは、その頃からあちこちで耳にするようになっていた。そのうちコンピュターがふつうの市民の生活全般を仕切るようになるだとか、いや、もう中枢の部分ではかなりの仕事をしているのだとか、そんなことは言われていたけれど、私にはどういうことか、いまいち分からずにいた。

鈴木さんは私を恭しく廊下の奥の部屋に先導していった。恭しいのは、もちろん私に対してではない。私を連れて行く先のコンピュターに対してである。

「先週、来たんですよ、新しいコンピュター。処理能力がこれまでのより三倍以上なんです」

私を振り返って言う。

「まあ、ほおー」

私は一応は感心したように言うけれども、じつはぜんぜん分らない。鈴木さんは鍵を回してドアを開ける。その鍵もすごく性能がいいかんじで、ピタッとはまって、音もなく回って、ドアもずっしり厳かに、といっていささかも軋んだりせずスムーズに開いた。それは私がそれまでに見たすべての鍵、すべてのドアのなかで最も上等な質感の鍵とドアだった。

室内は暗く、冷え冷えしていた。

「温度と湿度を一定にしておかないといけないんです。人間よりもずっとデリケートなんですよ」

鈴木さんは深い尊敬を感じさせる声音で言ったが、それはつまり機械にしているぶん出来が悪いということではないかしら、と私は思った。で

も口には出さない。

パチリ！ と照明が入る。柔らかな上等な照明だ。私たちの目の前に、大きな四角い金属の塊が出現した。

「…」

鈴木さんはこの感動はとてもことばにできないといった表情で、だまっ
て右腕を上げ、そちらへ差し伸べた。

私は人間の背よりはるかに高いその巨大な箱形の物体をつくづく眺め
た。しかしどんなに眺めても、そこに如何なる特徴を見出すこともできな
かった。肌合いは滑らかだったが、金属だから当たり前だ。趣味のいいラ
イトグレーだと思ったが、機械ではごくふつうの色だったし、この場合、
色をほめてもしかたがないような気がする。

「大きいですねえ。こんなに大きいとは思わなかった」

そう言うのがせいぜいだった。でも、どの程度と予想していたわけでは
ないから、その時の私の考えをもっと正確に言うとしたら、たとえどれほ
ど複雑な問題进行处理をするにしても、果たしてこれほど巨大な物体が必要
なのだろうか、というようなことだった。巨大なぶん、間が抜けて見える、
というのが一番正直なところだ。

「そう。ものすごく性能がいいですから」

鈴木さんは言った。大きいから性能がいいのか、あるいは性能がいいか
ら大きいのか、そのどちらなのか、私にはよくわからなかった。このなか
で何が行われるのか、それはまったく私の理解を超えたことだ。じぶん
には理解できないものが、こんなにも麗々しく、厚かましく存在している
ということ、私はちよつと妙な気分陥った。

部屋を出がけ、私は鈴木さんに、

「珍しいものを見せていただいて、ありがとうございました」

と、ていねいに御礼を言った。鈴木さんは、いえいえ、というように首
をふってから、

「どこでも見ることできるものではありませんから」

自分のしてあげたサービスを誇大にひけらかす気はないが、とでもいう
ような慎ましやかな表情で、ほほえんだ。

ほんとうに、どこでも見られるものでないことは確かだ。でも、あれを
見たからといって、私の人生が少しでも豊かになったわけではなかった。
強いて言うなら、自分が関知しようがないものがこの世にはあるという事実
をちらっと感じたただけだ。

その後も研究所には何度も行った。私は、研究所へ行く仕事はきらいではなかった。相手のきげんを気にしないでいいということもあるが、新宿駅周辺の、やたら雑多で活気のある町並みが気分転換になるからだ。それでいて、研究所のなかに一歩足を踏み入れると、まったく別天地の趣がある。うまく言えないけれど、ビジネスとも生活ともかけはなれた、のどかで浮世離れた空気がそこにはあった。

たまに飲み会に誘われた。ふつうならクライアントに負担をかけないよう気を使ったり、こちらが気をきかして会計を受け持つのだが、ここはどうも勝手がちがう。最初、自分のぶんだけでもとお金を払おうとしたら、杉原さんに、

「あ、いいんです、いいんです。これでもミーティングやってるんですから」

と、こともなげに言われて、ひっこめてしまった。

みんながふざけてお財布と呼ぶ杉原さんは、じっさいのポストは研究所の事務局長だったが、飲み会るときはいつも私のとなりに座ることに決めているようだった。それで私を来客扱いしているようでもあった。

二回目か三回目の飲み会のとき、

「沢田げんきですか？」

とつぜん言われて、何のことかわからず、びっくりしていると、

「マガジン・ホープの人事課長、いまでも沢田クンでしょ。彼、大学の同級生なんですよ」と言った。

「ああ、そうだったんですか。その関係で、こちらのお仕事させていただいているんでしょうか」

「いや、それはそうじゃないんです。うちはもともと、資金の出どころが政治がらみなものですからね。コネといえば、おたくの社長さんの筋です。あのお方はああ見えて、そちらのほうにはかなりの人脈を持っていますからね。ま、商社にいたときに作った財産でしょうけど。やり手だったそうですから」

歯切れの悪い言い方だったけれども、私にもなるほどと思えるところがあった。ポスト待ちのガキっぽい優秀な頭脳を抱えていて、社会調査が専門で、お金が潤沢……。とてもクリーンだけど、反面ちよっとグロテスク。シロウト眼にも、そんなかんじだ。

それでも、そんな訳のわからない説明をしている杉原さんは、他人事の

ようにあっさりと、どこかコミックな話でもしているようなふざけた眼をしていて、その明るさに、好感が持てる。それに沢田さんと同級生というのも、悪くはなかった。

「沢田もボクも、どっちかってば、ウダツの上がらないほうだろうなあ。経済学部の子生って、目端の利くやつが多いんだけど」

なんて、自嘲的に言う。お財布の杉原さんがウダツが上がらないかどうか、それは分からないけど、マガジン・ホープなんて、まるでアスナロウみたいな会社に永年勤めている

沢田さんは、まず目先の利に敏い人だとは思えない。それでも私は、変人が多いうちの会社のなかで、みんなとちょっと毛色がちがって常識的な沢田さんが嫌いではなかった。

「経済学部出身で、功利的な人が多いんですか」

つい気がゆるんで、われながら間抜けな質問をしてしまった。この研究所は、気を使っても会社の利益に関係ない、ということとはつまり気を使う必要のまったくないクライアントなので、こちらまでつい学生気分になってしまう。それでも、ひどくご機嫌をそこねれば、他の人をよこせと言われかねないし、そんなことはやっぱり言われたくないから、当たり障りの

ない、そよ風の気分だ。

「いやあ、あくどいのは何てったって法学部じゃないかな。モロ、権力志向でしょ。経済学部はね、世の中動かすのは経済だあ、とか思ってるくせに、それを斜に見て、理屈こねて、自分が権力になる気迫のない奴が行くところなの」

ほんとうだろうか。内心そう思ったのが表情に出たのか、杉原さんはウヒヒと笑って、私のビールを注ぎ足した。こども扱いされた気分だったが、あまり悪い気はしなかった。

研究所に行く回数、そんなに多くはなかったけれど、うちが編集を請け負っている論文集の原稿締め切りが十〇月末だったので、それからしばらくは週に一度くらい、足を運ぶ用事がある。ゲラや見本をやり取りしあとは個別の問題の箇所について、すでに電話で話がついていあることを手短かに再確認するだけだから、「こんにちわー」から「では失礼しまーす」までほとんど時間がかからないのだが、それでも、頻繁に顔を出すと、向こうの人の表情にも、廊下の空気にも柔らかなものが感じられるようになる。

こうして研究所通いもいつか二年目に入っていた。

十一月の始め、以前コンピュータを見せてくれた鈴木さんとすれちがって、

「あー、またホープさんの季節になったんですね」

日頃あまり冗談も言わないような人なのに、ホープさんの季節という言い方に彼なりのエスプリを利かせているのが伺えて、それもほほえましかったりする。

その次の週のことだった。研究所に着いたら、入り口で杉原さんに出くわした。

「今日もですか。ごくろうさま」

そう言って、いったん脇を通り過ぎてから、私を振り返って、

「ああ、こんばん空いてませんかあ。またみんなで飲みに行こうって言うてるんで、もしよかったら来ませんか」

と誘われた。べつに予定はなかった。しいて言えば、今日は早そうなので、帰りがけに

納豆を買おうかな、と思っていたのだけど、それはまあ、なくてもいいか。考えながら、首をかしげたり、たてに振ったり、あいまいな返事をしていくと、

じゃあ、〇時半にここで落ち合いますようか。それで間に合う？」

仕事はそれよりずっと早く片づくだろうとは思ったけど、みんなの都合もあることだから、了解のしるしにもう一度、うなづいた。

思ったとおり、用事はすぐに終わってしまった。約束の時間までに、まだ少し間がある。私は研究所を出て、周辺を歩いてみることにした。

ふしぎな界隈だった。もとはちまちました繁華街の外れなのだ。でも、甲州街道ぞいだから、どことなく由緒ありげな風情の店もある。そこへきて今度は、近くに巨大なビルが立ちはじめているらしい。それも一つ二つではなく、ビル群だ。あちこち、板囲いした工事現場から大ぶりの騒音が押し寄せてくる。ハンパじゃない大騒音だ。その谷間で、古い木造の商店が、昔ながらの商売をしていたりする。そんな薄暗い店先を覗きながら、頭上を行く工事の騒音を、目には見えない波の音といったふうに聞いていると、見知らぬ海辺の町で、浜から一本裏手のちまちまとした小路を歩いているような気分になってくる。すぐ近くにあるはずの大海原が、家々の低い軒に邪魔されて見えないだけに、いっそう怪物的で、もの怖ろしく思われる幻想。それに半ば身をゆだねながら、気持ちの残り半分であえて目先の光景に眼を凝らせば、鉢植えの山茶花の葉陰には、もう丸い蕾がふく

らんでいた。

五時半に研究所に戻った。ロビーには誰もいない。ここで約束と、はっきり聞いたわけではないけど、でもここ以外にはありえない。そうでなかったとしても、ここにいれば誰か来るだろう。そんないい加減な心持ちですることなく立っていたが、いつもだったら冗談でも言い合いながらどやどやと出てくるはずの面々が、五分過ぎても十分過ぎても、誰ひとり姿を見せない。

もしかして聞き違いだったかと、自分が疑わしくなりはじめた頃、杉原さんがひとり、のろのろと現れた。

「みんな今日は都合が悪いんだって。結局、来る人なくなっちゃったんですよ」

首の後に手を当てて、私の顔を斜めから見ている。そして私が「それじゃあ」と言いかけるのを、あわてて通せんぼするみたいに、

「みんなにふられちゃったから、しかたない、ふたりでコンパしませんか」

冗談のような、少年が照れているような、ふしぎな目つきで言った。

うちへ帰れるのならそれもいい、そう思っていたはずだったが、杉原さんのいたずらっぽい眼を見たら、無下に振り切る勢いがそがれた。納豆は

まあ、明日か明後日でもすむことだし、そう納得して、うなづいた。

思ったよりも肩のこらない食事だった。というか、彼の言うとおり、二人でコンパをやっているようなものだった。メニューから適当なものを選んでいく手順も、ニュースの話、天気の話、とりあえずの突き出しみたいに並べる習慣も、それまでに何度かあった飲み会と変わりが無い。気がついてみればもうその時点で、杉原さんと私のあいだにはかなり共通の知人、共通の話題があった。

「**くんがこないだ結婚したでしょ。ああ、知りませんでしたか。結婚したんですよ、ちゃんとした定収入もないくせに。お嫁さんがね、商社に勤めているんだって。だから、その収入で養ってもらってるわけですよ、彼は。ところがね、そうになると家事を分担するのが口惜しいって言うの。自分が養つてるといふ自信と余裕があれば、掃除でもゴミ出しでも、何でも気持ちよくやれる。でも、収入が少ないから家事をやるといふのは、男の沽券に関わるっていうんだよね。古いよねえ。ボクなんか、ゴミ出しはずっと自分の役割だと思ってきたのにねえ？」

ねえ？　と言われても、返事はできない。笑うだけだ。

話の内容はいつもの飲み会とそんなに変わりが無い。いつも仲間の噂や、

さまなければ「お前はなあ」といった、心安だての個人攻撃でふざける飲み会だった。そんななかで、杉原さんはいつもは無口なほうだったが、その日はおしゃべりだった。たぶん、行きがかり上とはいえ、自分から誘っておいて不首尾な結果になったコンパに責任を感じていたのだろう。それでも、途中で話をやめて、まわりを見回して、

「今日は静かですね」

と、口先だけではなく、ほんとにうれしそうに言った。私も、それはそうだと思った。研究所の賑やかなコンパは嫌いではなかったけれど、杉原さんと私には静かなほうが似合う気がした。

店を出るとき、杉原さんはいつもの大きな茶色の財布（「これのせいで、お財布って呼ばれてるの。なんか呉服屋の番頭みたいでしょ」）ではなく、黒い小さなお財布で払った。それに気がついて、「私の分…」とお金を渡そうとすると、

「そんなこと言って、恥かせるんじゃないの」

言いながら私を見る眼が少年のようで、瞬間ほんとに悪いことをしたような気がして、手を引っ込めてしまった。

新宿まで歩きながら、

「フランス古典派絵画展のチケットがあるんだけど、いりませんか。もしお友だちとでも行くようなら2枚あげてもいいけど」

と、杉原さんは言った。そう言うってから、

「あ、でもボクでよければ、いっしょに行きたいな。最近そういうことやってないから、若い人みちな気分になれるもんなあ。ねえ、行きましょよ、やですか」

冗談のように、はしゃいで言った。私もついつられて、

「いいですよ、私でよかったら」

応じてしまったのだ。歩きながらだったので、気軽な気分だった。というより、考えてる暇がなかった。もし、店で飲んでいたときに正面切って言われたら、どうだっただろう。それでもたぶん、オーケーしただろうけど、ちよつと気詰まりだったのではないかな。

まあ結局のところ私は、杉原さんと展覧会デートをすること自体が嫌ではなかったのだ。うれしかった、と言ってもいいかもしれない。別れたあの彼と初めて映画を見に行ったときのような胸騒ぎはなかった。あの時はむしろ苦しいくらいだったけれど…。

それでも、その彼と別れたあとでデートするはめになった何人かとの約

束よりは、気持ちが軽かった。楽しみだと言ってもいいくらいだった。それはたぶん、杉原さんがまったく私にふさわしい相手だと思わなかったせいだ。先行きこの人とうにかなるかもしれない、そんなことが頭をかすめるだけで、もう気が重くなってしまう。これからつき合って、もしかしたら恋人になって、結婚を考えるかもしれない人との約束は、なんだかすぐ入り組んだ検討課題みたいな気がしてしまう。

「それじゃあ、こんど電話しますね。あなたも今すぐじゃ予定が立たないだろうし」

私は電話番号を杉原さんに教えた。

「うれしいなあ。誰かと約束なんかして、電話番号教えてもらうなんて、すごく久しぶりのことだ。もしかしたら初めてかもしれない、なあんちゃって。みんなには黙ってなくちゃ、ぜったいズルイッって怒られる」

杉原さんはパン！と両手を打って、それからその手をしめしめという感じで揉み合わせた。あまりはしゃいで喜ぶので、もちろんふざけてるのだという暗黙の了解で、私もアハハ…と笑った。なぜだか、やっぱり私もうれしかったのだ。親戚のおじさんを喜ばせているみたいな気もしたけれど。

展覧会デートは楽しかった。杉原さんが思いの外に西洋美術に詳しいことも分かったけれど、そう言って感心すると、

「年のせい、年のせい。こういう雑学って、いつの間にか身につくものなの」

と照れて逃げた。それもたぶんほんとうのことだろう。

美術館のカフェが中庭に面していて、面積はさほど広くないのだけれど、一面に芝を植えて緩やかな起伏になっている。スロープもあり、木陰もあり、奥には小さいながら水の流れもあって、その間遠な配置を眼で追っているだけで心に音のないメロディが充ちてくるようだ。

十一月の半ばのこと、芝はもう枯れ果てていた。けれどそこに薄日がさすと、注ぎたてのシャンパンのように光が泡立つ。こういう安らぎは久しぶりだ。きつと相手が杉原さんだから、つまり恋愛の対象にはならない人といっしょだから、こんなのにのんびりできるのだろう。それも悪くはないと思った。

「うちねえ、女房が家を空けているんですよ」

それぞれに芝を眺めながらしばらく沈黙がつづいたあとで、彼が言った。

「……」

「もう、だいぶになるんだけど。ちょっとやっかいな状況で…」

そう言う表情を見て、これは病気だなと直感して、何だか気の毒でそれ以上は聞けなかった。病気の奥さんを抱えているとすれば、心に雲のかかることも多いにちがいない。ほんの少しでも気晴らしになるのだったら、それだけでもよかった。私が相手なら、面倒くさいこともないのだし…。べつに杉原さんと展覧会を見に行くだけのことに疲しい思いがあるわけではなかったが、そんな事情を知ったら、なんだか気が楽になった。

それから時々逢うようになった。といっても、デートのようではなく、一ヶ月近くも何の音沙汰もないかと思うと、土曜日の夕方とか日曜の昼近くに電話がかかってきたりする。

「あー、いらっしやいましたか」

まるで、いないのを予想していたみたいで、それでいったい何で電話してきたの、とこちらが聞きたくなるような間の抜けた声で言って、あれこれおしゃべりをする。話題からしても時間からしても、まるで暇をもてあましている主婦とか、急げ者の高校生同士みたいな感じで、でも私もべつに急ぎの用事があるわけでもなし、長い独りの時間に話し相手があつてよかったと思える程度のテレフォン・ブレイクだった。

「土曜日のこんな時間に家にいるなんて、殺風景だなあ。恋人でもないのかあ？」

冗談めかした荒っぽい口調で言うこともある。

「いないわけじゃないでしょ。今日はたまたま空いてただけ。よけいなお世話ですよ」

言い返す。ほんとうに言い寄る男が誰もいないわけではない。こないだだって、お食事でもって言われたのだ。でも、その人の緊張した声を聞いていたら、何だかウザったくなつて、断ってしまった。

で、そんなやり取りをちょこっとして、それから、じゃあ逢おうか、ということに落ち着いた。べつに用もないけどね、というふうに。

逢うのはたいてい、ウィークデイだった。火曜か木曜の夕方、会社と研究所の引け時に合わせて、食事をして、おしゃべりをして、ぶらぶら散歩をして、お別れ。そんなつき合いが半年ぐらいつづいた。

胸がどきどきするような相手ではまったくないけれど、私にとって杉原さんはとてもプラスになる話相手だった。会社の仕事や人間関係で困ったとき、それほどでもないけれど誰かに何かいいたいとき、彼ほどいい聞き手は他にいなかった。まずは黙って聞いてくれる。それから、やおら「ボ

クもその人と似た年齢だから、わかるような気がするんだけどね」とか、「それって、もしかすると別に問題があるのかもしれないよ」とか、いずれにしても私ひとりでブスブス思いあぐねていたことの抜け道というか、空気穴というか、そんなものを見つけてくれるのだ。すると、私自身の考え方がずるりと変わった。

「ありがとう。やっぱり話聞いてもらってよかった。なんか楽になった」「いつもそんなことばかり言っていないか？ ま、ちよつともお役に立てれば、おじさんとしても言うことはありません」

ふざけて頭を下げて、でもその通りなのだった。

それまで考えたことはなかったけど、年齢が離れているということは、すてきなことだった。距離を置いて、客観的な見方をしてくれる。

それに穏やかだ。余裕のある男の人を、私ははじめて知った。これまでつき合った男の人は、ほとんど同年か、せいぜいで二三歳上だったけど、ゆとりのある優しさを感じさせてくれた人はいなかった。みんな、なぜだか切羽つまって、小さなことで傷ついた。けっきょく別れてしまった木元クンが、なかでも一番きつかった。まあ、留年という、あの時点では考えられるかぎり最悪のことが起こってしまったせいもあるけれど、男の人と

いえば、私には、自尊心のかたまりという印象しかない。そしていつも、一步でも自分が上手に立っていたという焦り。それにはほんとうにうんざりさせられる。

もちろん、それも真剣な感情の表れなのだろう。愛情とはいわないまでも、少なくとも関心の証拠ではある。こちらが自分をどう思っているか気になってしかたがないから、つい行きすぎてナーバスになったり、見得を張ったりしてしまうのにちがいない。それはよくわかるのだけれど、でも、気持ちの張りつめた男の人といっしょにいるのは、とても疲れることだった。

その点、杉原さんはほんとに気が楽だった。好きだとか、パートナーとしてどうか、といった判断を迫られることがない。だって、そういう意味では始めから問題外なのなもの。これほど年上では、そもそもそんなふうに考えることさえ、できはしない。

それに、年上の人って、いろんなことを知っているのだ。社会的な事件でも、映画でも、小説でも、知ってますか？ と聞くと、当然のように教えてくれる。どうして知ってるの？ と驚いて言うのと、だってボクが大学二年の時だもの、とすぐ身近な返事が返ってくる。遠く思えたことども

遠い祭

が、ふっと身近に感じられる不思議。というか、遠くの彼方に思えた場所へ、すいっと運ばれるような感動。それを度々経験させてくれるのが、彼と私の年の差だった。それはちょっとした魔法の絨毯で、自分が生きたことのない時代へと瞬時にトランスポートしてくれる。その快感を味わいたくて、私はわざわざ質問を用意するクセがついてしまった。おおげさな言い方だけど、年の差ってほんと、ロマネスクなのだ。

もちろん、二十年も三十年も昔のことが身近に感じられるのは、その時代に小学生だったり高校生だったりする杉原さんを想像するからだ。そうやって、聞いて想像している今の私よりもずっと若い杉原さんが、いつの間にか何人も私の頭のなかに作られていった。彼は自分のことはあまり詳しくは話さなかったから、その若い彼たちは、まるで雑なスケッチというか、荒削りのお地藏さんみたいに、昭和初期という茫漠とした時代の空を背景にして、あっち向いたりこっち向いたり、てんでんばらばらの表情で立っているのだった。

十一月の土曜日だった。映画を見ようという約束で会ったのだけど、心づもりの映画館へ行ってみたら、まだ時間があるのに、長蛇の列ができていた。

「どうする？ 列ついてでも見たい？」

ちょっと気が殺がれたような表情で、杉原さんが言う。あまり執念深くない質だということは私も知っていた。

「私はどっちでも……」

もともと私が見たくて提案した映画ではない。ほんとに見たい映画は、誰かを誘ったりせず、ひとりで行くことにしている。そのほうがずっと集中して見られるし、あとの記憶も鮮明だ。

「今日はやめて、散歩でもしようか？ ほら、良い天気だしさ」

言われて見上げると、晴れた十一月の空はあくまで青く、深みがあって、心が吸い込まれそう。東京には空がないなんて、ウソ。よく見れば、ビルとビルの間に、しっかり空が見える。ないと言う人は、見ようとしなないだけだ。

新宿の街を用もなく歩くのは、久しぶりだった。いや、はじめてだった。タカノのフルーツパーラーで、クレープを食べた。杉原さんも私の真似をしてクレープと頼んで、

「こういうの食べるの、はじめてだな」

と、首をかしげて独りごとのように言う。

「学生時代はよく新宿に来たものだった。この裏に風月堂という大きな音楽喫茶があつてね。え、音楽喫茶？　店の中に音楽がかかっている喫茶店のことそう言ったんだけど、いまじゃそういうのなくなったんだあ。あの頃はいいオーディオ持つてる人も少なかったしなあ。」

「その風月堂はね、ZHEの次にたくさんレコードを持ってるっていう評判だったの。もちろんポップスじゃなくてクラシック。ベートーベンとかバッハとか。で、九時くらいに開店するんだけど、芸大の学生とかクラシック・マニアがそれを待ちかねて入ってきて、リクエストをするんだよ。そうすると、順番にかけてくれるわけ。遅くなると、かかるのも遅くなるでしょ。待ち時間が長くなるわけ。なんか、大学病院みたいだよな」

クレープをちよつともてあまし気味に、杉原さんが話す。いままで聞いたことのない話だ。杉原さんからだけではなくて、誰からも聞いたことがない。私の脳裡に、見たことのない音楽喫茶の光景が浮かぶ。吹き抜けの高い天井で、回廊のように二階席があつて、壁一面、日本一たくさんのレコードが収められた棚…。

「ほんとに、いつつも満員だったなあ。いつまでもいさせてくれたからね。店にしても、リクエストした曲を待ってるわけだから、追い出すわけにも

いけないし」

「リクエストなんかした？」

「ボク？　しませんよう。そんな、誰でも知ってる名曲なんか言えないような雰囲気だったもの。いいかげんな待ち合わせにはもってこいだった。文庫本一冊もって、コーヒー一杯でいつ来るかわからない相手を待ってるんだ」

それはどういう相手だったのか、親友なのか恋人なのか、聞いたほうがいいのかなあと思ひながら、時をやり過ごしてしまう。聞きたいのか聞きたくないのか、自分の気持ちもよく分からない。

タカノを出て、ぶらぶら歩いた。なにしろ映画を見る予定だったので、時間がたっぷりある。新宿通りは人であふれている。たいして用もなさそうな若い人たち。その網に絡め取られてしまうと、思うようには進めない。といって、こちらにも無理して抜け駆けするほどの用事があるわけではない。

「こどもばかりだ」

彼が呟いた。そのとおりだと、私も思った。心を踊らせて盛り場を歩く年齢をいつのまにか過ぎてしまった自分に気づかされる時。まわりにいる

のがこどもばかりだと感じる瞬間。それは私にもあった。若い人の波にもまれて、私は自分の隣りにいる男の人に、奇妙な連帯感を感じた。私たちはおとなだった。もう一人のおとなといることが快かった。

三丁目の人混みを抜けると、ほっとした。ショーウィンドーがなくなつて、人が少なくなった。自分の歩調で歩けるようになった。歩きやすいように、無意識のうちに人通りの少ない道を選んで歩いていった。

気がつくと、あたりの空気が変わっていた。しつとりと秘やかな感じだ。物音ひとつ聞こえない。高級住宅街だろうか。ちよつとふしぎな気がして見回すと、高い塀囲いの上に、はつきりそれと分かる看板がある。軒並みラブ・ホテルだった。

「あれえ、変なところに迷いこんじゃった」

杉原さんも本気で困ったように言って、しばらく見回していたが、突然、「ねえ、中を見学して行こうか」

私の顔を正面から見て、言った。その眼が少年のように光って見えた。それを聞いたとたん、私も中が見たいような気になった。このチャンス逃したら、噂に聞くこういうホテルに足を踏み入れることはないのじゃないかと、正直、そう思ったのだ。

「うん、見てみたい」

私ははつきり領いた。なんか冒険でもするような、すぐくワクワクする気分だった。

フロントにいる男の人は、おかしいほど無表情だった。これだって商売なのだから、繁盛するのがいいに決まっている。当然お客には愛想よくしたいところだろうけれど、でもその商売柄へんに笑いすぎるのもまずいし、といって不機嫌なのは失礼になる。いっぽう客のほうはできるだけ人目に立ちたくないと思っているにちがいないから、そのところがふつうの商売とまったく違う。派手に「いらっしゃいませー」とか、「毎度ありがとうございます」などと言うわけにはいかないだろう。恋愛関係でない私たちは、というか、そういう切羽つまった状況にない私としては、余裕をもって観察しているつもりで、内心しごく愉快だった。

たとえ万一という事態になったとしても、杉原さんは私に何かを無理強いするようなことはない。それには絶対の自信があった。そしてその点では私は間違っていないかったのだ。

案内もなしに、部屋に辿り着く。完全セルフサービスの山小屋とかユースホステルのような気分だ。

部屋も思ったよりふつうだった。バスルームを覗いてから、ベッドに腰掛ける。ほど良くスプリングが利いている。寝心地がよさそうだ。これが一番肝心な売り物のなのだろうから、当然かも。

杉原さんが隣りに座った。

「することがないね」

私を見て、笑いながら言う。

「…」

私も笑って頷いた。でも心の中に小さな緊張があった。言うことがなくて、つい自分の爪の先をいじっていたら、彼が私の肩に腕を回して自分のほうに引き寄せ、そうっと、柔らかく口づけをした。とても優しい、甘い口づけだった。彼が唇を離れた時、私は思わず遠ざかりそうな彼を追うように体を寄せて、口づけを求めた。彼は今度はしっかりと私を抱き直し、今度は長く、豊かな口づけをした。

そして私は彼にすべてを委ねた。

それからしばらく連絡がなかった。どういふふうにコンタクトを取るか、心が定まらないでいるのだろうと私は思った。もちろん、もう決して連絡は取らないという選択肢をもふくめて。それは十分想像できることだった。

あの日の別れ際、明大前の連絡通路で別れたとき、

「じゃ」と短く言ってから、

「なにかあったら電話して」

と付け加えた。私は頷いたけど、自分のほうから連絡することはないだろう、思っていた。

私のほうでもまた、彼が連絡しないでいくることがありがたかった。気持ちの揺れが完全に収まるまで、待つてほしかった。

後悔していたわけではない。後悔なんか、少しもなかった。とてもすてきなことだったと、正直、思っていた。彼に感謝していた、とさえ言っていないかもしれない。

でも、これきりになるのならそれもいい、とも思っていた。それもまたすてきなことだろう。あんなふうに偶然のように結びついて、そのまま何事もなかったように遠ざかって行く、それもすてきなことだった。

一ヶ月近くして、電話があった。

「落語聞きに行こうと思うんだけどさあ、いっしょに行かないかい」

唐突に言う。黙っていると、

「寄席の後で、熱燗で湯豆腐食う。つきあえよ」

わざとらしい不良少年の口調が、語尾でちよつと細くなつてふるえた。聞いていて、胸が痛くなった。他人行儀の物言いと、少年じみた崩れた口調を使い分けるのは彼のいつものクセだった。この電話も、どっちの線でいくか、ずいぶん迷つたにちがいない。どちらにしても、私はそれに合わせただらうけれど。

「ヨッシャ、乗ろうぜい」

私は彼の調子に合わせつつ外して、ゆっくりと応えた。

「よかった。寒くなつたしな」

そう言う彼の声が弾んだ。私の胸いっぱい温かい波が広がった。彼の言うとおり、もう師走だった。

その日は約束どおり、上野の居酒屋の隅のテーブルで、湯豆腐と剣菱でしこたま呑んだ。ふたりで逢うようになってからはじめてのように呑んで、思い切り話し込んだ。夜更けの通りを肩を組んで、わざと酔っぱらいの真似をして千鳥足で歩き、そのまま上機嫌で別れた。

クリスマスツリーのランプが眩しいほど煌めいていた。

思い出したように電話してくるのは、はじめから変わりはなかった。その頃合いが、なかなか難しい。私はただ待つて、受けるだけなのだけど、

いつのまにか、時間の働きというのをデリケートにやりすぎすコツを覚えていった。

逢つて、体が溶け合つて別れた次の日か、そのまた次の日、むしろに思い出すことがある。とても逢いたくなる。声だけでも聞きたいと思う。いっそ電話をかけようかと思ひ悩むのだけど、そして電話をかけていけない理由はないのだけれど、私はそうはしなかった。そんなことをすると、心がますます沸き立ってしまいそうな気がする。煮詰まってしまうような気がする。

それよりも沸き立つ胸をじつと抱きしめるようにして、煮詰まる思いをかみしめているほうがよかった。その思いの山を越えて、さらりと軽い気持ちで逢うのがよかった。

そういう時のやりすぎし方に、どうして私は心づいたのだろうか。たぶん、電話をかけるタイミングに、私よりも相手のほうがもっと濃やかに心を砕いていることが見えてしまったからだらう。それは、そもその最初に私をウソの飲み会に誘つたときから、そうなのだった。

あるいは私自身が、波を立てずに穏やかにしていたいたちなのかもしれない。それをむこうも察していた。そういうことだったのかもしれない。

い。電話をしたいと思って、すぐにそうしたとしても、浮き足立っている自分の心を満たすことができたとは思えない。かえって自分で自分の気持ちを損なう結果になっただろうから。

それに私は、自分の気持ちを一方的な相手に浴びせるのがいやだった。たとえ純然たる好意であっても、望まないときに望まないやり方で押しつけられる感情は、とても不愉快なものではないか。少なくとも、そんな無遠慮なことだけはしないつき合いでいたかった。それくらいなら、なにこともなかったように別れたかった。

ほんとうにゆっくりと、長い間隔をおいて、私たちは逢った。はじめから、そうだったから。

電話してきて、ふたこと目くらいに彼の言うことば、

「冬の空ってふしぎだねえ」

……

「気がついてる？　だいたい日が長くなってきた」

……

「昨日さあ、線路脇にツクシンボ見つけたよお。あんなところに生えるんだなあ。春だなあ」

あなたの電話って、気象庁の長期予報みたい。思わずそう言ってしまったことがある。長期予報の間隔で、私たちは逢った。もしかしたらそれは、私が彼の電話を待ちわびていて、そのせいで季節が変わるほど長く感じたのかもしれないけれど、それでもそういうふうには考えなくなかった。季節を単位とするような長い時間を、ゆっくりゆっくりと渡っていると思った。

季節が廻るように廻ってきて、また遠ざかる人。次ぎに同じ季節が廻ってきてても、その景色のなかに再び姿を見出すかどうかかわからない人。私たちの出会いはメリーゴーラウンドみたいだ。次ぎにまた近づくのは、いつだろう。その前に、いなくなってしまうのだろうか。その前に、私が降りてしまわないだろうか。

逢わないでいる長い時間に、私はひとりでいろんなことを考えた。もちろん、そればかり考えていたわけではないけれど、でもゆるやかに考える時間は、たっぷりあった。たっぷりすぎるほど。それは何というか、心豊かなことだった。

私たちのつき合いは、いったい何なのだろう。世にいうオフィス・ラブ？　出会いは仕事先だったから、そう言ってもいいのかもしれない。で

も杉原さんといっしょに仕事をしていたわけではないし、仕事中の彼を見てすてきだと思っただけではないから、ふつうのオフィス・ラブとは違う。それに二人きりで逢うようになってからは、かえって研究所がらみで会うことが少なくなった。もともと杉原さんとはぜんぜん関係ないところで進行している業務なのだ。

不倫ということばが耳に入ると、それとも無関係ではないと思う。杉原さんには奥さんがいた。どうもいるようだった。女房の具合が悪い、と前に言ったことがあるから、奥さんがいることまでは確かだろう。だけど、なぜかその人の存在を感じたことはなかった。彼は匂わせなかったし、私はそこまで彼のプライベートに踏み込まなかった。もし奥さんが病気をしていた、それが長引きそうだとすれば、彼が事実上シングル生活をしていたと見なすことも可能だったし、自分では考えみなかったけど、それを言い訳にしているのかもしれない。誰への言い訳？ 自分への？ それとも世間への？ 世間というものは、私たちのつき合いはまったく切り離されていた。だから、言い訳をする必要もなかったのだけれど。ただ逢って、ときどき体を重ねるというつきあい。それだけだとすれば、それはいわゆるセックス・フレンドなのだろうか。性欲を満たすだけの関

係。そうなのかといえば、それも違うのだった。必ずしもセックスが主ではない。それに性欲というほどのものがあるわけでもない。それよりも逢っていっしょに時間を過ごすことのほうが、ずっと重要だった。久しぶりに顔を見ると、それだけで心が潤う。それは私だけのことでなくて、彼もそうのようだった。逢った瞬間の顔を見ると、よくわかる。それをおたがいになりにさげなく確かめる。相手も同じように感じていると思わなかったら、逢う気にならなかったにちがいない。

まるで中学生のプラトニックな純愛みたいじゃないの。そう思ってみれば、そんなところもないじゃない。でも純愛のように思い詰めているわけでもない。愛している、というわけではないのだ。私たちは世にいう恋人ではない。

世の中には愛ということばが氾濫していた。その文字を見るたびに、愛って何だろう、と思ってしまう。愛を叫ぶことで、すべてが沸き立ち混濁する。愛という名の埒場が発生する。杉原さんは、私に愛を語ったことが一度もなかった。私もそうしてほしいとは、まったく思わなかった。彼が愛を口にしたなら、私はきつと逃げ出しただろう。愛を口にしなければならぬ状況のないことが、私たちのつきあいの良いところだった。そんな状

況を作らないために、ふたりともとてもデリケートな努力をしていたような気がする。

むかし、本でこんなことを読んだことがある。若い娘が、内なる性の昂まりを意識する。けれどもそれを特定の男性に結びつけることができない。そして夢想するのだ、いつの日か、ひとり旅に出て、見知らぬ男と肉体を交わすだろう。名前も知らず、おたがい顔さえも見せないようにして。それは確かに若い女の未熟な夢で、じっさいには彼女はその後、深く激しい恋を経験することになるのだけれども、でもそういう出会いがいつに訪れないということもありうるのではないだろうか。ロマネスクな感情生活を伴わない性というものもあっていいのではないだろうか。

生命が成熟してセックスへと向かう。そこになぜ、愛がなくてはならないのだろう。だって、ほとんどの動物には愛なんかないじゃないか。成長して、雄と雌が出会う。語らいも交渉もなく、健康的な乾きが水を求めるように相手を求め、自然そのものに後押しされるように結ばれ、そのまま離れていく。そういうピュアーな性が、あってもいい。

あるいはまた、人間社会の約束事にしばられて、個人の好き嫌いとはまったく別の次元で相手が定められ、諾々と男に身を任せる。愛しているわ

けではない女を抱く。それだって、もしかしたら思うほど不幸なことではないかもしれない。愛の所在を我が身に証し、相手にも確かめることから解放されたら、何かがずつと楽に、透明になるかもしれないのに。

杉原さんは私にとって未知の人ではなかった。しかし、知り抜いている人でもなかった。彼に抱きすくめられ、目をつぶる時、誰に抱かれているのか分からなくなってしまうことがあって、そのニュートラルな瞬間が、私は好きだった。見知らぬ相手という仮想の裏で私は、私だけの私になることができたし、澄み切った気持ちで性の海を泳ぐことができた。

杉原さんとのセックスは、それまで私が想像したことのないような穏やかなものだった。

といっても、私にもさして経験があったわけではない。はっきり約束したわけではなかったけれど、結婚するのだろうと漠然と考えていた同級生と何度か、彼の焦燥に押し倒されるように関係を持った。それだけだ。

大学時代の彼、慎也クンのことを、今頃になって思い出すことがある。とくに杉原とこうなってから、それは、それ以前よりも考えるようになった。

時間があつたから、始終会っていた。「明日はどうなってるの？」というのが、彼の決まり文句だった。会う約束をするためばかりでなく、私の

一日のスケジュール、一週間のスケジュールを一通り知っていなくては気がすまないようだった。

何時から何時まで授業、その後アルバイト、と予定を知らせると、「そう、じゃがんばってやってらっしゃい」と、まるで父兄のような承認の口ぶりと言う。それがおかしくて、私はよく心の中で笑ったものだ。でも口には出さなかった。口に出して言ったら、本気で怒りそうだったからだ。たしかに気むずかしい人だった。でもその気むずかしさがさほど嫌ではなかった。その気むずかしさが愛だと、その時は思っていた。ほんとうに愛だったのかもしれない。

私たちはお互いの部屋にもよく行き来した。同じサークルで（映画研究会、でも二人とも長居せずにやめてしまった）、グループづきあいをしていた頃に、数人でドヤドヤと気楽な下宿住まいを渡り歩いたりした時に訪れた延長で、男の一人住まいに足を踏み入れることに抵抗がなかった。わたし一人だから遠慮する、なんて言うのも、まるで勘ぐっているみたいで変だった。心外だと怒られそうだった。

ある日、私に背を向けたまま、慎也くんが膝を抱えて黙っていた。そんなことは初めてだったので、どうしたの、と聞こうかと思ったけれど、丸

めた背中に妙な気配があって、声をかけそびれていた。すると、

「君がほしい……」

絞り出すように慎也くんが言った。私はびっくりして、声を呑み込んだ。私が黙っていると、数秒の間において慎也くんは振り返った。その眼は荒々しい、それでいてうちひしがれたように切なげな、見たこともない光を放っていた。私は彼がかわいそうで、そのくせ怖くて、裏腹の思いに責め立てられて、身じろぎもできなかった。

そのとき私が彼の眼に見ていたものは愛だった。情熱そのものだった。その時の私に理解できる限りでの。何も言わないでいる私をすくい上げるように見ると、彼はいきなりむしゃぶりついてきた。私はだだをこねて泣きじゃくる子どもを抱きとめる母親のように、彼を受け入れた。それしかなかった。

すごく思い詰めて、すごく慌ただしい行為だった。あつという間だったけど、ひどく疲れる行為でもあった。行為のあいだ「愛してる」と彼は何度かさやいた。私もそれを信じた。私にとっては愛しかなかった。慎也くんにとっても、そうだったと思う。

男に吹き荒れた突然の嵐を受け止める、というのが、私がセックスから

えた最初の印象だ。それでも、そのことで彼の嵐が鎮まったのが目に見えたから、これでよかったのだと思った。男の中にこれほどのやみくもな衝動があるのだということも、それを女に和らげる力があるのだということも始めて知って、それはそれなりの知識だったけれども、それ以上のものではなかった。

慎也クンとの関係は、確かに愛だった。独占欲もあった。私以上に、彼のほうに。それを秘かに煩わしいと感じたこともあったような気がするけど、そんなことはぜったいに考えても言ってもいけないことのように思っていた。それは愛なのだから。愛は絶対だと、その頃の私は信じていた。

それに比べると杉原とのセックスはほんとうに、こともないものだった。いつも、はずみでそうなってしまったというように始まって、茫漠と果てしない海にこぎ出していく。緩やかな波に揺られ、気持ちちがだんだん楽になり、体が溶けていく。ゆっくりと、ゆっくりと。心が身にまとっていった構えが一つ、また一つと解けて、波間を去っていった、私がほんとうの私になり、私ですらなくなり、私と彼が分かちがたくなって昇り詰めること、終わった。

そうなるまで、彼は私をじっと見ていたのだった。その視線が、腕よりもさらに私をしつかりと抱いていた。見つめられているという思いのなかで、私は漂い、流され、昇りつめることができた。

どうしてこんなに楽なのか、楽に果てまでいくことができるのか、私は一度そのことを彼に伝えようとしてみたことがある。ことば足らずの私の物言いに、

「年の功かな」

と、呟いた。そして私を振り向いて、子どもをあやすように笑った。

もしかしたらそれは相性というものなのではないのか、と私は心のなかで思ったけれども、それを口に出すことはしなかった。それよりも、さつき彼に伝えようとしたことばの端々から、私と慎也クンとの足掻きがいま見えてしまったのではないかと、そちらのほうに気を取られて、恥ずかしかったからだ。

いずれにしても、そんなことを私は口に出すべきではなかったのだ。それは、言ってみれば、私たちのあいだのルール違反のようなものだった。少なくとも私はそんなふうに思っていた。

私と杉原さんの関係は、誰の目にも止まらなかった。知られてまずいこ

とだとも考えていなかったし、だから敢えて人目を忍ぶ気もなかった。人混みでも展覧会も、居酒屋も、まったく構わずにいっしょに出入りしていたけれど、誰にも会わなかった。

唯一、変わったことがあるとすれば、それは私が楽しく日々を送ることができるようになったということだけだ。それが彼が私にくれたいちばん大きなプレゼントだった。杉原さんと会った翌日は、私はとても、底ぬけと言っているほど晴れやかな気分で、きげんがいい。そのことに、しばらくして気がついて、自分でもおかしかった。でも、きげんがいい人のことは、ふしぎと誰も気にしない。

それにもともと私はそんなにふきげんになることはなかった。あまり役に立たない女性社員にはちがいないのだけれど、そのぶん、きげんを悪くしたり、周囲を騒がせたりすることは少ないのだ。そんな私がきげんがいいということは、つまり以前とぜんぜん変わらないということ。で、誰も何も気がつかなかった。

杉原さんと会うようになって、私の生活にはほとんど変わりがなかったが、しいて言えば、以前に比べて帰りが遅くなることが増えた。それ以

前だって、ぜったい夜遊びはしないというほどヘンクツだったわけではない。独身〇〇の最大の特権は自由が利くということだ。まして親元離れた一人住まいなのだから、月に何度かは大学時代や職場の仲間と食事をしたリ呑んだりすることはあったが、その回数がちよっぴり増えた。

チンチン電車を降りて家まで歩く道は、前よりも明るくなった。

私が住んでいる宮の坂あたりも、少しずつではあるが、ようすが変わった。私が越してきた当時は、まだとても鄙びた雰囲気が残っていたのだけれど、ポツンポツンと建て替えが続いて、時折すっかり美化した町並みに気がついて驚くことがある。もっともその当時、つまり八〇年代の半ばといえ、歴史に残る高度成長期の最中で、日本中どこもかしこも掘り返され建て変えられというありさまだったから、世田谷の住宅街など、むしろ変化は少ないほうだと言ってよかった。

「ほんとにこのあたり、なんか浮き世離れしてるよねえ。住みついちゃうと、腰が重くなる気持ちも分からないじゃないあ」

会社の松本さんが、馬事公苑でのイヴェントを見た帰りに立ち寄って、言った。

「ほうら、あんな大正時代の洋館なんか残ってて、時代から取り残された

って感じじゃない。あんたがのんびりしてるのは、こういう悠長な街に住んでるせいなのね」

そう言われてみれば、たしかに思い当たる節もないではない。

それでも少しづつだが変化はある。私のことではなくて、街のことだ。

郵便局が白いタイル貼りの現代的な建物になった。変わった当座は珍しくて、小さな用事で立ち寄るのにも気恥ずかしいような感じだったが、数ヶ月ですっかり慣れて、その前はどうかだったか、もう思い出せなくなってしまう。

秘かなお気に入りだった和菓子屋さんは、とうとう閉店してしまったらしい。それがいつ店仕舞いしたのかも、私は知らずにいた。ある日、古い軒のある家がすっかりなくなつて、整地してあるのを見て、それが和菓子屋さんの跡地だと気がついたのだった。小さな家だとは思っていたが、建物が取り払われてみると、思っていたよりもさらに小さな敷地で、さすがにちよつと寂しい、ノスタルジックな気分になった。

その後には、それこそあつという間に、真新しいクリーニング店ができて、そうなつてみると、その一角はちよつと小粋で西洋風な風景を呈するようになった。和菓子屋さんの時代はそこがいちばん鄙びた場所に見えた

のに、たった一軒の店の存在が町の相貌をこうも変えるものかと、私は感心して眺めた。そういえば、それまでこの近くにちゃんとしたクリーニング店がなかったもので、便利になったとも言えるが、土曜の午後や会社の帰りがけに下高井戸にある店を使い慣れていた私としては、新しいクリーニング店の出現を喜ぶべきか古い和菓子屋さんの消滅を惜しむべきか、いささか迷うところだった。

鳥つねも変わった。昔からの店構えの三分の一を改装して、鳥肉を使つたお総菜を売るようになったのである。

これは大きな変化だった。というのも、もともと鳥つねの店は生鮮食品の商いに厳しく身を律する構えで、店内には冴えた冷気が張りつめていたからだ。下は三和土を打ち、仄暗い奥に、大きな俎にに向かう主人の背中が見える。それが鳥つねだった。その同じ建物の一隅に、火を通したものが置かれている。料理の温かさと匂いが鳥つね本来のきりりとした潔さを損なっているように見えて、それはちよつと釈然としない光景だった。

「あんなもの売るなんてって、鳥つねさん、すごくいやがっていたわ。反対したんですって、最初は。でも若い人たちの意見も立てなくちゃって、しかたなく同意したんだって言ってたわ」

遠い祭

母屋の奥さんは私に言った。

「私はまた、鳥つ根さんの考えかと思ったのよね。だって、若い頃、老舗の焼鳥屋さんで修業したって聞いたから。そしたら、とんでもありませんよって。ワタシが修業したのは焼き鳥で、あんな総菜じゃありません。だいち、生肉を扱う店にや焼き物は置かねえってのが見識ってもんです」

母屋の奥さんは人物になりきってレポートする。彼女の「鳥つねさん」は先代の主人だけを指す、いわば個人名だ。その点、ちゃんと頭を整理して話を聞かないと、私の頭が混乱する。私がほとんど姿を見たことのないその老人が、母屋の奥さんにとっては、いまだにあの店の屋台骨でもあれば看板でもあるらしい。

「若いモンが、これからは昔かたぎの商売してたら時代に立ち後れるって言うんですよ、ですって。どうもあの口ぶりからすると、熱心にやりたがったのはお嫁さんみたいね。ほんとに鳥つ根さんも、自分の流儀にはこだわる人だったけど、おとなしくなっちゃって。歳だわねえ」

「鳥つ根ねさん」の役をつと離れて、母屋の奥さんはレポーターとして自分のコメントを付け加える。

先代の主人の気持ちも分からないではない、と私は思った。新しく作っ

たコーナーを見たときに私がうつすらと感じたのも、根を探ればそういうことだった。潇洒なガラスのショーケースは、縁が淡いピンク色と白の縞模様塗られていて、まるで洋菓子屋のようだ。それはそれでなかなか見栄えのする店舗なのだが、私が抱いていた鳥つ根の毅然としたメージとは相容れなかった。

しかし、そんなレトロな美意識とは裏腹に、その総菜コーナーで売っている品はともおいしかった。もも肉の照り焼き、ミートボールのあんかけ、そして合鴨の燻製。それらは家庭でふだん作る料理にちよつとした工夫がこらしてあって、さりげなく贅沢感をそそるようにもなっていた。合鴨の燻製は高級なオードブルとして使えたし、なかでも私のお気に入り。チキンロールと名づけられた一品だった。胸肉を太めのちくわのような形に巻いて、こんがり良い色に焼き上げたもので、切ると断面がきれいならせん模様を描く。見た目もいいし、味もいい。温かいうちに食べると香りが立って柔らかくおいしいけど、冷えてもそれなりの味で、お弁当のおかずにはもってこいだ。

このチキンロールに病みつきになって以来、私が鳥つねに通う回数は前より多くなった。それが私一人だけでないとすれば、このお総菜コーナー

を開設したことは、鳥つねとして大成功だったにちがいない。

八〇年代、世の中はほとんど贅沢になっていった。外国からの輸入物資はほとんど河川の氾濫にも似た勢いで店頭にあふれていたし、食生活の面でも、少しでもおいしいもの、贅沢なものへと、人々の興味と関心は高まるばかりだった。そのいっぽうで、昔ながらの食品は生彩を失っていく。自然食品、伝統の味が見直されるようになるのは、それよりも少し後、日本経済のバブルが弾けた九〇年代の半ばからのことで、この頃はまだ、ひたすら贅沢が夢だった。いや、もしかしたら夢は現実になることもあるのかもしれないという錯覚を、みんなが信じ始めた時代だった。もちろんその幻想は、その後数年で打ち砕かれることになるのだが。

鳥つ根のお総菜コーナーは、そんな微妙に浮き足立った気持ちにうまく合っていた。このあたりの商店街にもマーケットにも、佃煮や総菜を売る店がなかったわけではない。

が、今さらそんなものを食卓に並べるのも何だかばつとしない。その点、鳥つねの合鴨の燻製とかチキンロールだと、今日はちょっと張り込んだという気分になった。晴れがましく手抜きができるところが喜ばれて、他の総菜屋の閑古鳥をよそに、なかなかの繁盛のように見受けられた。

しかも鳥つ根の総菜コーナーは、かなり遅くまで開いている。仕事が忙しくて食料品を買い込んでいる暇のない〇〇や独身サラリーマンにとっても、たいそう便利な一軒になった。玉電を降りて、暗い商店街の向こうに鳥つねのコーナーの灯りが見えると、ほっとした。買うつもりがなくても、その一角が思いのほかモダンで華やいで見えるのだった。

店番をしているのは、いつも若奥さんだった。おそらく、親たちの反対を押し切って開いたコーナーだったから、他人の協力は期待できなかったのだろう。それでも、いや、だからこそ何が何でも成功させたいという気持ちだったにちがいない。

店に入っていくと、椅子にかけて店番をしている若奥さんが黙ってこちらを見る。嫁に来た頃のように、「いらつしやいませ!」と弾んだ声を出すわけではない。夜分ということもあったろうし、昼から働きづめで疲れていたのかもしれない。だが、声を出さないぶん、こちらを見る目に表情があった。

子どもを二人産んで育てている女は、三十に手が届こうという年頃で、同性で同年齢の私から見てさえも、体の中から自然に滲み出る艶っぽさで白い立つようだった。夕方までは、店のなかでも、二人の子どものどちら

かが、母親にまつわりついている。赤ん坊を抱いていることもあれば、話しかける上の子に返事をしていてもあった。近くに子どもの姿が見えないときも、彼女はどこか母親の顔をしているのであった。母親らしく甲斐甲斐しいが、ゆとりがない。

しかし夜の店番のときはちがっていた。彼女はやっと自分の顔を取り戻しているかのようなだった。目の回るような忙しさを逃れて、やっと息のつける時間だったろうことは、傍目にもたやすく想像できた。子どもたちの世話や舅姑の目といった家族の煩わしさから解放されて、たった一人になれる場所と時間、それが新設の総菜コーナーだったのかもしれない。

確かにそれは彼女の城だった。その、ほんの小さな一隅にやっと安らぎの場を得ているような姿を見ると、店に入って貴重な孤独を騒がせるのが悪いような気さえしたものだ。

私は遠慮しながらそうと店に入る。仕事が長引いて気持ちが悪くても張りつめたままのこともあったし、杉原の愛撫で体と心の骨組みがほぐれて、それはそれで茫漠と定まらぬ顔つきのこともあっただろう。彼女はやおら腰を上げ、私の顔を見る。その一瞬に、たがいの人生の里程標のようなものがあつた。いや、そんなふうと思うのは、その後のドラマを知って

振り返る眼が、ことさらのな解釈をしたがつているだけかもしれない。

が少なくとも言えることは、あの頃の彼女も私も、三十歳という女の人生の曲がり角を緩やかに越えつつあったということだ。そのことが、まるで今は消えてしまった街の景色のように、遠く思い出される。もしかしたら、二人のそれぞれにとって、あの頃がいちばん幸せだったのかもしれないという、何とも月並みな感慨とともに。

第三章

「明日、久美子が来るんだけど、節子さん家にいる？」

いつものように、母屋の奥さんが私に聞いた。

「あ、いますよう。クーちゃん何時ごろ来るのかしら」

私はお愛想ではなく、本心から喜んで応じる。予定があってもそれを口には出さず、なんとか都合をつけてしまうこともある。

母屋の孫のクーちゃんは、まだお母さんのお腹にいるときから知っていらるか、少しずつ成長していくのが、私にはほんとに楽しみだった。

クーちゃんのお母さんの睦子さんが実家に子連れで遊びに来て、そうしては孫を母親にまかせて一人で息抜きに出かける習慣は、出産もない時

期からずっと変わらずつづいていた。

娘さんがでかけると奥さんは、私がいるのを見すまして、離れにやつてくる。

「クーコでちゅよう」と、奥さんは赤ちゃんことばで言って、離れの小さな玄関から顔を覗かせるのだが、赤ん坊のクーちゃんはべつだん私の顔を見てうれしそうなお顔をするわけでもなかった。でも私は赤ちゃんが珍しく、柔らかい体にさわっていると、ふだん味わったことのない貴重な滋味に身も心も潤うような気持ちになった。

それに赤ちゃんというのはほんとによくできていて、久しぶりに会うと見ちがえるほど成長している。一人でお座りをする、つかまり立ちができるようになった、よちよち歩く、と何かしら新しいトピックスを用意しているがあるものだから、奥さんのご自慢とクーちゃんの実演にしばし熱中して、一人暮らしには少ない歓声や笑い声を陽光のようにふり注いでくれる。

奥さんは、「まあ、クーコは節子さんになついていること。赤ちゃんに好かれるのは善い人の証拠よ」と見えすいたお世辞を言いながら、

「ちよつといい？ いまのうちに洗濯物とりこんでおきたいの」

と、クーちゃんを置いていつてしまう。私はしかたなく、長いときは小一時間も赤ちゃんと二人きりにされてしまうのだが、それが意外なほど心をほぐしてくれることに、あるとき気がついたのだった。

クーちゃんの体は柔らかく、肌がしっとり湿っていて、抱き上げると私の胸にほどよい重みとなる。うっすらといい匂いがして、眼をつぶって頬をよせると世の中のすべてを忘れてしまう。私は一人でその快感に酔いしれた。赤ちゃんを置いていかれるのは、奥さんにしてやられた気がしないでもなかったけれど、この快さに思う存分ひたり切るには、赤ちゃんとの二人きりのほうがよかった。こうしてクーちゃんを抱きしめて目をつぶっているところは、なぜだか奥さんにもクーちゃんのパパにも見られたくない気がする。

こんなに優しい気持ちにしてくれるものがいつも傍にるのは、どんなに快いものだろう。そう思ういつぽうで、ごくたまにしか会わないから、クーちゃんは私にとって、ただ心地よいだけの存在でいられるのだと、そうも考える。なぜって私の知るかぎり、親たちは子どもから少しでも自由になりたいと、その機会ばかり狙っているように見えるからだ。たぶん四六時中、昼も夜もとなるば、いかにお腹を痛めた我が子でもちよつと離れ

たくなるのだろう。その気持ちは私にも理解できないこともないけれど、それはそれとして、時たま腕に抱くクーちゃんの重みは、私にとって何かかけがえのない、貴重なものに思えるのだった。

それにしても、ただ一人の人間が出現して、少しずつ大きくなっていくというだけのこと、そのつど、これほど大きな出来事だというのは、なんて奇妙なことだろう。クーちゃんの子守をした次の日は、電車に乗っても会社で仕事をしていても、まわりのおとなを見る目がいつもと違うのだった。会計課長を見ても、この人が赤ちゃんだったとき、と考えてしまう。そうすると、滑稽なような、もったいないような、妙な気分になる。妙な気分になった自分がおかしくて、心の中で笑ってしまう。もちろんその一瞬後には、どの赤ちゃんもなしぐずしにふつうの人になってしまふんだなあ、と、無念な波が寄せて返して、またすぐ変哲もない日常に戻ってしまうのだけ。

じっさい、クーちゃんと遊んだあとは、私は心身ともに、底の底から安らかになっっているのだった。その点で私にとってクーちゃん存在は杉原さんとちよつと似ていたが、彼よりさらに柔らかく、敏感で、いかにもか弱かった。そして、か弱いものに精魂こめて向き合う自分という、かつて

ない経験を与えてくれただけでなく、そうしたものが形づくる神秘的で甘美な精神領域も教えてくれたのだった。その感動がたぶん、慈愛と呼ばれるものの核になるのではないかと、私は思った。

そんなふうなことを私に考えさせることで、クーちゃんはただ身近にいる知り合いの子どもというだけでなく、私にとってかけがえのない存在になっていった。

よちよち歩きをする頃になると、クーちゃんはほんとに私になついてしまった。赤んぼうのとき奥さんが「あらま、節子さんによくなついちゃって」と言ったのは、お世辞半分に策略半分だったが、お誕生をすぎたクーちゃんが私になついたのは、まぎれもない事実だった。母屋に來ると、すぐ離れの私のほうに來たがる。それを奥さんが、「久美子ったら、ほんとに節子さんが好きなのねえ」と、今度はやつかみ半分、開放感半分の口調で言った。

クーちゃんは柔らかい足で一步、二歩と歩く。こんな柔らかい足で歩くことができるなんて、ふしぎになるほど柔らかくて小さな足なのだ。すたすたと歩いてへたり込むこともある。立ち止まって私を見上げ、手を伸ばして助けを求めることもある。それをこの腕に抱き取る楽しさは、何にも

たとえようがなかった。

離れに來て私の姿を見つけると、喜びに顔を輝かせる。こどもの喜びというのは、命そのものの輝きではないだろうか。何がうれしい、何がほしいというのではなく、世界の存在そのものがうれしい、生きていることそのもので輝いている、そんな感じのだ。私のことが特別に気に入っているのだとか、そんなふうにいるまでもなく、その喜びに輝く顔をみると、もう抱き上げないではいられない。思うより先に、私の体のほうがかってに動いてしまう。柔らかくて重くて、その重さ自体が快い体を抱き取ると、クーちゃんは私の首筋にホッペタすり寄せてきて、指でそおと木戸を指す。つまり外に出たかったのだ。私ならたいていのことは言いなりだということとを、こども心にちゃんと分かっているのだ。私もすっかりそれに乗せられて、散歩に行かされて、それで満足している。私はたまに会うよその人である。クーちゃんなりに把握している世界観と、それに基づく計算があった。

杉原さんときき合い始めた頃、クーちゃんは三歳になっていた。

彼と逢っているときも、私はよくクーちゃんの話をする。彼に逢うのと、クーちゃんの子守をするのがちょうど同じくらいの間隔なので、何かしら

人に話してみたくなる新規の出来事があるのだ。

「またクーちゃんの話？」

冷やかすような微苦笑を浮かべながらも、杉原さんはよく話を聞いてくれた。彼にも子どもがいたからだ。

彼の子どものことを私が知ってしまったのは、奇妙な偶然だった。

カウンター式の炭火焼きの店で、彼の向こう隣りに座った男が、たまたま人恋しかったのか、彼に話しかけてきたのだった。

「大学生の娘のようすを見に来たんですけどね。いや、うちが茨木でしてね、娘が東京の大学に入って、一人暮らしをしているもんですからね、家内と代わりばんこってな感じで、ときどき見に来るんですけどねえ。何ですよねえ、まあ、女の子が一人で暮らしてゐるのも、心配なもんですよ」

杉原さんは口では何とも言わず、頭でうなづくだけの相手をしている。

「最初の一年くらいははね、行くと喜んだんですよ。心細かったんですよかね。飯を食わせて、二人で布団を並べて寝ましたよ。そんなこと、家にいる時だったことありませんでしたからねえ、娘と水入らずつてのもいいもんだ、なんて思ってたんですけどねえ。すぐ慣れちゃいましたね、いや娘が東京の生活に慣れたんですよ。で、もう、すっかりして。最近じ

や、お父さん、ホテルに泊まりなさいよって言うんですよ。お父さんがいると、朝ごはん作らなきゃいけないし大変なのよって。それに同じ部屋で男の人と寝るのはいやっ、なんて言うんですよ」

杉原さん越しにその話を聞いて、私は思わず笑ってしまふ。私は高校のときに父を亡くしたので、そういう経験はなかったけれども、その娘さんの気持ちもわかるような気がする。

「でね、娘のところからホテルへ寝に帰るところなんですけどね。まだ時間も早いし……」

一杯飲まずにいらなかった気持ち、私にもよく分かる。それに、見ず知らずの人とでも、おしゃべりしたい気分も。杉原さんもそう察したのだろう、無下に相手を振り切るようなようすは見せないでいる。

「いや、しっかりしたのはいいんです。しっかりしただけならいいんですよ。なんてったらいいのかなあ、その親を遠ざける感じがね、男でもいるんじゃないかって気がしてねえ」

男の声が小さくなった。

「気になりはじめると、ついあれこれ考えちゃまってねえ。ねえ、あなた、今の時代は若い娘も自由気ままにやっていいんですよかねえ。どう

も、わかんないんですよ。娘は嫁に出すまで親元に置いときたいって思うのは古いんですかねえ」

「まあ、そう思うのが親心でしょうけど」

「あなた、お子さんは」

「はあ、いますよ」

「お嬢さんですか」

「女の子が一人、男の子が一人」

話の矛先がこちらに向いて、杉原さんが煙をよけるような表情をする。

「お嬢さんお幾つですか」

「いま高三」

「息子さんは？」

「高一です」

「そりゃ、けっこうですな。けっこうな、マイ・ホーム！」

少々酔いが回ってきた男は声を張り上げる。少し気が晴れてきたのかもしれない。杉原さんは横にいる私を気にして、ちょっと居心地が悪そうだ。小さいな丸い椅子の上でお尻を動かしている。でも、男はいつこうに気にかけない。

「子どもなんて高校までですよ、あなた。もう大学に行っちゃったら、もう抑えが利きません、こっちが向こうの顔色見るようなぐあいだね」

「…」

「でもまあ、お宅さんは東京に住んでらっしゃる？ うんうん。ま家があれば、親元ですわね。手放しちゃあ、おしまいです。何してるか、わかったもんじゃない。たとえ男ができたって、もう親の目は届きませんかねえ」

考えたこともなかった子どもの出現は、そうと知ってみれば意外でも不愉快でもなかったけれど、奇妙な存在感があった。

「娘さん、高三なの。じゃ受験とか…」

隣の男からようやく解放された杉原さんに、私はつい聞いてしまった。気詰まりなのを避けたかったただけなのだが、よく考えずに聞いてから、内心ホゾを噛んだ。

「そうのうだね」

低い声で、彼は応えた。それから私のほうに向き直って、ニツと晴れやかに笑った。私はあわてて他の話題を探した。

杉原さんは家庭の匂いのする話をさけている。もともとあまり家庭を感じさせる人ではないので、それは少しも不自然に思わなかった。

私もそういう話を聞きたいとは思わない。私たちはそういう関係ではなかった。たぶん、そうした煩わしさから逃れるための、私の存在なのだろうと察している。もちろん、私がそこまで察してあげる義理もないのだけだ。

それでも、ちよつと際どいとは思いつながら、私はクーちゃんのことを杉原に話さないではいられなかった。それは私の心をいちばん軽くしてくれる話題だったからだ。彼も、「またあ？」と皮肉っておきながら、ついつい引き込まれてしまうのは、幼いわが子を抱いた記憶が甦るからにちがいないかった。

「昨日、クーちゃんと散歩に行つて、帰りにおもちゃを買つてあげたのね。そしたら手に持つて、じつと黙つて考え込んでるのよ。もらつていいののかどうか、悩んでたみたい。まだ三つなのになえ」

「子どもってなんにも考えてないようで、自分に大事なことはみんなわかつてるんだよね。むじゃきな顔して、じつにうまく大人を籠絡することもあるし、そうかと思うと、微妙なところでだけじめをつけてたりする」

思い当たる節のある目つきで言う。その、私が知らない遠くの景色を見る眼。その眼に宿る光は、私には珍しくて好ましい。でもその眼の先にあるものを、あえて確かめようとは思わない。この遙かな眼が好きなのだ。彼方にあるその景色を私が知ってしまったら、その眼から遙かなものの光が消えるだろう。

「そうなのかしら。私なんか、ふだんはいいように使われっぱなしよ。でも、それでいて遠慮したりなんかして。そのへんが微妙でいいんだっていうような気もするの。母屋の奥さんが言うのよ。うちの人じゃないと思つて久美子、節子さんにはよそ行きの顔をしてるわつて。ふだんよりいい子にしてて、それにもつと甘えるつて」

「ああ、子ども心に外面つてあるんだよね。そうやって、少しずつ社会性がついていくんだな。それでも、ほんとに重大な事態になると、家族しか信用しないよ。いや、父親でもだめ母親じゃなきゃ、つてなる。家の娘も小さい時はパパ、パパつてまつわりついてたけど、熱なんかだと母親じゃなきゃだめだったねえ」

「身近じゃないから愛想よくできるということと、そのくせ心底信用はしてないということは、結局はおなじことなのかもしれない。でも信用され

ない良さってものもあるわよ」

言ってしまったって、また危ない橋を渡ったと内心ヒヤツとする。決して決して、私たちの話をしているわけではない。そうではないのだけれど、そんなふうにも解釈されるようなことは口にしたくない。お互いの心の中をかき回すようなことはしてはいけない。

クーちゃんの話をするからといって、私がほんとに結婚して子どもを欲しがっているのだと、杉原が憶測する心配はまったくなかった。ましてそういう意味で私が彼に何かを迫っているのだと誤解するはずはなかった。でも他の人は、私がクーちゃんの話をする、たいていは微妙な表情を見せる。

たとえば母屋の奥さんは、私がクーちゃんを抱くのにつきり慣れたとお世辞を言ったそのすぐあとで、

「節子さんも、そんな他人の子じゃなくて自分の子を抱いてるんだったら、ほんとに幸せだったでしょうにねえ」

と言う。同じことを何度言われたかもしれない。自分から連れてきて、腕に抱かせておいて言うことではないでしょうが、と私は思うけれど、黙って笑っている。奥さんの言うことにそれとなく同意しているわけでもなく、

口惜しいのを我慢して笑っているわけでもない。他人の子のクーちゃんを抱いている自分が、そのままで気に入っている。それが幸せで、だから笑っている。

なぜだろう、どうしてだろう、もしクーちゃんが自分の子だったら、これはちょっと怖いかもしれない感じなのだ。自分で生んで育てるほどのエネルギーは、私にはない。少なくとも、いまの私には実感がない。それでもこの柔らかさ、この温もり、この愛らしさが、いまこのとき、私の腕のなかにある。それは何ともいえず幸せなことだった。なぜって、どんなに手を焼いたとしても、一時間か二時間しか私のところに留まっていはいないもの。それを過ぎたらなくなってしまうもの。いなくなっても、可愛かったなあ、重かったなあ、ただ思い出すだけになってしまうもの。

その短いつき合いが、短いというだけで私には貴重に思えるのだった。これが永遠につづくのだと思ったら、私にはその思いだけで、もう押しつぶされるような圧迫感だったにちがいない。

私はすごく薄情なのかもしれない。そうでなければすごく弱虫なのかも。そんなふうにあれこれ考えてみることもあったけれども、われながら、ど

ちらもあまり本当らしくは思えなかった。ただ、短いひととき腕のなかにあるものを大切にしている感じが、とても好きだった。

それは杉原さんとのつきあいについても言えることだった。薄情で弱虫、でもそれでいいじゃないの。私はあなたの何なのよ、そんなことは言えやしないし、言う気もない。ときどき会う、よその人。それって、すてきなことじゃないかと思う。

四歳になったクーちゃんは、なかなかのアーティストになっていた。離れに来る度に、ワンマン・ショーをやってみせてくれるのである。

それはひよんなことがきつかけだった。ある日、いつものように私の机の上のガラクタを物色していたクーちゃんが、見慣れた柄付きの虫メガネを取り上げると、自分の口元へあてて、歌を歌い始めた。

「ペーぱーけー」

クーちゃんはおしゃべりは上手だったが、そのとき歌っていることばは、私には理解不可能だった。

「なんの歌なの？」私はたずねた。

「ペーぱーけー」 たったいまカナキリ声で叫んだのと同じことを、クーちゃんは柔らかな声で言ったが、それも私にはよくわからない。

「ペーぱーけー？ ふうん、クーちゃん、その歌が好きなの」

クーちゃんほうなづく。コックリしたうなじが斜めに流れたのはちよつと恥ずかしいから。クーちゃんのそのクセを、私は知っている。

「じょうずねえ。もう一回うたってくれる？」

クーちゃんは今度はすぐうれしそうにコックリして、***のマイクを口にとっていくと、また声をはりあげた。

「ペーぱーけー、ちゃーまーあ、あ、にゃー、ペーぱーけー・・・」

歌はいつまでも止まない。長い歌のようだ。自分の世界に完全に浸りこんで、柔らかな髪を揺らしているクーちゃんを、私はぼんやり眺めていた。私にとっては、いよいよもなくのどかな、安らぎのひとつだった。

クーちゃんの歌は、正直にいった私には歌とは聞こえなかったのだが、その意味不明の歌詞はなぜだか耳の底に残った。クーちゃんの甘い息や、ほの温かい肌触りとともに記憶の底に沈んでいて、翌日、会社でふいに浮かび上がってきたりする。

資料をめくりながら、気がつくひとりで口ずさんでいたりする。「ペーぱーけー、ちゃーまーあ」

「何を歌ってるの？」隣の机の山田さんが聞く。

「歌に聞こえますか？」

「歌じゃなきゃ何なの？」

確かに山田さんの言うとおり、歌の態を成していなくても、じゃあ、歌でないなら何なのさ。

「ねえ、山田さん、ひょっとして、こういう歌知りませんか？」私は前より大きい声で、もっとしっかりと発音してみる。「ペーバーキー、チャーミーあ」

「……………」

じっと聞き入っていた山田さんは、黙って首を横にふる。ばかばかしくて取り合ってられないという顔だ。私はおもわず笑ってしまう。

会社から得意先に向かう電車の中なんかでも、唐突にクーちゃんの歌声が鼻先をかすめることがあった。すると私はとたんにわけもなく幸せになつて、つい口元がゆるんでしまうのである。思い出し笑い、そう、それに似ている。そういえば、杉原さんと親しくなったばかりの頃にも、そういうことがあった。その時は口元だけでもほほえんだりせず、思いを押さえたものだった。でも、クーちゃんのこととなると、つい無防備に笑ってしまう。

人前でほほえむかほほえないかの違いはあっても、クーちゃんと杉原さんは私にとって似たような存在だった。

ある日、母屋の奥さんが迎えにきたとき、私は言った。「クーちゃんが歌をうたってくれたんですよ」

すると奥さんは「まあ、久美子が歌をうたったの？ 私たちの前では歌ってくれたことなんて一度もないのに」

本気でびつくりしたように奥さんは言った。当のクーちゃんとは見れば、ちよつと赤くなつて下を向き、それから上目づかいに私の顔を見上げた。

その目が、『ヒミツにして』と頼んでいる。

私は「ちよつとだけね、ほんの鼻歌」とその場をごまかした。

「でしよう？ この子、テレビで歌をやっていると、いっしょうけんめい見てるの。歌は好きみたい。でも自分じゃぜったい歌わないの」

奥さんは納得がいて、そう説明した。

家族の前では歌わないクーちゃんが、なぜ私の前では歌うのだらう。それもあんなに長々と、夢中になつて。その理由を、私は一種の練習台だらうと考えた。家族の前で歌わないのは、母や祖母が近すぎる場において、過度に喜ばれたり、がっかりされたりするのがわずらわしくもあるし、怖く

もあるからだ。日常から切り離された私という人間と、私の部屋という他所の空間で、幼いクーちゃんはいつもの肉親的な束縛を離れて自分を解放していたのにちがいない。私の前で、やっと一人になっていたのだ。クーちゃんにとっての私は、少ばかり杉原さんにとっての私と通じるものがあったのかもしれない。

人は時に自分を解放することが必要なのである。

クーちゃんは歌もうたったが、そのうちにお芝居もするようになった。そうになると、私にも出番が回ってくる。

ある日、クーちゃんは椅子の背にかけてあった私のスカーフを頭からすっぽりと被った。そして私にむかって、

「セッコさん、王子さまね」と否定もない口調で言った。

「王子さま？ 私？ どうすればいいの？」

演劇未経験の私は、とほうにくれて聞く。

「ここに座って」

彼女はクッションをもってきて、私を座らせる。

「はい、王子さま。わたしがご本を読んであげましょう。おもしろいですか？ もう眠くなりましたか。ではお休みなさい」

ひとりでしゃべっている。王子さまは何もいうことがない。クーちゃんの台詞に合わせて首をふったり、横になったりするだけだ。

「だめですよ、王子さま。こんなところで寝ちゃあ」

どこで寝ているのだ、私は。どこか寝てはいけないうところらしい。そう言っているクーちゃんは、いったい誰なのだろう。

「クーちゃんは何なの？」

だめですよ、と言ったときの断固たる仮面をいつとき脱いで、自信のなさそうな上目づかいで応える。

「クーちゃん、お姫さま」

「そうなの。きれいで優しいお姫さまねえ」

クーちゃんは最高に満足そうな笑みを波紋のように広げる。ほほえみの輪に埋もれて溺れてしまいそうに、やんわりとアゴを出す。

そんなクーちゃんと私のお芝居のことは、私は母屋の奥さんには話さなかった。それはふたりだけの秘め事だった。その程度には、私もクーちゃんの気持ちを察することができるようになっていた。

その日クーちゃんが何をするかは、見当がつかない。彼女にはその時々ブームがあって、一時期「お姫さまごっこ」に夢中になっていた。一

遠い祭

ヶ月もすると、気持ちはずっかり他のことに移ってしまう。そんなとき、うっかり私が「お姫さまは？」などと言おうものなら、完全に軽蔑したような顔で却下する。まだそんなガキっぽいことを言ってるの、と言わんばかりだ。だから、毎度毎度、彼女が提案するのを待つしかないのである。次ぎに何が出てくるか、それを待つのもまた、楽しみだった。何しろ飽きているひまがない。

クーちゃんが私の離れに遊びにくると、頃合いを見はからって奥さんが迎えにくる。すでに慣例になって、狂いのない手順である。

「久美子、いつまでもお邪魔してると節子さんのご迷惑よう。ねえ、節子さん」

そう言って私を見る奥さんの眼にはまったくウソはないのだが、でも奥さんもクーちゃんのお迎えを口実にしたいことがある。私相手に、ご近所のニュース解説。この界隈の主婦たちとは日頃からさんざん情報交換をしているのだが、それだけにまったく白紙の状態で、いわば編集済みの《総集編》を聞いてくれる私という視聴者が、奥さんにとっても喜ばしい存在である。もちろん、近くに住んでいながら何も知らずにいるなんて、除け者みたいで気の毒だわ、と思ってくれているのも、いつわりのない真情ではある。

はある。

「節子さん、最近お豆腐さんに行ってみた？　ちょっとおいしくなったと思わない？」

ナニ、お豆腐屋さん？　奥さんのトピックスはクーちゃんの遊びのネタと同じくらい、唐突だ。「お豆腐屋さん」の一言が、私の頭の中を駆けめぐり、あわただしく配線のスイッチを切り換えていく。

「あそこ、息子が帰ってきたでしょ？　ほうら、あのドラ息子。大学まで出してやったのに、バンドかなんかに入って、家おっぱり出して出ていった子がいたじゃない」

「……………」

その話、聞いたことがあるかないか、知ってるのか知らないのか、われながら確かでない。それで頭を縦に振るでもなく横に振るでもなく、ついグルグル回してしまう。私のクセみたいだ。デスクの村田さんに言われてはじめて自分でも気がついたのだけど。

「ほらあ、またそんなに頭ばっか回してないで。少しは考えろよ」

彼がそう言ったら、ミーティングのテーブルについていた全員が笑った。びっくりしていると、

「あんたのクセ…」

松本さんが小声で言った。

「あーら、知らない？ 前に話したこと、なかったかしらねえ」

奥さんはぞくぞくしたように嬉しそうな顔をする。たっぷり話す材料がある時の、ご満悦の表情だ。今日はアイロン掛けはできないかもしれない、と私は内心思う。

「お豆腐屋さんの息子ってね、ちよつと出来のいい子って思われてたの、昔はね。小学校の頃から勉強もできたりして。それにホラ、見た目も悪くないじゃない？」

「……」（頭グルグル）。そうか、こういう時に回すのか、と内心思う。

「あ、節子さん見たことないんだったつけ。ま、そんな目を引くようなすごい美形ってわけじゃないけど、そこそこいい男の子だったわけ」

「……」

私の眼はクーちゃんを追っている。おばあちゃんの目を逃れたクーちゃんは、私の鏡台を探検しているところだ。いつも興味津々そちらへ向かう彼女の注意を、いつもなら私はうまくそらすのだが、今は自由にならない。「そうなのよ、裏の藤田さんとこの娘さんなんか、あの子に夢中だったん

だからあ。お母さんが、困ったものですわ、って言ってたもの」

奥さんはわざわざ気取った甲高い声を作って言う。奥さんは、この裏の藤田さんがあまり好きではない。先代の時代からの家の格式の上下だか、おたがい若いお嫁さんだった頃の気持ちの行き違いだか、何かしら事情があるらしいのだけど、奥さんはそのへんのことは詳しくは言いたがらない。奥さんにも、話したくない事柄があるという希有な例だ。話はしないが、ただ藤田さんの奥さんのこととなると、わざとらしく甲高い声を作る。

「それはまあ、どうでもいいこと。どうでもいいことだけどね、それくらい、この辺りではちよつと光る子だったわけよ。でね、高校を出たら大学に進学したのよ。そりゃ、当節だれだって大学ぐらい行くわよ。別にめずらしいことじゃないんだけど、でも、もうその頃はあのお豆腐屋さんのおじさんが、だいぶ体の具合が悪くなつて、店をやつてくのもちよつと辛そうだったりもしたものだから、どうなるのかしらねえなんて、ま、噂したりしてたわけよ」

私がまだここへ引越してこない頃だけど、PTAのおつき合いや買い物帰りの立ち話など、目に見えるような気がする。それだけ、私もこの土地に慣れたということだろうか。そういう実感を土地に対して持つという

のは、悪いものではない。

「まあね、大学に行ったのはいいわよ。いまどきは勉強なんかぜんぜんする気のない子だって大学に行くご時世なんだから。ねえ？ でもね、その後がよくないの、バンドっていうの？ あのジャカジャカやる若い人向きの楽団、あれに入っちゃったのよねえ」

楽団…、なんとまあ、古い表現。でもバンドを日本語に直すとしたら、そうとしか言いようはないかも。

「なんかね、聞いたところだと、大学に通っていたところから、そういう仲間とつき合ってたらしいのよ。それがとうとう、ねええ？」

奥さんは、まるで不良かヤクザの仲間になってしまった、とでもいうような深刻な秘密をもらすように、あたりをはばかりて声をひそめ、下からすくいあげるように私の眼をのぞき込んだ。

「なにもそこまですること、ないじゃないの、ねえ節子さん。大学行っただけだって、みんなは心配してたのよう。豆腐屋だっていうのに、それも店がつぶれそうだっていうのに。それなのに、店の稼業を手伝うどころか、バンド？ なんかに入っちゃったなんてねえ？ どう思う？ 節子さん」

どう思う？ と問われても、私には返事のしようがなかった。

確かに当時、グループ・サウンズの流れを汲んで、ロックやポップのバンドが無数に誕生していた。そのなかで技もあって、たまたま運にも恵まれた人たちは、テレビの電波に乗って名を上げたのだろうし、そこまで行かなくても、広い日本で、それなりに生活をしていくことは可能だったのではないだろうか。まあ、上には上があり、下には下がある、そういう話ではあるうけれど。

いずれにしても、バンドを組むには何か楽器ができなくては無理。ということはつまり、あのお豆腐屋の息子という人は、それができたのだ。そう考えると、私には見知りのお豆腐屋にまでも、一筋の光が添うように感じられた。楽器のできる人には、私はなぜだかコンプレックスがあるのだ。

「でねえ、みんな気にかけてたのよ、お節介みただけど。で時どきは、おばさんに聞いてみたりしたんだけど…。それがねえ、あのおばさんも変わってるのよ、やっぱり親が変わってるから、子どももおかしくなるのかしらね。息子さん、どうしてる？ って聞くでしょ？ そうすると、すごく得意そうなのよ。ええ、元気にやってますよ、こないだはどここの何ちゃらフェスティバルで演奏したんですよー、とかって。フェスティバルってなんのこと？ 実演つきのバーか何かかしら」

さあ、わからないけど、それなりにキャリアを積んでいたのだろう。奥さんが考えているように、悪い仲間に入っていたというわけでもないらしい。

「そのあいだに、お豆腐屋さんは屋台骨がどんどん傾いていくでしょう？ おじさんの具合も悪くなってる。息子が帰ってきて稼業をやってくれればいいのに。何たって、ひとり息子なんだから。でも、あの道楽息子は家出同然にそこらをほつき歩いてばかりで、家に寄りつきやしなかった！」

奥さんはまるで自分の子どものことのように、苦々しげに吐き捨てた。だが私としては彼女の孫の現在の行動が心配だ。部屋奥にいるクーちゃん、黙ってステイルの椅子を引き寄せ、その上によじ登ると、ついに念願の鏡台に向かいあったところだった。椅子を持ってくるところなんぞ、ほんとにこの子は頭がいい。しかもそういう時にかぎって、彼女の行動はじつに物静かで、音ひとつ立てないのだ。彼女の目の前には化粧水やブラシ、爪切りなど、幼い女ごころを果てしない夢にかりたてる魔法の品々が並んでいる。いままで何度か手が届きそうになって、その度に、このセッコさんの邪魔が入った。それが今日こそは未知なる神秘に触れることができるそうなのだ。セッコさんはおばあちゃまと話し込んでいて、私のほ

うを見てはいない。今こそチャンス！ 感動の予感で、彼女の細い首筋を戦慄が走る！ まさにその瞬間、私はクーちゃんを背後から抱きすくめると、さらにこちら向きに抱き直し、禁止区域外へ拉致した。

それを見て、彼女の祖母はクーちゃん存在を思い出し、ひとまず豆腐屋の息子の件を脇に置いて、

「あーら久美子、あんた何かイタズラしてたんじゃないの？ いい子にしてなきやダメだからね」

私への義理立てで形ばかり、小言をいったが、孫は気にもかけない、それよりも、まさに手が届くばかりのところまで接近したのに、あわやというところでまたも逃した魔法の国への夢がまだ覚めやらず、小さな胸がどきどきしている。その背中を私はゆっくりさする。気持ち分るけど、でもね。ちよつとね。ね。クーちゃんは私を上目づかに睨んで、心を揺らしている。泣いちゃおうかな、やめとこうかな、泣いちゃおうか、やめよかな……

私はクーちゃんにともなく、彼女のおばあちゃんにともなく、首をグルグルと回して、笑いにごまかしている。

「そうお？ それならいいけど。何か悪いことしたら叱ってやってちょう

「だいねー」

奥さんは心にも思っていないことを言いながら、それより自分の話のつづきが気になって、クーちゃんのイタズラから早々に立ち直った。

「それで、お豆腐屋さんの息子は、あ、義一くんというんだけどね、太田義一。そのバンドとかをずっーとやってたわけ。なんか、テレビに出たこともあるみたいよ。私は、ホラ、そういうのよく分からないから番組も何も知らないし、もちろん見たわけじゃないんだけどね、でも藤田さんとの敦子ちゃんがキャーキャー言ってたって、奥さんが後で教えてくれたの。同級生たちがみんな連絡しあって、ちよつとした騒ぎだったみたいよ。ま、そうあることでもないから、当然かもしれないけど、それにしてもねえ……？」

すくい上げるような睨み眼で私をスリーツとまであげる。そう言う奥さんだって、知り合いがテレビに出るといふことにでもなったら、真っ先に騒ぎ回るくちだと思うのだけど、自分が騒ぎの外に置かれると逆に拗ねるだ、この人は。

「いくら珍しいたって、家の稼業がどうにもならないって時にやることじゃないでしょ、って思ってたわけ私たちは」

私たち、というのは厳密に言えば誰？

「だってほんとに大変だったんだもの、その頃のお豆腐屋さんは。前にも話したことあるかしら？」

奥さんは私の眼をひたとみつめた。私はちよつとあわて、身を引く。ある時期、お豆腐屋さんが大変だったという話は、たしかに前にも聞いたような気がする。しかし、聞いたかと言われると、聞いたかどうか自信がない。だって、奥さんの話はいつも一つのテーマから別のテーマへと縦横無尽に飛躍するし、そのくせ一つのテーマを何回にもわたって掘り下げて、まるで井戸を少しづつ掘っていくような具合なので、聞いたというのも真実なら、まだちゃんとは聞いてないということも、じゅうぶんありうるのだ。それなのに奥さんときたら、相手かまわずしゃべり込む街の講師でありながら、即興芸の常として出たと勝負、いつ、だれに、どこまで話したか、まったく自覚していない。それで、いつも相手に訊ねるのである、

「前にも話したことあるかしら？」

私はしかたなく、黙って首をグルグル回す。イエス、そしてノーの印。

「そう……」

奥さんは納得して話を続ける。どう納得したのかは、わからない。

「親父さんが病気になってねえ、氣丈で働き者だったんだけど。それで、お豆腐を作る人がいなくなって、親父さんの先輩だった人なんかおぼさんを助けて、稼業を続けていたんだけど、それでもどうにもこうにもうまくいなくて…。もう店を畳むしかないじゃないかってとこまで来てたのよ」

かいつまんで要約すると、まるで自分の店のことみたいに、奥さんはため息をついた。それも私たちとかいう人たちの一致した見解だったのだろうか？

「おばさんはね、あれは呑気っていうのか、無責任っていうのか、ぜんぜん気にしてないようだったわね。あの人は変わってるの。私たちが心配してるのに、どこ吹く風って顔して、毎日出来ぐあいのちがうお豆腐を売っていた」

すべては時の運、そう思っていたのかもしれない。私はふいに青年から納豆を奪い取った日、傍で見ていた彼女の超然とした表情を思い出した。どんな状況でも、ああやって空の彼方を眺めるような顔をして生きていくことができるのなら、それはたいしたことかもしれない。たとえ人に変わり者と言われたとしても。

「そういう状況なんだから、ねえ？ 息子が働ける年になったら、家の仕事をするのがほんとじゃない？ それなのに、大学へ行ってしまった！ 大学へ行って、まともな会社就職をして親を安心もさせ、家計も助けるいうのならともかく、妙なグループに入って、ろくに勉強もしないで、ドンチャカやってる。それじゃあダメだって言うの、私は。それでテレビに出たからって、そう世の中は甘くありませんよ。同級生が騒いだって、そんなの、ただの若者ケイハクよ」

なんか、コトバ遣いが少しおかしい。それはともかく、プロやアマチュア含めて世にバンドの数も多かろうと思うのに、奥さんの話を聞いたかぎりでは、すっかり芽が出たようではないか。同級生が騒いでくれるほどになればたいしたものだと、私は内心思う。騒いでくれるだけで、やった甲斐があるのじゃないかしら。だって、ほかに何がある？ これって、軽薄だろうか。

「そうよ、ケイハク。まずは、やるべきことをやらなくちゃ。お豆腐屋なら、お豆腐を作る！ ぐじゃぐじゃだったり、硬すぎたりしてるようじゃダメなの。マトモなお豆腐を作る！ それが筋ってものです」

なんとなく、軽薄なのは、できそこないの豆腐そのものであるような氣

がしてきた。それなら私も賛成。もつとも私はお豆腐はスーパーで買うことに決めてしまったので、さほど関係ないといえば関係ないけれど。

豆腐屋は豆腐を作るべしという理屈は、それだけ聞くとたしかにひどく古臭いのだけど、しかし奥さんの言い分を順ぐりに聞いていると、通らない話でもないような気がしてくるのだった。大衆演劇の人情ものを見ている時みたいで、あ、古いな、偏ってるな、と思うのだけど、なんか無理矢理グイと引き寄せられて、ついだに涙ぐんだりさせられてしまう、そんな迫力が、奥さんの話にはあった。

それというのも、私もそれまでに何度か買って、この店の豆腐を知っていたからだ。持ってるだけでグチャグチャと角がの崩れたり、割れてしまったりする豆腐は、端的に納得がいかない。それでも私のように、スーパーに乗り替える薄情さがあればいいのだけれど、過去のしがらみやなんかでそうもできない時は、やっぱりこちらも豆腐屋の運命に巻き込まれて、何か気持ちグチャグチャになってしまう。そしてそのグチャグチャが、じつに何ともいえず大衆演劇的で、ますます底なしの泥沼に引き込むような吸引力を持つているのだった。

私はちよつと息苦しくなつて、ふつと横を向き、同じお豆腐屋さんの納

豆のことを考えた。これはこれで、ほんとに実の締まった、香り高い納豆である。あんなに美味しい納豆、もつと置けばもつと売れるのだろうに、ほんの少量しか仕入れないところが、それはそれで潔くていい。

横を向いたついでにクーちゃんを見ると、彼女は熱心にリボンの束を解している最中だ。包装のリボンを、私は小さな輪に巻き直して、きれいな箱に入れてある。この箱の中味は、クーちゃんがしたい放題、好き勝手にやっていいことになっている。

それら色とりどりのリボンに輪を一つ一つ解いていくのが、クーちゃんのお気に入り仕事だった。それに夢中になっている時、彼女の全身はクリイティヴな暈にすっぽり包まれる。ちよつと離れたところから、微光を放っている彼女の背中を眺めているのが、私はとても好きだった。私まで、この完全無欠な熱中の潔さで洗われるような気がする。

で、納豆に関してはそういう潔さのある豆腐屋が、なぜ人情喜劇のようにグチャグチャの豆腐しか作れないのか、思えばふしぎな気もするが、要するに、いま現に店の仕事を一手にやっているおばさんが、豆腐の出来も、納豆の仕入れの量も、一切考えない哲人であるからではないか。

「まあねえ、ああいう母親だからねえ、息子にはやりたいことをさせよう

遠い祭

と思ってるのかもしれないわ。気取ってるのよ」

奥さんは、私の思いを察したように言った、いったん察しておいて、さりげなくブレーキをかける口調で。

「でも、あんな母親だから、ほっとくわけにはいかない気もするの。そうじゃない？ 節子さん、だって迷惑してるのはお母さんより私たちのほうよ。まったく！ 何とかして貰いたいもんだわ、このお豆腐って思ってたの。：そしたら、そしたらね」

奥さんは思わせぶりに一呼吸入れ、観客、つまり私の顔色をうかがった。その間合いがじつにいい。天性の才能というべきか。ただの奥さんにしておくのはもったいないような気に、ふとなってしまう。

「そしたらねえ、節子さん、帰ってきたのよー、息子が！」

話の流れからすれば、当然そういう落ちにしかならないはずなのだが、それにもかかわらず私は大いなるドンデン返しに直面したように感動する。思えば放蕩息子の子帰還は、聖書の時代から感動的なテーマだ。

「ある日お豆腐屋さんに行ったら、まあ何と、いるじゃないのお、義イっちゃん！ それも前垂れなんかかけて、ゴム長履いてねえ。アア、義イっちゃん、帰ってきたのお？ って、思わず言ってしまったわ、わた

し」

まるで、同級生の追っかけ女子のように黄色い声を奥さんは出して、胸の前で両手を合わせた。

「でもね、わたしの顔を見ても知らんぷりなのよ。知らないわけ、ないと思うんだけどねえ。だって昔からずっと買い物に行ってたし、もつと言えば、あの子が生まれる前から、うちは親父さんが決まって立ち寄るお得意先だったのに…。」

「そうね、ま、そんな昔の話はあの子の知ったことではないわね。それれはそうとしてもよ」

私は何も言ったわけではないのに、奥さんは無言の反論を柔軟に受け入れ、まあまあという譲歩の趣で手首を上下させた後で、主張を前進させる。

「それでも、お客が自分の名前を呼んで話しかけてるんだから、何か言ってもよさそなものでしょうが！ ハア、のひとつやふたつ。それが、なあんにも言わずに黙ってるの。失礼しちゃうわ！ 横向いたきりなんですもの」

確かに、それは客商売としてはあまり勧められたことではないかもしれない。しかし考えようでは、小さい頃を知っている近所のおばさんだった

からこそ、客ではあっても、ついそつぽを向いてしまったのではないだろうか。奥さんの伝えるところによる豆腐屋の息子の、この愛想の無さは、私にはかえつ好感が持てる気がした。

というより、この時はじめて、私はその青年を一人の人間として認識したのだった。もし、その時、つまり奥さんが懐かしさに呼びかけた時、ふつうの愛想良さで返事をしていたとしたら、私はその《お豆腐屋さんの息子》について、何ら特別の想像力を働かせることはなかったにちがいない。

そういうわけで、それからしばらく後にあれほどにも想像をたくましくして私が思いを巡らせることになる青年に閱して、私の記憶に残る最初の映像は、変に親しげに自分の名を呼ぶ初老の女性から素っ気なく顔を背ける男の子、ということになったのだった。

そのとき、私の顔から眼を逸らした奥さんは、部屋中に散らばったりボンをはじめて認めて、大声を上げた。

「あらあら大変、久美子ったら、さんざんにいたずらしてるわ。だめよう久美子、節子さんちをそんなに散らかしちゃあ！もう来ちゃだめって言われたら、どうするの？ 困るでしょ？」

困るのは孫より彼女の祖母のほうではないか、私はそう思っておかし

ったけど、もちろん黙っている。叱られたクーちゃんは、事の成り行きを確かめるためにセッコさんの顔を盗み見たら笑っていたので、安心して後は祖母の言うことを聞き流す。だいいち、やっていいことしかやってないもん。リボンの箱はクーちゃんの自由だということを、本人が誰よりもよく知っている。巻を解かれて長く放たれ、相互に入り交じったりリボンたちをまたちゃんと元の箱に納めるのは、今はまだクーちゃん一人ではちよつと難しいのだけど、セッコさんのお手伝いをすることもある。これはいつてみればクーちゃんの領分なのだった。

「ほんとに、いつもご面倒かけて悪いわねえ。さ久美子、失礼しましよ。遅くなっちゃったし、またおじいちゃんに叱られるから」

奥さんはあつというまにモードを切り換えて、クーちゃんを急かした。私はといえ続きがちよつと気になったのだが——もちろん話に続きがあるとしてだけ——、奥さんは豆腐屋さんの息子の話はもうすっかり念頭にないようすだ。クーちゃんが外出用の靴のボタンを止めるのに手間取っているのもどかしそうに、さっさと手を引いて母屋へ戻ってしまった。

奥さんの講釈がこんぐあいに尻切れトンボなのはいつものこと。そう自分に言いきかせているのを顧みれば、私もしかたなくつき合っているよ

うでいて、じつは奥さんの講釈が嫌いではないらしい。それに、その日は暇だったし、せっかくアイロン掛けも止めようと思ったところだった。せっかく止めようと思ったことをやるなんて、なんだか不甲斐ない気もしたが、手持ちぶさたに小首をかしげながら、私はアイロンをコンセントに差し込んだ。

そのとき奥さんの講釈がいささか飽き足りない思いを私に残したとしても、私は別段その内容が気になっていたわけではなかった。じつさい私には、お豆腐屋さんの息子はどうでもよかった。もともとあのお豆腐屋さんにはあまり納得のいかない店だったのだ。この街のことは、なかなか味わいがある。私はひとり気に入っている。でもあのお豆腐屋はだめ。奥さんのようにとりたてて義理もしがらみもあるわけではないから、私はあの店ではお豆腐を買いもしない。ただ納豆が美味しいので、店先で見つけたときに買うこともある、ただそれだけのことだ。

ただそれだけのことだったのだが、私は奥さんの話の《つづき》をその次の日に自分の眼で確認することになってしまった。

といって、わざわざ豆腐屋の放蕩息子を見に行ったわけではない。

クーちゃんが遊びに来た日曜、つまり母屋の奥さんのおしゃべりを聞いて

た翌日のことだが、久しぶりに早く会社を出た私は、夕陽を浴びた街をのんびり眺めながら歩いていた。通りは幼児づれで買い物をしている主婦たちや塾帰りにふざけている小学生たちで混雑していたが、しかし土地に根づいた人間の気安さをそのままに反映して、人の動きにも街の表情にも、この時刻の住宅街ならではの温もりがある。いつも見ることの少ないそんな賑わいが私にはありがたかった。そう思ってみれば、こんなに早い時間に会社を出ることは、最近では少なくなっていた。

その日の私は、いやその頃の私は、ちよつとスランプだった。

自分でも有能とはいえない社員だったが、六年もいると知らないうちに体に叩き込まれるものがある。自分より若い人も三人、いや六人入って三人辞めていったし、古株とはいえないまでも、年数だけはたしかに中堅だった。山根さんてさあ、いつまでも先輩づらしないとこがおもしろいよね、まだ自分は新入社員だと思ってんじゃないの、そう言ったのは人事課長の沢田さんで、それは機嫌のいいときの台詞だったから、悪い意味ではなかったのだろうが、それと同じことをもつと強く、怒られたこともあった。いつまでも新入りじゃないんだからね！自分のやることはどんどん自分で考えてやるようにしてくれなくちゃ、そうそう面倒みてあげるわけには

いかないのよ！ そう怒鳴ったのは松本さんだ。松本さんは私が入社したときの、何ていうか教育係みたいな役回りで、そのときはほんとに少しも先輩ぶらず、よく引っぱり張るまわしてくれて、私がどうにか一人で動けるようになったのも——といっても他の人の三倍もかかったと笑われたけど——ひとえに松本さんのおかげなのだけど、育って彼女の手元を離れた後になって、ときどき晴天の霹靂の一喝をくれるという変事が始まった。いつまでも新入りじゃないんだから！ と私をどなったときも、私は彼女のアドバイスを求めたわけでも何でもなくて、ただ私が代わりに受けたクライアントの電話のメッセージを伝えようとしたただけだったのだが、ねえ松本さん、と一声言ったらとたんにどなられてしまった。それで、すごくびっくりして、ヘドモドしながら電話のことを言ったのだけど、それでも松本さんは、アラそ、と言うだけで謝りもしない。こんな理不尽なことはないと思っただけ分間のあいだ悔しかったけど、後で考えてみると、どうも松本さんに声をかけるときには私の方の気が弱くなって、つい、入社したてで西も東も分からなくて彼女に頼っていたときと同じ声、同じ言い方になってしまふのではないかと気がついた。それで松本さんのほうでも反射的に、いつまでも新入りじゃないんだから、となってしまうのではないだろうか。

そういういうことはあるにしても、でも松本さんは、少し後では悪かったわねということをお口では言わずに、眼の端をちよつとユーモラスにしかめて冗談を言ったり、役立つ情報をくれたりしてフォローするので、私のほうでもすぐにむっとした心がほぐれてしまう。

そういう気の置けない人がいるというのは、すごくいいことなんだよ、と沢田さんは言ってくれたが、ほんとにその通りだと思う。どなられるのはもちろん好きではないけれど、思わずどなってしまうくらい気持ちのいいラックスできる人間関係が社内にあるというのがいいのだろう。そうでなくは、とても永年顔をつきあわせてはいられない。

小さなことでむかつ腹の立つことがないわけではない。でも居心地の悪い人間関係ではない。そう思ってから、ふと、こんなふうにとどこにでもそれなりに満足して居座ってしまうのが私の発展性のないところだと、反省した。人並みに気の利いた人なら、もう少し高い給料とか、もう少しやりがいのある仕事とか考えて、生活を向上させようとするのかもしれないが、私にはどうもそういう向上心が欠けている。だから、変わり映えのしない場所においても居つづけることになるのだろう。

たとえばこのあいだ辞めたあの子もなんかもそう。入社したての頃はと

でも張り切って、まるで会社をしょって立つような口をきいていた。歓迎会の挨拶で、仕事への情熱は誰にも負けません！なんて甲高い声で宣言したら、みんなが拍手した。ちよつと美人だったし、中年のおじさんたちまでちやほやして、さすがぼんやりの私もあまり良い気分のしないこともあったくらいなのに、それが入社二年足らずで辞めさせていただきます！になった。

たしかに出足は華々しかったけど、でも彼女ちよつと叱られるとすぐムクくれたり、すぐ落ち込んだり、それをこれ見よがしにバラまいた。そうこうするうち、松本さんとチームを組んだのが因果で角突き合うようになった。松本さんも悪い人じゃないけど、思ってることパツパ言うし、どちらにも負けてない。そのあげくが退社。いくら何でも、やめることもないとないの。でも、どうしてやめるの、もうちよつと頑張ればよかったのに、と私が言ったら、フフ気分転換ですよ、と鼻で笑って、山根さんも身の振り方を考えないと、いつまでもこんな会社にいたら発展性がありませんよう、と返してきた。発展性がないと言われるのが最近、こたえる。ほんとのことだからだろう。

ひとところに落ち着いて腰をすえられるっていうのは悪いことじゃない

よ、むしろ得がたい資質だよ、人事課長はそう言って慰めてくれた。私って発展性がないんです、とぼやいた時のことだ。入社しては辞めていく女性が何人かつづいた後のことだったので、はつきり口に出さないまでも、そのことを言っていると察したのだろう。

昔みたいに何が何でも辛抱しなくちゃというご時世じゃない。それは確かだよ、ほんとに合わなかったり辛かったりするのなら、もっと生きやすい、自分に合った場所を選ぶ才覚も必要だろうさ。でもねえ見ると、早々と辞めてった人が、そのあと条件のいいところに就職するかっていうと、まずそんなことないね。耳に入ってくるかぎりでは、次は少し条件が悪くなってる。それならうちにいれば良かったのに、と思うよ。で、やっぱり気に入らなくて辞めちゃうんだよね。そのうち派遣かなんかになって、短期であちこち行って、先はどうなるんだろうと思うことあるよ。別に身を持ち崩して果てはフーゾクってわけでもないんだろうけどねえ、ハハ、それじゃまるでメロドラマだな。ま、人生経験が豊かになるってのも悪いことじゃないかもな。

慰めてくれるつもりの課長のことばが、また私の胸をチクリと刺した。ほんとに、何を言われてもメゲてしまう時期っていうの、たまにある。あ

まりくよくよしない質なはずなのに、いつも長閑な顔していいわねえ山根さんは、なんて皮肉を言われたりもするけれど、でもひとり静かにメゲているのだ。少なくとも、その日、私はメゲていた。

そういえばもう二週間も、杉原さんから電話がない。

そんなことを思って、商店街を歩いていたら、お豆腐屋さんの前に通りかかった。見ると納豆が置いてある。それも六、七個。珍しいじゃないの、まだ納豆が六個もあるなんて。私は物思いを中断して、店先に立ちどまった。

「あの、納豆をください」私は声をかけた。

しかし応答がない。誰もいないのか、と改めて店の中を見回すと、出来上がったお豆腐を入れておく大きな水槽の端に細身の男が立って、じっとこちらを見ていた。

この豆腐屋は見るからに、こゝで作って売ってますという作りで、左手の奥の暗がりが作業場になっていたが、それは戸の陰になっていて、身を乗り出して覗かない限り、よくは見えない。左手は通りに面した一メートル余りが商品の棚で、焼き豆腐やおから、揚げなどが置かれている。そのケースの上板が納豆の場所で、考えてみたら、これまでこの店で私がちゃ

んと見たのはそこだけだった。商品の棚と直角の壁沿いに、大きめの風呂のような水槽があって、豆腐はそのなかで泳いでいる。

水槽の上が窓で、夕陽がたつぷりと差し込んでいた。その夕陽を見上げて、ここに窓があって、その窓が西向きだということに、私ははじめて気がついた。

夕陽のなかに、彼はまっすぐ立っていた。まっすぐ立っている、とそのとき強く思ったのはどういうことだったのだろう。体は水槽のほうに向いて、顔だけが店先に立つ私のほうを向いている。つまり斜に構えたせいで、全身が細く縦長に見えたのかもしれない。よくわからないが、後になって思い返してみても、あの時のまっすぐな印象がとても鮮明で、その他の多くの実際に見た、あるいは想像に描いたイメージを塗り変えてしまうのである。

返事がないのにとまどって、私がもう一度同じことばを言おうとしかけた、それほどの間を置いてから、その人はこちらへ近づいてきた。私に近づいたわけではなくて、納豆の入っている箱に近づいたのだが、なぜか私は後ずさりしたいような衝動を覚えて、それを抑えた。

男は、というよりまだ青年だったが、納豆に手を伸ばした手を止めて、

つと私の顔を見ている。私はまた慌てたが、気がついて言った、

「あ、二つ。いえ三つください」

納豆三つを、ひと手でゆっくり掴むと、彼ははいねいに紙にくるんだ。私は「一ヶ125円」と札に書いてある通り、だがそれを読まなくともよく知っている値段を勘定して、受け取った品物の代わりのお金を渡そうとしかけたが、そこで自分でも思いがけないことが口をついて出た「あの、お豆腐も一つほしいんですけど」

すると青年は、私の眼をひたと見てから、重大なことを告げるように言ったのだった、「豆腐は終わりました」

磨かれた低い声だった。響きの余韻があたりの空気についてまでも残るような音だった。私はそれまで人の声の質についてはあまり深く考えたことがない。もちろん好きな声、嫌いな声というのはある。少し前に辞めた女の子の声は鼻にかかる高音がびんびん響いて、ほんとはすごく嫌いだった。母屋の奥さんのは、ときどき話の中味にうんざりするけれども、声は湿り気があって、いろんな音が混じり合い溶け合った感じが悪くない。クーちゃんのまだ声になり切れていないような柔らかい声。そして杉原さんの照りのない和紙のような静かな声。杉原さんのどこがいいのか何度か自

分に訊ねてみたとき、いつも彼の声が耳の背後に立ちのぼった。何を言っているかではなく、あの声につつまれていることが、私には快い。それを誰にも言ったことはないけれど。

そういう好き嫌いはあるにしても、原則として声の良し悪しを言う気は私にはない。けれどもそれはとても印象的な声だった。たとえば、硬い木材で作られた木刀がさんざん遣い込まれて光を発しているような声だった。といっても私には、木刀について語る資格は声そのもの以上にならないのだけだ。

店を出たら、肌寒くて胴ぶるいした。思わず剥き出しの腕を手の平の余白でこすりながら、お豆腐屋さんで冷えてるんだ、と思ったが、肌に乗る生じたのは冷気のせいばかりとも言えないような気がした。

そのときになって改めて、私は母屋の奥さんから聞いていたことを思い出したのだった。最近になっておいしくなったと聞いたので、お豆腐屋さんに寄ったのではなかった。いつもとちがって、たくさん売れ残っていた納豆に、ほとんど条件反射のように惹かれたただだった。考えてみれば、納豆がいつもにも似ず売れ残っているということ自体、商売の仕方を変えた徴しであったかもしれない。そして、あの作りの拙さからすれば、いつ

もはそんなに売れないはずの豆腐が、早々と終わってしまったという。

私は心の中で、脳裡に残っている声をもう一度再生してみた。

「豆腐は終わりました」

そして、声の強度に比べて言っている内容があまりに即物的で素っ気ないのに、つい苦笑いした。もし運良く豆腐が売れ残っていたら、あの青年は何と言っただろうか。おそらく何も言わずに、注文どりの豆腐を器にいて、そのまま最後まで黙っていただろう。かくして、母屋の奥さんが言ったように、「何か言ってもよさそなものでしょうが！　ハア、のひとつやふたつ！」に立ち至ったわけだ。

私はもう一度、苦笑いした。

仕事はスランプだったが、それと反比例するように、杉原さんとのつきあいは安定していた。

もともと冗談のように始まったつき合いだったが、その冗談を暗黙のルールにしたのがよかったらしい。まじめなラブ・アフェアになるはずがないと決めてかかっているから、私にとっては失望が少なかった。向こうもその約定に対して常に繊細なアンテナを利かせていて、わずかでも歯

車が狂いそうになると、上手に距離と時間を置く。その間合いが見事で、年齢の開きがあるということの良さはこうしたものかと私はひとりで感心したものだ。何かというと「人生経験だよ」と、冗談とも本気ともつかない表情で話をそらすので、いつのまにかそんな気になってしまったのかもしれないけれど。

ふたりの距離に関するこういうデリカシーの質感だけは、私と杉原さんは絶妙に相性がいい。杉原さんが私からずっと身を引く瞬間が、私はとても好きだった。だから私も決して踏み込まないようにしている。そういうところが、ふつう小説やテレビドラマに登場する恋人とは、まったく違うような気がする。

人生経験ではなくて、「おじさんだから」というバージョンもある。そのときは声の隅に笑いがあって、私はまるで十代の小娘のような気分になる。そうやって注意を逸らしておいて、ウェストに手を回したり、後首をくすぐるように唇が触れてきたりするのだ。私の心と体は不意を突かれてびっくりしながら、螺旋階段をゆっくり降りるように快楽の準備をする。

たとえば私たちのセックスは、愛が高まった先の到達点ではなかった。ふだんから私たちは恋人ではなかったのだから。いつも何かしら不意の落

とし穴だった。あるいは、突然開く窓だった。開かないこともあるし、開かなくて当たり前窓なのだった。だから開いた時の驚きと感動があった。もし私たちが型どおりの恋人だったら、それに会うことは困難だったかもしれない。

もちろん、つきあううちには、食べ物の好き嫌いとか室内装飾の好みなんかで、よく似たところがあるのも段々にわかってきた。つきあう必然性はないような仲なのに、ここまで長つづきしたのは理由のないことではないと思うこともある。

それまでの私たちは、たえて言えば川の向こう側とこちら側だった。細い川だけれども、あいだに水の流れがある。その流れを挟んで、私たちは歩いてゐるのだった。手を伸ばせば届きそうな気もするし、じっさいそうやって手をつないで行く瞬間もあるのだけど、それはごく短い時間のことで、すぐにまた離ればなれの平行線になる。

ふつうの恋人だったら、それは何だかとても淋しいことのようにだけれど、でも、そんなふうにそれぞれの場所がお互いにとってむこう側とこちら側に別れていることが、良さでもあったのだと思う。少なくとも私にとってはそうだったし、杉原さんにとってはもっとそうだったに違いない。

だって彼は家庭持ちだったし、世に言う不倫とか浮気などといった悶着などは誰より不愉快に感じそうな人だったから。

それが少し感じが変わってきたのだ。

そのことにはじめて気がついたのは、現代絵画の美術館の中庭に面したラウンジでカプチーノを呑んでいた時だった。

「美術館のカフェって、おぎなりのまずいコーヒーを出すところが多いでしょ。でも、そのカプチーノはすごくおいしいんだ。こんど行こうよ」そう言っ、杉原さんが連れてきてくれた美術館だった。展覧会をしているわけでもなく、見るものといっても点数の少ない常設展だけなので、人はほとんどいない。私たちが入ったときに若い男性が一人いただけで、その人も数分後には出ていった。

「こんなに閑散としたところで、おいしいコーヒーなんか淹れても張り合えないよね」

注文したカプチーノを待ちながら杉原さんは笑って言ったが、私はそうでもないのではないかと、内心思っていた。コーヒーというのは、すごくプロフェッショナルに大量に淹れるか、さまなければ少人数分をひっそりと精魂込めて淹れるか、どっちかしおおいしくない気がする。そう思って

から、あ、これはいつか杉原さんが言ったことだと気がついた。そう言っただけの本人が、いまは反対のことを言っているのだけれど、それは彼にとって、どっちもほんとうで、つまり同じことなのだ。

張り合いのないほど少ない客である私たちのために、ていねいに淹れたらしいカプチーノは、たしかに期待を裏切らず香り高かったし、というか、そもそも私はふだんカプチーノを選んで呑む習慣がないので、その日曜の午後はたった一杯のカプチーノから昇るシナモンの香りに満たされて、特別な時間になった。

そのとき、私は会社の話をしていた。

私はこれといってめざましい話題を持っているわけでもないし、むこうもそれを期待しているとは思えないので、つい会社のことやクレープの話をしてしまうのだが、杉原さんはいつもそれを淡々と聞き流す。たいして興味深い内容ではなくても、自分と関わりのない話を聞くことが、彼にとってもかえって開放感があつていいのかもしれない。私は勝手にそう解釈していた。立ち入って質問したりすることもない。話している私をぼんやり見て、当たり障りのない相づちを打つ。それが私にとっても、そういういい加減な聞き方は快かった。

「そしたら松本さんがね、そのひよつとこの社長さんのことを男前よねーって言ったの。で、みんな、えーっ男前え？　って笑ったわけ。だって男前なんて、おかしくない？　わたし、そんな言葉、本で読んだことあるけど、じつさいに聞いたのはじめてだった」

「そうかね、ああ、そうかもしれないね」

「で、おかしいって言ったら、埼玉の実家のおばあちゃんが、そう言ってたんですって。でもそれにしただって変だわ。だってひよつとこの社長さんで、もう髪がバーコードなのよ。男前って、かっこいいってことでしょ？」

「うん、まあ、そうだろうね」

「ひよつとこの人たちだって、それを聞いたら大笑いよ、きつと」

「ひよつとこって何なの？」

杉原さんが唐突に訊ねた。私はびっくりした。そのときになって、杉原さんがそんなにまじめに聞いているとも思わず、すぐ自分勝手な話し方をしていることに気がついた。杉原さんが気分を害したのかと、顔を見たけれど、そうでもなさそうだった。

「だから、ひよつとこ本舗っていうお菓子の製造元」

「その仕事をしてるの？」

「そう」

「いつから？」

「二ヶ月前、ううん、もう三か月になるかな」

「そのの、どんな仕事？」

「創業四十周年の記念誌」

杉原さんが妙にこだわっているふうなのが、私には解せなかったけれども、詳しく知りたいのかと、説明を加えた「下谷の古い和菓子店で、と言っても、チョコレートとかクッキーとか、あれこれ仕入れてきて売ってるふつうの町のお菓子屋さんんだけど、一つだけ自分のところで製造してて、それがひよつとこつていうお煎餅なの。瓦煎餅みたいでほんのり牛乳の香りがして、表面にひよつとこの絵が焼き付けてあるの。ちよつと趣向があって、手頃でおいしいと、ご近所の皆さんに愛されて四十年」

仕事で手がけている最中の事柄なので、考えなくても口をついて出てくる。その口調がバーコードの社長そっくりで、自分でもフツと笑ってしまふ。それと同時に、なんてつまらない話をしているんだろうと、自分自分にあきれてしまふ。そう言えば私は、杉原さんは変に高尚で深刻な話題

で論じ合うよりも、私がつまらないおしゃべりをしているのを淡々と聞いているほうがいいのではないかと、思いこんでいたようだ。

杉原さんはしかし、私の口上は聞き流したまま、

「その話、今までしたことなかったね」

静かに追求してくる。その声に、かすかに批難がましい響きがあった。

「そうだった？ でも別に大きな仕事でもないし…」

話したか話さないか、自分でもよく覚えていないことなので、私は不明瞭な答え方をした。でもそれが正直なところだった。わがホープ出版は少人数の陣容で細かい仕事を同時にいくつもこなすから、ひとりの人間があつちにもこつちにも関わることになる。それが気散じになっていいところでもあるし、大きな仕事に集中できないつまらなさだとも言えるのだ。そんなことも心の中で考えながら、私は杉原さんの顔を見ていた。

杉原さんは黙っていた。黙って私の顔を見ていた。ふたりでお互いの顔を見つめ合ったまま、じっとしていた。こんなふうに見つめ合うのは、はじめてのことだった。

私には彼が何を考えているのか、わからなかった。杉原さんも、まるで私のことをはじめて見るように、そして見ても誰だかわからないように、

じっと見ている。その奇妙な緊張が、ちょっと辛かった。心に痛い、という感じだった。

しばらく沈黙の時を送ったあとで、

「君のこと、なんでも知ってるような気がしてた…」

杉原さんは小さな声で言って、もっと小さく吐息をついた。

それから、テーブル越しにゆっくりと手を伸ばして、私の手を取った。私はそのとき左手で頬杖をついていたので、その手を取られて支えを失った上体が傾いた。

杉原さんは、私の手をわずかに自分のほうへ引き寄せると、今度はそれをじっと眺めた。まるで始めて見るもののように、じっと眺めているのだけれど、でも手を眺めながら、何か他のことを考えているみたいでもあった。

私もまた、自分の手を眺めていた。杉原さんの手の中にある私の手は、自分で思っていたよりもずっと小さくて、白々と光って見えた。かわいらしい手だと、私は他人事のように思った。

そのまま、どれほどの時間が経ったのだろう。

午後の日射しが天空の頂点を越えて、ほんの少し傾いたところで安らい

でいた。

その日の残りの時間を、私たちはふしぎな気分で過ごした。

私はまたいつものように、つまらない日常の話題に戻ったし、杉原さんもそれに相づちを打ちながら淡々と聞き流す、そういう意味ではいつもと変わらなかったが、その裏に何かこれまで存在しなかったものがあることを、私は感じていた。しかし、それを楽しいと言すべきなのか、気詰まりだと言すべきなのか、そこがちよつとわからないのだった。

それはたとえば、こういうことだったかもしれない。川を挟んで向こう側とこちら側を歩いていた二人が、とつぜん小さな橋の真ん中に立ったというような。

あるいはまた、向こう側という領域がいつのまにか少しずつ広がってきていて、気がつくときすでにそこまで迫っていた、いや、目の前まで迫っていた世界が、気がつくときこちらの世界と重なっていた、というような。

それはまるで、音のない浸水のようなだった。ひたひたと足元を浸している水は、懐かしいようでもあったけれど、怖くもあった。

日が暮れてきた。夕食のことを考える時間だった。美術館からの帰り道、

行く手に駅が見えてきたとき、杉原さんは私を見ずに訊ねた。

「どうしようか？」

柔らかくて、深い声だった。このままもう少しいっしょにいて、食事をし、愛し合う。その同意を、彼は私に求めているのだと、私は感じていた。私の気持ちは揺れていた。珍しいことだった。いつもなら、彼がそう言えば自然に気持がなびく。そんなふうに自然になれるところが好きだった。

でも、その時はそうではなかった。いやなのかと言えばむしろ逆で、私はその時、心が彼にとっても傾いていた。その時ほど傾いていたことはなかったくらいだった。その傾いた心を抱きとめてもらいたいと望んでいた。

抱きとめてもらいたいのには、体ではなく心だった。体はいつも、そんな心に従っていった。体を心の前に出さないのが、私のやり方だった。出さないのではなくて、出せないのかもしれないけれど。そして杉原さんは、そういう私の気持ちをさかなでしたりせず、自然に引っ張ってくれた。そう、自然に、少しも無理をせず、というか、無理を見せず。

そのとき私の心は、とても杉原さんに傾いていた。そしてなぜだか、それがとても辛かった。

「どうしようか」と聞かれて、私は内心、迷いの小さなじつんだを踏ん

だ。そんなことは初めてだった。自分を投げ出したいという気持ちと、それをいやだと思う気持ち。

「今日は、仕事が残ってて、うちでやらなきゃいけないことがあるんだけど……」

気がつくと言っていた。うそだった。やらなきゃいけない仕事なんて、ない。でも、そう言ってしまった。言ってから、ちよっと後悔した。

「そう」杉原さんは言った。「それじゃ、帰ってやらなくちゃね」おにいさんのような口調だった。私はこくりとうなづいた。

いつものように渋谷から明大前までいっしょに来て、いっしょに電車を降りる。乗りがえる私といっしょに井の頭線のホームの階段を登り、京王線のホームへの階段の少し手前で立ち止まり、杉原さんはそこから引き返して、また井の頭線を先へ行くのだった。なぜか、最初にふたりで会ったときから、それが決まった筋道だった。

その日は、まだ日が完全に暮れる前の、空に透明な紺青が残っている頃合いで、休日のレジャー帰りの家族連れで明大前の駅の構内はかなり混雑していた。その人混みにもまれながら、杉原さんは「じゃ、しっかり」と、脇をすり抜ける人のために体をねじり、顔だけ私のほうに向けて言った。

私は一瞬、何がすっかりなのだろうと訝しく思い、ああ、これから家に帰ってするはずの仕事だったと思い当たった。

家に帰った私は、とつぜん空いた夜の残りの時間をもてあました。仕事なんてもととなかった。ほんとうは、その夜を杉原さんと過ごすつもりで家を出たのだったから。

それなのに、何故あんなことを言ってしまったのだろう、私は考えこんだ。私の心は揺れていた。ほんとうは、いつもよりもっと、杉原さんといっしょにいたかったのかもしれない。いっしょにいたいと思う私の気持ちには、でもほんの少しだけど、何かしらそれまで経験したことのない混濁したものがあって、それに不快感を覚えたのも確かだった。杉原さんに対する不快感ではなく、それは自分に対する不快感だった。

自分の心の揺れを抱え込んで、私はじっとしていた。内なる地震を堪えるように、それをやり過ぎるように、私は身じろぎもしないで時間を過ごした。そうするうちに、心の揺れはしだいに鎮まり、私はいつもの平静を取り戻していった。

自分の心が穏やかになって、私はようやく杉原さんのことを考えることができるようになった。

私が早く帰ると言ったことで、彼は気分を損なったのではないだろうか。私に彼といっしょにいたいという思いがあったように、彼にも同じ思いがあったのかもしれない。もしかしたら、私よりも強く。だとしたら、それを阻んだ私は、彼を傷つけたことになる。

あるいは、私が心の揺れをひとりで鎮めたいと願ったように、彼もひとりになることを望んでいたのかもしれない。それなら、早く別れたのは彼にとってもよかったのだ。

私は、その日いちにち杉原さんが言ったことを思い浮かべた。聞いたときは何気なく聞き逃してしまった言葉の、うらの気持ちはどうだったのか、手探りで確かめるように、思い返した。でも、それらの言葉はどれも、特別の意味があるようにも思えたり、また何の意味もないようにも思われて、結局のところ私には何も告げてはくれなかった。

杉原さんは私のすぐ近くに存在するようであり、やはり掴むことのできない、とても遠い人なのだと、私は思った。

「君のこと、なんでも知ってるような気がしてた……」

私の脳裡に、杉原さんの声がまた響いた。そして私は、杉原さんが私のことを「君」と呼んだのが初めてだったことに、気がついた。彼は私のこ

とを固有名詞や代名詞で呼ぶことがない。ふつうは何とも呼ばずに、主語ぬき、目的語ぬきですませているし、どうしても必要なときは、「山根さん」と呼んでいた。そして私は、私に呼びかけずに黙って抱きしめてくる彼の腕や、ちよつと気後れしたように言うその「山根さん」が、とても気に入っていたのだ。

「君のこと、なんでも知ってるような気がしてた…」

そういうふうに言われたことが、いやだったわけではなかった。私のことをなんでも知っているという言い方には、私をまるごと抱きしめるのにも似た、ふしぎな温もりがあった。温もり以上のものがあった。でも、知っているつもりでいた…、ということは、ほんとうは知らないということ。杉原さんも、私と同じように、近くにいるくせに掴むことのできない相手だと感じていたのだろうか。

近くにいながら掴むことができずに、少し距離をおいて立っているのだ、私たちふたりは。杉原さんと山根さんが、離ればなれに立っていて、ときどき近づいて、抱き合って、でもお互いの領域を重ね合わせずにいる。それでいいのだと思った。それがいいのだ。そう思い定めたら、心の揺れは収まった。そして杉原さんもきつと同じように感じているにちがいないと

いう気がしてきた。やはりあの時、そのまま別れたのが正解だったと。

そのあとしばらく杉原さんから電話がなかった。

どうしたのかなと思ひ始めた翌日くらいに、電話があった。約束したのはウィークデイの夕方だったので、食事をして、それからホテルに行った。その日、杉原さんは特に私の気持ちを確かめるようなことは言わなかったけど、私の気持ちはすんなり彼のほうに、彼の体に、傾いていた。たいてい、いつもそうであるように。

杉原さんに抱かれるのが私はほんとうに好きだ、とその日は思った。ぜんぜん情熱的ではなく、当たり前のことのように、でも自分勝手にでもなく、私の心と体から余分なものを取り除いていく。さりげなく彼の手が私の胸に触り、気がつく私の秘部に忍び込んでいて、私はそれを許して少しずつ体を開いていく。いつのまにか、私も彼がするのとおなじようなことを彼の体にしていて、気がつく、裸の私たちはひとつになって、渦につつまこまれている…。

ときどき、声を上げてしまう。細い声だったり、しゃがれていたり、その自分のものとも思えない意外な声が、自分でもきらいではない。彼はフツと、言葉ではない声で応じる。私が自分の上げる声をきらいではない

ように、彼もそれがいやではないようだった。それでも、まるで遠くの方から眺めているように、まるで他人を見るように、私を見下ろしている。そのまじめな、冷たくさえ思える彼の眼が好きだった。そんな眼でみつめられると、どうしていいかわからない、どうしていいかわからない、そう思いながら、私はキリ揉みをするように、渦に吞まれるように、快樂の中に埋もれていく。

愛し合っているとき、私たちはおたがいから一番遠くにいるようだった。その遠くにいる杉原さんが、もしかしたら私は一番気に入っていたのかもしれない。

昂まりがしずまって、もといた場所に戻ってくると、私たちはまたいつもの優しさを取り戻す。私たちは体を少し離して、並んで天井を見上げている。隣りにいるのは、もうセックスをするパートナーではなく親しい友人、いやそれよりも少し他人行儀で年の開いた杉原さんだ。

ふたり並んで天井を見ているそう長くない時間に、私たちは一心同体の他人から、親しい知人の関係にまで、遙かなトリップをするのだった。それはじつのところ、かなりスリリングなことでもあった。それでも着実に、そう、宇宙飛行士のように着実に、遊泳から着陸へと心进行操作する必要の

あることでもあった。なぜなら、もし着陸に失敗したら、私たちは二度とこの地上での次の歩みに踏み出せないかもしれないからだ。

また杉原さんと山根さんの明日を確実にするために、私たちは細心でなくてはならなかった。少なくとも、私はそう感じていた。そして杉原さんともちろん、そう感じていたはずだ。

「起きようか」

頃合いを見て、杉原さんが声をかける。その前に、横を向いて私の髪をなで、声をひそめて言うこともある、「起きる？」と。

そして私たちは、探検から帰る子どもたちのように、場違いな晴れやかさでホテルを後にするのだ。

セックスは始まりよりも終わりがだいいじ。それもたぶん、いつのまにか杉原さんに教わったこと。

小さな山を越えて、また私たちは日常を取り戻していた。山はある意味で危機でもあったけれど、考え方では好機でもあった。私たちは、いや私はこうして、人生を変えるところというチャンスを逸したのだったかもしれない。そのことは自分でもわかっていた。私は発展性がないのだと。

まったく人はいろいろだよ、と人事部長の沢田さんは言う。

沢田さんは会計課長だと思っていたら、ある日、じつは人事部長なのだと知って、びっくりした。私が入社したときに、会計はあの人よ、と松本さんに言われて、その頃その人は課長課長とみんなに言われていたもので、てっきり会計課長なのだと思っていたら、会計もするけど人事もする、要するにみんなの月給とか保健とか、その手のことをまるごと引き受けている人で、正式には人事課長だったのだそう。

それから数年たって、課長が部長になった。すごく偉くなったみたいだけど、その昇進の前と後でぜんぜん仕事が変わらないし、私たちとしても態度を変えるのも変で、結局会計課長だろうが人事部長だろうが、どうでもいいという感じだ。

部長になって、何か変わったことがあるのかしら、せめて本人にとって、と松本さんに訊ねたら、さあね、月給くらいは上がったんじゃないの、少しくらいはね。でも会計一手にやってるんだから、自分で自分の月給を上げるみたいで、なんか変よね、と松本さんは言った。みんなの中にはよく冗談で沢田さんに、ねえ、月給上げてくださいよう、なんて言う人がいる（私は言わない）けど、だからって別に彼から月給をもらっているとい

う意識もない。沢田さんがしているのは、給与明細という紙切れに細かく何か書き込む仕事のようで、私はその紙をあまり詳しく読んだことがないものだから、社内での沢田さんの立場を今ひとつ実感できないでいる。それよりは、ときどき私を怒鳴り散らす松本女史の存在感のほうがはるかに大きい。

沢田さんの仕事については、私はいまだに理解しきれてないけれど、沢田さんその人の存在は、私にとってはありがたかった。あまり接触はないのだけれど、沢田さんがいてくれるおかげで、空気が中和されるような気がするところがある。口うるさくない父親のような、いやそれでは沢田さんに気の毒だとしたら、叔父か、年の離れた兄と言ったらいいかもしれない。

そういえば、杉原さんと沢田さんは大学が同期だった。でも私はそのことを考えたことがない。私自身の感覚では、杉原さんは私と同世代の年長で、沢田さんは父の世代の年少なのだった。

「四十代半ばっていうのは、微妙な年齢なんだよなあ」と沢田さんがいつかぼやいていたことがある。「いつそ五十になっちゃったら覚悟みたいなものができるんだろうけどなあ」と。それを聞いて誰かが「何の覚悟です

か」と聞いた。「何の覚悟だろうなあ。さあ、オレにも分からん。諦めかもしれない」

杉原さんだったら、ぜったいにこういうことは言わない。思っても言わない。言うほうがいいのか、言わないほうがいいのか、それは私にもわからない。

その沢田さんが言う「まったく人はいろいろだよ」。

彼がこういう言い方をするときには、ぜったいに自分のことを話そうとしているのではない。一般論として人間について論ずるのだ。こういうときだけ、さすが人事部長。

「意欲先行型でやみくも発展を求める人間は、たいていどこかで大きなマイナスも引き受ける。賭といっしょだね。もつともオレ、賭はせんけど。大きく儲けると大きく損する。上がり下がりが大きい。地道にその日その日をやって人間は、パツとしないけど転びもしない。人間には走るタイプと歩くタイプと二種類いるんかなあ」

私は完全に歩くタイプだ。自分でもそう思うから、なんか相づちも打ちにくい。

「そうですかあ。アタシなんか、どっちなんだろう」

今日はつき合いのいい松本さんが、でも本気で訊ねている。

「そうねえ。走りたいのに結果的に歩いてるタイプじゃないの」

「あ、そういうのもありなんですかあ。なんかずるいの」

「ずるいことあるかよ。だって、そうだろ。それとも、どこかでしっかり走ってるか」

松本さんがほんとには小説を書きたいのだということは、みんな知っている。松本さんは、私が入社してまだまもない頃に、小説書きたいの、その修業してるからこんな会社で我慢してるのよ自由が利くから、と私に言ってる、でも他の人には言わないでね、知れるとうるさいから、とつけ加えた。私は律儀に彼女の秘かな野望のことは誰にも言わずにのだが、あるとき、会社中の人が知っていることがわかって、ちよつと拍子抜けした。そういうええ、あんなに開けっぴろげで、腹が立ったらすぐ顔に出してしまう人が、思っていることを口に出さずにいられるわけがない。

走っているか、という沢田さんの質問には、そういう意味も含まれているので、松本さんはちよつと鼻白んだ顔をする。

「現在、準備運動中です」

「がんばれよう。期待しないで待ってるからさ」

沢田さんは、のんびりフォローする。ほんとうに期待していないのだなあ、と近くで聞いている私にも伝わってくるような言い方で、私は瞬間、松本さんが気の毒になったくらいだが、でも沢田さんは心の中では応援はしているのである。沢田さんだけでなく、ホープ出版で働いている全員が、松本さんを応援している。そのくせぜんぜん期待していない。この応援してるけど期待してないという気持ち。期待されてないけど応援されてる感じる気持ち。この二つの気持ちの応酬には、何か家族的とでも言いたいうな、生温かいもたれ合いがあって、それが松本さんと会社を結びつけているのだと思う。

ほんとに松本さんのような人は、今日明日にでも会社を辞めてふしぎではないところがあって、そうなくても十分どこかで生きていけるような強さも持っているのに、このホープ出版に私より更に八年、都合十三年も勤務しているというのは、この奇妙なもたれ合いのせいに違いなかった。

自分と周囲のあいだに、何か固有のもたれ合いを作り出す才覚というものがあるんだろうなあ、と私はしみじみ思う。

じゃあ私はどうなのだろう。分らないけど、私自身はそれがひどく下手なような気がする。私は、誰に対しても、自分を強く印象づけることが

できない。営業しなくてはいけない時、たとえばまだ契約が取れていな仕事なんかで、自分というより会社のために、しっかり売り込まなくてはいけない時にも、私はつつい引いてしまっって、後で反省することがしばしばだ。

そういう点、松本さんは上手なのである。よろしくお願いしまーす、と言いながら、いつの間にか自分をアピールしていたりする。相手の方でもその部分に親しみを感じて、仕事の話がますます進んだりするのだから、それはほんとに感心してしまう。そんなだから、わがままいっぱいになっているように見えて、会社の中にちゃんと自分の場というものを確保している。その場所でからかわれたり、かと思えばいばって見せたり、している。

そんな松本さんに言わせると、私は「控え目も程度問題。あんたのは遠慮が過ぎて傲慢なのよ。さもなきや怠惰ね」となるのだけれど、そう言われると、まんざら当たってないこともないような気がするから空恐ろしい。私は傲慢なのだろうか。そうは思わない。それよりは怠惰のほうに当たっている。こまめに部屋の掃除をすとか、納豆みたいな貯蔵品を切らさないように気をつけるとか、ちゃんと手作りのお弁当を持ってい

か、そういう面では怠け者ではないのだけど、でもやはり、怠惰と言われると納得してしまう自分がいる。

さすがに気になって、杉原さんに聞いてみた。私は傲慢なのかしら？

「傲慢？ いやそんなことはないでしょ。それよりは何というか…、むしろ臆病とか、怠慢とか」

杉原さんは、私の顔をうかがいながら、おもしろそうに言葉を探している。

「そうねえ。優柔不断とか、気弱、意志薄弱…、ああ、怯懦っていうものもあるな」

自分だって、松本さんが苛々するのもしかたないと思うこと、たしかにある。手も足も出ないっていう気分で固まっちゃうことがあるけれど、それにしたって、杉原さんはちよつと言い過ぎ。同義語を訊ねているわけじゃないのよ。そう思って、横を向く。

「あ、怒ってる、怒ってる。でもね、傲慢だとは思わないけど、非情って感じはあるな、コクハクっていうか…」

「コクハク？」

耳にした瞬間、意味が捉えられなくて、音を繰り返した。それからやつ

と分かった。

「酷薄…」

「うん、とくに男から見るとね。そう言われたことない？」

ない、ない。ぜったいにない。そう言おうとして、突然、思い出した。

慎也が私のことを「取り付く島がない」と言った。あれはいつだっただろう？ ああ、思い出せない…。

「アブローチしても、サラツとかわされてしまいそうっていうか、無視されて終わりそうな感じがする。いや、したんだな、正確には」

「でも、無視しなかったじゃないの」

ちよつとこだわって、私は小声で言った。

「それはボクが上手だったから」

「…」

杉原さんの声が柔らかくなった。手が私のウェストに絡んで、私を抱き寄せる。唇が首筋をなでるのを感じながら、おぼろな感覚でベッドに身を横たえる。私にはもう彼の手の肌触りとシーツの肌触りの区別がつかない…。

私は杉原さんときき合い始めた時のことを考える。どうしてそのように

なったのか、それはほんとうに波風の立たない自然な成り行きだった。車の中に座ったまま気がついたら大型フェリーに乗船していたとか、車椅子に乗ったまま電車に乗ったとか。なにより、その波風立たない成り行きが好もしかった。ちょうど今の、この時のように。大きな決断もなかったけれど、でも後悔することもなかった。そういう私のことを、彼は酷薄と言っているのだろうか。

ともあれ杉原さんが私のことで多少なりとも突っ込んだもの言いをするのは珍しいことだった。ちよつとこそばゆい感じだったが、さして悪い気分でもなかった。ただ、それ以上に踏み込むのは避けたほうがいいようだと思った。人間は親しくなるほどに、ついつい相手の領分に立ち入ってしまう。自分と相手の世界を隔てている薄い皮膚。薄いけれどほんとうは体液を包んで決して破れない包皮のようにしっかりとっている皮膚を破ろうと、秘めやかな暴力を用いることがある。それが愛情というものだと思いきんでいる人が多いような気がする。愛情とまで言わなくても、友情とか、ただの親しみの場面でも、少し開けたドアの隙間に足の先を差し入れて閉じさせまい、できたらもう少し広げさせようと、しつこい押し売りのようにがんばるのは、どういうわけなのだろう。

杉原さんは、けっしてそういうことをしない人だった。少なくとも、私に対してはけっして。だから私と杉原さんは、波風立つことのない平穏な日々を送ってきたのだった。

私は想像してみることがある。今の、現実の杉原さんと私は、こういう節度のある間柄を変えることはない。だから、仮にも杉原さんが奥さんと別れて私と再婚するなどという事態になる気づかいはないのだけれど、もしこれが昔の話で、さもなくば遠い国の話で、私と杉原さんが避けがたい社会の定め、たとえば階級のシガラミとか、部族の決まりとかいったもので結ばれたのであったとしたら、私たちはたぶん絶対に別れないで、争いもなく、平和に一生を添い遂げたにちがいない。そういう私たちを見て、人はお似合いの夫婦だと言ったにちがいない。年の差なんか、少しも問題ではなかった。

杉原さんとそういう時代、そんな国に生まれて出会わなかったことを、私が残念に思っているかと言えば、それもまたそうではない。私は、私と杉原さんのつき合いについて、誰にも話したことはなかったけれども、たとえ話したとしても、高校や大学の友人たちは私の気持ちを分かってくれなかっただろう。私が愛情なしに年上の男性とつき合っているか、さもな

遠い祭

ければほんとうは結婚したいのに、できないからやせがまんを言っているのだと反論するに決まっている。でも私に言わせれば、あの人たちこそ、一人の男を男として、あるいは人間として見てはいないのだ。就職するのに体裁のいい会社とか、着て歩くのに見栄えする洋服のようにしか考えてはいない。そういう相手と一っしょにいる彼女たちは、杉原さんといっしょにいる私より、彼と会わずに一人で過ごす私より、ずっと孤絶しているのではないかと、私は思った。

人に話してもわかってもらえないような間柄だけど、杉原さんと私はこの先ずっとこんなふうにつき合っていくのだろう、私はいつかそう考えるようになっていた。

これまで六年間も（そう、気がつけばつき合いだしてもう六年にもなっていた！）こうして波乱もなくきたのだから、これからも穏やかにつづいていくのだろう。そう思うことには、確かな安らぎがあった。けれどもまたそこには奇妙な閉塞感もないではなかった。

あまり波風を立てずに、じっとその場にいる。与えられたものを感謝して受け止める。私はそういうのが好きなのだ。もしかしたら、それだけしか能がないのかもしれない。もしそれを能と言えるなら、だけど。そして

それを許してくれるから、私はホープ出版という会社が入っていた。そういう私はホープ出版から見ると酷薄なのだろうか。そんなことを、ふと思ったりもする。

いつのまにか、たおやかな新芽たちはすっかり養分を吸収して本葉に育っていた。光る緑が木々を覆いつくして燃え立ち、きれいだが、ちよつと鬱陶しくもあった。

第四章

別れは唐突にやってきた。

もう壊れることはないと言を落ち着けた時が、いわば安定の極まり。その極まりそのものが亀裂を引き起こしたかのようだった。

間歇的に五月雨の降る土曜日の午後、杉原さんと逢った。場所はホテルの部屋だったが、私たちの交わりはまるで夫婦のようだ、と私は思った。平和を裏打ちする微かな退屈、信頼を縁どりする理由のない不満。明暗が入り交じって結局はどっちつかずの中間色に収まるといった感じが、私の想像する夫婦の関係に近かった。

杉原さんはその日、いつもにも増して口数が少なかった。けれども、私

をないがしろにしているというわけでもなく、無言の紗幕越しにじっと私を見ているようでもあった。そうしたことはその頃、「君のことをすべて知っているつもりになっていた」と呟いて思いに沈んだ日あたりから、時々あることだったので、私はつとめて気にしないようにしていた。杉原さんのそういう態度は、私には少し思わせぶりの気もして、ほんとうはあまり好きではなかったのかもしれない。とはいえ思わせぶりの態度を取らないということにかけては、杉原さんほど嫌みのない男性も少なかった。

部屋はシンプルで洗練されていた。中年の夫婦たちも気分をリフレッシュするためにこういう部屋を利用したらいいのではないかと私はまわりを見回しながら考えていた。

シャワーを浴びた杉原さんは、ソファで缶ビールを飲んでいる。ワイシャツとプレスの利いたズボンを着ているのに、足はまだ裸足だ。その剥き出しの高い甲を見ながら、こんなに透き通るような白い肌だったかしら、と私は改めて見入っていた。そばにいないときでも眼をつぶればひたと肌身に感じるほどに、杉原さんの体は身近だったはずなのに、その白い足の甲は初めて見るもののように、私とは完全に切り離されて、それ自体で完結して存在していた。

ベッドに腰を下ろした私に、杉原さんが眼を上げ、言った「転勤になった」。言った後すぐ、また目を伏せた。そして私は、私たちのつき合いが終わったことを瞬時に知った。窓の外の新緑の林を、サーッと音を立てて風が通り抜けた。

何も言わないでいる私に、杉原さんはぼつりぼつりと言葉をつないでいく。

「もともと研究所の勤務自体がある意味では出向のようなものだったんだ。だから、そんなに長いことあのポストに止まるだろうとは思っていなかった。むしろ予想より長かったなという感じなんだ。他人任せのようで無責任な言い方けどね」

杉原さんは、ちよつと恥ずかしそうな顔でうつすらと笑った。彼が自分の仕事やポストの話をするのは初めてだった。それを聞きながら私は、自分が彼のことをほとんど何も知らずにきたことに、改めて深く感じ入っていた。もちろん、すべてを知っているなどとは毛頭思っていなかったけれど、それにしても知らなすぎた。もっと知るべきだったのだろうか。そうとも言い切れない。何も知らないままでいられたことは、むしろ私たちの間柄の貴重な一面だったのだ。そうとしか思えなかった。

「研究所ができたときに、なんていうか…、まあ官庁からの監督みたいな立場で送り込まれたわけね。それが運営もそこそ軌道に乗ったし、当初の目的だった調査も一応の目的がついたというわけで、このへんで完全に民間に譲り渡すことにしたというわけだ」

話している杉原さんの声がだんだん落ち着いてくることだけに、私は注意を凝らしていた。この期に及んで、変に感情的な言い方などしてほしくなかった。ためらいがちだった低い声が、少しずつ張りを取り戻していく。濡れそぼった洗濯物が風に揺れながらドライな感触になっていくみたい。そう、それでいい。そろそろ私も何か言わなくては。

「つまり、しっかりお役目を果たしたのね」

言うまでもなく、杉原さんのことだ。

「まあね。たいした仕事ではなかったけど」

彼は笑いながら、答える。洗濯物がやっと陽光を跳ね返えた。

その瞬間、私たちの別れも完成した。杉原さんと私のあいだの了解が成立した。説明のつかないことだけれども、それがあるがままの事実、いや真実だった。

その日の残りの時間を、私たちはとても朗らかに過ごした。強いてその

ように振る舞ったつもりはない。ほんとうに、ふしぎな明るさのある、楽しい気分だった。

潔さを失いたくないと思っていた。私は酷薄な女なのだから、と。思うに私は、杉原さんという人を失うことよりもなお、彼との関係に揺れや乱れが生じることのほうをよけいに恐れていたのかもしれない。まるで地震を怖がるように。卑怯な私……

そして杉原さんも、ゆとりのある端正な年上の男性でいてほしかった。私は彼の爽やかな足の甲の透き通る肌の白さを、お守りのように胸に抱いていた。私が私であり、杉原さんが杉原さんであるための力を与えてくれるお守りのように。

私たちはいつものように井の頭線を明大前までいっしょに来て、別れた。いつものように彼が電車を下りようとしたので、私は眼で「もういいから」と伝えた。でも彼は微かに、しかし頑なに首を振って、私の先に立って、ホームに降りた。杉原さんがこんなに執拗な表情を見せたのは初めてのことで、私には、私はしかたなく後につづき、ほんの少し従順な女らしい心根になった。それは悪い気分ではなかったけれども、こういう感じが尾を引いた結果、私たちの基本的な関係として定着しないで済んだことを

喜ぶ気持ちもないではなかった。今日一日、今だけのことで、そう私は自分に言い聞かせていた。

井の頭線から京王線に乗りかえる短い通路の途中で、杉原さんは立ち止まる。いつものことだ。そこから私が階段を登るのをしばし見送る。通路と直角になっている階段を登る私の姿は、その位置からだとすぐに見えなくなる。私もまた、振り返っても彼が見えなくなる。

その日、私は杉原さんに「さよなら」と小さな声で告げ、行き来の激しい人の流れに押されるままに階段に向かった。

「さよなら」と彼も小さい声で応え、通行のじゃまにならないように体を斜めにずらして私を見た。それが最後だった。

階段の下で、私はもう一度振り向いて杉原さんを見ようかとためらった。たぶん、彼はまだ人の流れに逆らいながら、こちらを見送っているはずだ。けれども、私はそのまま振り返らずに進むことに決めた。杉原さんにも、そのほうがいいにちがいないという気がした。

宮の坂の駅を出ると、あたりにはもう暮れ方の気配がしのびよっていた

が、空にはまだ明るさが残っていた

暮れ方の空は、日盛りよりもずっと透明に見える。

街に灯が点り始めているのだが、まるでその灯りたちが自分の存在意義に自信が持てないみたいに瞬いている。まだ空が明るくて灯りが心許ないこの頃合いが好き、と私は思った。とくに今日のこの気持ちには合っている。

人と別れたことで妙に浮き足だっている気分をもてあましつつ、その一方で、自分がほんとうに求めていたのはこれだ、とも感じていた。人と別れることは悲しいはずなのに、そして確かに胸の片隅には痛みに似たものがないわけではないのに、そのことよりも、体の隅々から涼しい風が吹き込んでくるような張りつめた感覚のほうが、いまは貴重に思えた。二の腕や背中脇が、ピンと張りつめている。昨日まで感じることもなかった感覚が目覚めている。それが新鮮で心地良かった。

商店街は勤め帰りの男たちや買い物をしている女たちであふれている。この町のそんな夕方の風景が珍しいわけではないけれども、久しぶりに戻った土地のように懐かしく感じるのは、なぜだ。今日は特別おいしい鶏の炒り煮を作ろう、私はそう思って、しいて心を弾ませた。

鳥つ根の店はいい具合に客が少なかった。

私が軒をくぐって店に入ると「いらしゃいませえ！」とあどけない声が上がった。声は張り切っているが、姿は見えない。自然にカウンターの向こう側を覗き込むかたちになる。と案の定、ガラスケース切りきりの高さに女の子の頭があった。仰向いて、大きな黒い目に光を漲らせて私を見ている。

「あなたがお店番？」私はたずねた。

「うん。おかあさん、あっち」女の子はカウンターの先から人差し指を尖らせて店の外を指す。その先を辿ると、お豆腐屋さんがあった。

お豆腐屋さんの戸口には客らしい女性が一人、通りに背中を向けて立っている。それがたぶん女の子の母親、つまり鳥屋の若奥さんにちがいない。彼女は自分の店の客足が引いたすきに、小さな女の子に店番を頼んで自分の家の夕飯の買い物に出かけたのだろう。

私は彼女が戻るのを待つことにした。いらっしゃいませと迎えられても、まともに品物を注文するには、女の子はまだあまりに幼いように見えたし、母親もほどなく戻るはずだった。そして私は急いではいなかった。

「お店番してるの？ ひとりで？」時間つぶしに私はまた訊ねた。

「…」

女の子はコックリうなずいたが、何も言わない。たしかクーちゃんと同じか、一つ下といったところ。若奥さんのお腹が大きくなった時分から、知っているといえれば知っているけれど、この子について私の頭に入っている情報はとても少なく、たかだか二、三枚のスナップ・ショットでしかない。おばあちゃんにお守りされていたよちよち歩きの時、おかあさんに抱っこされて、「おでことおでこをゴツチンコ」していた姿。そういえば、ひとりで仰向けに寝転がって、逆さにしたミルク瓶からミルクを飲んでいったこともあったつけ。

商店の子はたいてい奥にいて店には姿を見せないし、それに私もお得意さんというほどでもない、時たま寄るだけの客だから、成長を知らずにいたとしても驚くには当たらないのだけれど、それにしても「いらしゃいませ」と迎えた女の子の成長に、私は目を見張った。というよりは、正直うろたえた。自分がうかうかと過ごしてしまった歳月がふり積もり、形を成して目の前にあった。

私は何もしなかったのに、何も残してこなかったのに…。そんな思いだった。誇れるほどの仕事もせず、人並みの結婚もせず、子どもも育てな

った。そもそも生まなかつた、生むことも考えなかつた。

その時、「すいませーん」と道の向こうから遠い声がした。

「ママぁー!」と、女の子が急に幼げな口調になって応じる。

見ると、豆腐屋さんの門口に母親が立って、こちらを向いていた。子どもだけ店番に残して買い物に行ったものの、自分の店が気になっていたのだろう。買ったばかりの品物が入ったプラスチックのボールを両腕でかかえるように持って、こちらに走ってこようとしている。車と人の往来に眼を配りながら、その眼をつと空に向け、そして、ボールを抱いたまま、ひらりと身をおかわすように、通りを横切った。それはまるで、ものすごく大切なものを胸に抱いて守りぬこうとしているような姿だった。貴重なものがやっと手に入って喜び勇んで、といったふうな勢いでもあった。あるいは大切なもの、もしくは大切な人の方にわれを忘れて駆け寄って行く熱っぽさにも似ていた。

若い娘のように脛を躍らせ、スカートの裾を乱して走る姿に、私は胸を衝かれて見入っていた。とても美しい、と私は虚心に思った。そして、こういう美しさは自分にはない、と痛いように思った。

「雨が振ってきた」

店に走り込むと若い母親は、待たせた客である私へとも、自分の代わりに店番してくれた女の子へとも、どちらへともつかないふうに言い、大きい息をつきながら振り返って外を見た。たしかに雨がふっていた。

「変ねえ、さっきまであんなに晴れてたのに」

彼女は誰にともなくそう言ってから、「お待たせしてすみません」と、やっと私に挨拶をした。抱えたボールを脇の台に置くと、女の子はそれを見込んで、

「またお豆腐」

「なに言ってるの。お豆腐は体にいいのよ。お肉ばかりじゃ、だめなんだからね」

言いながら、母親は私の注文を聞き、手早く鶏のぶつ切りを包む。どこにでもありそうな母と子の会話だ。どこにでもありそうだが、それが鳥屋の若奥さんで、鶏肉を売りながらの話なのだからおかしいと、私は思った。

品物を受けとって、店を出た。雨はまだ続いていたが、気にならないほどの小降りになっている。このまま傘なしで家まで歩いていても、そう濡れはしないだろう。「だいじょうぶですか？」と若奥さんは聞いたが、店のなかで雨宿りをする気にもなれなかった。

肩をすばめて小雨の下を歩きながら、考えた。鳥つ根の若奥さんの、あの強さは何なのだろう。結婚して夫という近い男性と日々を暮らし、店を切り盛りしながら、夫の両親という他人にも接してきた。子どもを身ごもり、出産をして、それでも店の仕事をやめずに、子育てしながら客の対応をこなしている。自分と家族の夕餉のことを考え、暇を盗んで店番を幼い子に任せて夕飯の買い物に走る……。そんなふうに、あっちやこっち、数え切れないほどの小さな仕事をこなしていく。私にはどうしてできないことだ。そもそも私がやったことのないことばかりだ。その一つをやろうとするだけで、私だったら、考えなければならぬこと、気持ちを整えなければならぬこと、覚悟しなければならぬことが目の前に山と立ちふさがって、結局のところ、立ち往生してしまうにちがいない。あんなふうに、あっちのしがらみ、こっちのきずな、そのまた向こうの煩わしき、目の前の心配など抱え込んで、どうして生きていくことができるのだろう。私にはできない。どうしてできない。できない、と呟きながら、私は小雨の中を歩きつづけた。小走り寸前の急ぎ足の歩調を取るように、できない、できない、できないと、言いつづけた。

家に着いた時、おいしい煮物を作ろうと張り切っていた気持ちは、紙風

船が雨に濡れて破れたように、すっかり萎んでしまっていた。せっかくの鶏肉だったが、そのまま冷凍庫に放り込むと、私はまずは風呂で温まり、冷蔵庫のあり合わせで空腹を満たして、早めに床にもぐり込んだ。面倒なことは明日ゆっくり考えればいい。そんなふうに時をつなぐことができるのが私の健全さだ。非生産的で無益な自己保全。たぶん人が私を酷薄だといふのもそのせいなのだろうけれど。でもそんなことは、今はどうでもいい…。

目が覚めると日曜日だった。布団の中で、そういえば日曜だった、とうんざりした。決められたレールに乗って、やるべきことを手順どうりにこなすか、さもなければ自分の思惑と関係なく周囲の都合に振り回されて時間が流れるワーキングデイだったらよかったのに。人と別れるなら、ウィークデイのほうがいい。

しかたない。やることは山ほどあるはず。覚悟を決めて、やおら起き出す。エプロンをして台所に立つと、ちゃんと出しをとって、じゃがいものみそ汁を作る。冷蔵庫の隅にあった少ししなびたキュウリを小口切りにし、ぎゅっと絞って酢の物を作る。みそ汁に使った出しの余りで、出し巻き卵を作る。ふっくら温かい卵焼きは、これでほんの少し大根下ろしがあった

ら言うことはなかっただろうけど、性根を入れて焼いただけあって、我ながらいい出来だ。そうだ、今日の午後は大根を買ってこよう。冷凍を解凍したごはんだけがちょっとお粗末だったが、久しぶりに気を入れた和風ブランチは、まず一段階、身も心も真っ直ぐに立て直してくれた。まだ、しやんと力の入る状態ではないけれど、これならよろけずに歩いていけそう

だ。明るい日中は丁寧に掃除をする。ふだんはいい加減にしがちな机の後や、引き戸の下溝のホコリも、今日は隅々まで掃除機を当てる。その後は拭き掃除。鴨居の横木、窓の棧、椅子の脚、流しの羽目板、とにかく狭い住まいの中で拭けるところはすべて拭く。拭いては雑巾をすすいで、絞っては拭き、またすすいで拭いた。しまいは絞った雑巾を片手に、まだ拭けるところはないかと探したが、ついにどこも見あたらなくなった。ちょっと息がはずんで、体が熱くなっていた。

それから繕い物をした。糸が抜けて安全ピンで応急処置をしていたジャケットの裾、取れかけていたシャツのボタン。裁縫は嫌いだけど、その分やると大仕事をしたような達成感がある。

陽が傾き始めた頃、買い物がてら散歩に出た。いつも会社帰りにそそく

さと買い物をする宮の坂の商店街ではなく、方角を変えて小田急線の経堂へ出てみる。わざと通ったことのない道を行き、早くもしつかり道に迷って通りすがりの人に訊ね、当初こころ積もりの二倍もかかって、やっと経堂に着くには着いたものの、そこは見覚えのない商店街のはずれで、方向を勘違いしていたらしく、駅がどこにあるかも分からない。うっすら夕闇が降りてくるなかで一瞬途方に暮れた自分自身が、とても今の自分だと、ふと考えた。

これではいけないと気を取り直し、手近な喫茶店に入って休憩する。仄暗い店内は民芸調の木肌を活かした内装で、壁にもコーヒーの香りとクラシック音楽が染みこんでいる感じ。杉原さんが好きそう……と考えかけて、頭を振って考えを追いやる。今はまだ、自分の足元が大切。あまり飛び跳ねてはいけない。そうっと店の中を見回すと、客は学生同士らしいカップルが二三組と、商談をしているようすの中年男性の一人、あとは足元に面白い物籠を置いて新聞を読んでいる主婦。自分がそんなに場違いでもないのに、ほっとする。もし杉原さんといっしょだったら、むしろ私たちのほうが……いや、いけない、いけない。

よけいなことは考えないように、しみじみとコーヒーを飲んで店を出る

と、学生と主婦で通りがひどく混み合っていた。宮坂の商店街と同じような町並みだが、こうも学生の数が多いところを見ると、近くに大学があるのだろうか。見回すと、ずらんと通りと名前が見えた。郷里の町にもずらんと通りというのがあった。どこにでもある通りの名前。たぶん空に向かうにつれて頭を垂れるようにカーブしている街頭が、ずらんの花を思わせるから。その花が幸せを呼ぶと言われているのも、町の名として喜ばれるのだろうか。

駅前に出て、そこから線路沿いに豪徳寺に向かって川沿いの道に行く。蛇行する小さな川が思いの外に深く、底のほうに澄んだ水が流れていた。護岸されていない土手から木の枝が水面に伸びて陰を作っている。

小田急線の豪徳寺駅の手前に玉電山下の無人駅があって、川はその直前で直角に近い角度で左に曲がった。それを見やりながら、無人駅のホームで電車を待った。となりにちいさなおばあさんがまん丸く座っていて、人なつこい柔らかな声で、「ずいぶん日が長くなりましたねえ」と声をかけてきた。

それに頷いて応えていたら、急に胸にこみ上げるものがあって、思わず、わたし、恋人と別れたばかりなんです、と言いきりになって、自分で自分

に驚いた。でも、それは声にはならず、「もう六月ですものね」と穏やかに言っている自分がいた。

家に戻ると、ひどく疲れていた。疲れるための一日だったから、それでいいのだと思い、昨日買った鶏肉を炒り鶏にした。炒り鶏のつもりが煮くずれて、ひどい仕上がりになった。ぐちゃぐちゃだ、と食べながら思った。

毎日、レールに乗っているように生活をする。決められた時間割に従っているように、あまりものを考えず、先のほうも見ず、後ろを振り返ることもせず、とりわけ振り返ることのないよう、密かに気をつけて暮らしていく。微妙な配慮をしているので、少しだけ背筋がこわばって、そのことにちよつとしたエネルギーを要するので、まるでだいに、だいに生きているような感覚で、それがいいのだと思うことにしている。それでよいなことを考えないですむのがいいのだと。

世界が長い長い曇り日のようだ。いまが午前中なのか、もう夕方なのか、それも分からなくなってしまうた、長い長い曇り日。晴れた青空を見たいときえもう思わなくなった、光をいっぱい溶かし込んだあの青空をいつから見えないのかとも思い出せない、来る日も来る日もつづく曇り日だ。

だからといって、闇ではない。必要なだけの明るさはある。洗濯物がちゃんと乾くだけの空気はある。

起きる時間が決まっているので、きちんと時間どおりに目を覚ます。朝ご飯を作り、ついでお弁当も作って、簡単に後片づけをし、身仕舞いをして会社に行く。仕事があつて、そのために決まって家を出なくてはならないので、気持ちがいやんとしている。

夜も早めに、ほぼ決まった時間に帰る。会社の帰りに寄り道をするのがなくなったので、まだ商店街が閉まる前に宮の坂の駅に着き、買い物をするができる。新鮮な野菜や肉をすぐに料理することができるというのは、考えてみればたいした贅沢かもしれない。夜の食事をして、お風呂に入ると、後の時間はあまり残されていない。髪を乾かしながら横目でテレビのニュースを見て、前宣伝のやかましい娯楽番組や特別企画なんかを見ていると、もう寝る時間。明日があるから、朝起きて会社に行かなくてはならないから、いつまでもぐずぐずしている暇はない。なんと充実した秩序ある生活だろう。ちよつと自嘲気味に、そう思ってみる。

といったも、生き甲斐と言えるような立派な仕事をしているわけじゃない。私でなくても他の誰でもやれることだ。月給もそこそこ、仕事の中身

もそこそこ。できればもそこそこ。時々、われながらマズッたと思うこともやる。でも謝ることは謝って、またつづけていく。レールの上に行くように……。時間割にしたがって黙々と歩むように……。

そんな感じでやっていった。そんなある日のことだ。

例によって例の如く、詰めのレポートを書いて、部長の机に持っていた。レポートといっても、終わったばかりのプロジェクト全体の日程表を仕上げて、関わった人間別に仕事の内容と時間をまとめ、会計の大枠をまとめ、最後に反省と今後の展望を短い文章に作文して添える。もうここ数年、何度もやった仕事なので、新鮮味もない代わり大して緊張もしない。眠っていてもできるというほどではないが、まあやり方は頭に入っているから、そのとおりにやればいい。で、仕上がった十枚足らずのレポートに資料を重ねてトン！ 端を揃えて部長の机に持っていった。駅ビルに付属した中規模のカルチャーセンターの業務案内パンフレットの作成という仕事だった。

部長はレポートを取り上げて、パラパラ頁をめくりながら見ている。この仕事はつまらないぶん途中で問題も起きなかったし、うちの会社としてはさして儲かる内容ではないから、そう懇切丁寧にレポートを見るほどの

ことはない。忙しいときなどは、「はい、ご苦労さん」と言うだけで、受け取ったなり表紙もめくらず脇に置くこともあった。

なのにその日は、ばかにじっくり読んでいる。ひよつとして、またポカをやらかしたか、ふと気になった。気を抜きすぎたかも、とは言っても大きなミスなどしようもないくらい手慣れた作業なのだけ……、

「いいねえ、うん、とてもいいよ」

「何が、ですか？」

私は思わず聞き返してしまった。いいねえ、なんて殊更に言うような大きなプロジェクトではない。

「いや、このレポートがき。山根くんのは安心して読めるんだよ。必要なことがびちっと簡潔に書いてあって、変に気負ったところもないし、筋道がすつと通ってる。なかなかこうはいかないもんだ」

部長は私を見上げて、唇の端でニツと笑った。ふだんあまり笑わない人なので、ちよつと気味が悪い。

「あハ……、ありがとうございます。まあ、長くやっていますから。慣れです」

謙遜したつもりだったが、われながら言い方がちよつと投げやりだなと思っ、て、内心、首をすくめた。でも、ほんとにそれが実感だったのだ。相

手のクライアントが変わるとはいえ、来る年も来る年も同じ手順で仕事をして三十も過ぎれば、誰だってソツなく作れるようになるだろう。人目を引く必要もなく、決まりどおりに書けばいいこんなレポート。

「そうか、慣れねえ。うん、そうかもしれない。しかし慣れというものも、じつに得がたいものだよ。いやあ、ほんとにはだいいじなのはそれだけなのかもしれないなあ」

「はあ…」

つい気のない返事をしてしまった。部長の言ってることが、よく分からなかった。でもまあ悪い気はしなかった。背中のごかが痒いような気がしたがその一方で、何となく体の芯のところに小さな重しができたような感じもあった。慣れという名のその重しのせいで、胸も肩もちよつとばかり軽く楽になったようでもあった。

そんなふうに、仕事は順調だった。つまり、私に深く関わることなく、決められたスケジュールでどんどん進んでいった。まるで、私がいなくても仕事で自分だけで自らをこなしているような、そんな気がすることにさえあったが、それはそれでいいのだと思った。私は仕事の伴走者、いや走るというほどの力業でもなかったから、立会人といったところだろうか。そ

れでも誰かがいなければ、まったくの人間不在で仕事が成立するわけではなかったから、やはり立会人であるところの自分はそれなりに必要なのだ、と考えた。

ときどき退屈しそうになる。そんな時は、〈肝心なのは慣れ〉と心の中で呟いた。すると瞬間、退屈しているということが何か意味のあることみたいな感じがしてきて、そのせいで退屈そのものが希薄になり、霧散してしまうのだった。

それにまた、奇妙といえば奇妙なことだが、自分は仕事の立会人なのだと思い定めてみると、前ほど退屈することがなくなった。もしかすると以前は、いっしょうけんめいやりすぎたあまり、無駄な力が行き場を失って、それで退屈という澱みを作っていたのではないだろうか。ま、それも変な気がするが、そうではないとも断定できない。

退屈することが少なくなると同時に、ひどい落胆も絶望もなくなった。仕事は順調というのは、つまりそういうことだった。

別れた人のことを考えなかったと言え、うそだ。考えないようにしていたことは事実だけれど、もしかしたら考えまいとする気持ちの構えその

ものが、始終考えているということの裏返しなのかもしれない。

ほんとに別れたのだろうか、と何度も思った。別れということばは、杉原さんと私のどちらの口からもついぞ出たことはなかった。だから、もし私のほうから電話をするとか、向こうの電話を受けるとかしたら、まるで何ごともなかったかのように、また逢うこともありうるのだった。

でも私は電話はしない。最初から、電話をするのは杉原さんと決まっていた。君から電話してくれることってないからね、そう彼が呟いたことがある。それを言ったのは、ふたりが逢うようになってまだ日が浅い頃のこととで、少し恨めしげな、電話をしない私を甘く詰るような響きだと思いつつ聞いた覚えがある。でも考えてみれば、そう言われることで、私はけっしてこちらからは電話をしないというポジションを選択させられてしまったのかもしれない。電話をしないことは、私にとってよりも、杉原さんにとって必要なことだったのではないか、必要、とまでは言わなくても、安心できることだったのではないか。私はあのためらうように、くすぐるように詰られることで、電話をかけてこないという担保を取られていたのかもしれない。別れた今にしてはじめて、そう考えた。

それは一瞬はっと身じろぎするような気づきだったけれども、しかしだ

からと言って私が、いや私が取る行動が変わるわけではなかった。私は、電話はしなかった。電話をしない人だった。電話をしないというポジションから動くことができなくなっていた。

向こうからの電話は、あったのかなかったのか、知らない。何度か、微妙な呼び出し音は鳴った。けれども私は受話器を取り上げなかった。執拗に、耐え難く続いたり、変に中途半端な回数で切れたりした。それが杉原からの電話だったのかどうか、私はついに知ることがない。

表面的には別れの合意が成立していないこの状態の中で、けれども、それがふたりの、どちらの気持ちにも添うものだという確信は揺るがなかった。こうなることが一番いいのだ、ものごとを損なわずにすむ最良のやり方だと私は思っていたし、向こうもそう考えているはずだった。私たちはそういう点で、とても感じ方が似ていたし、いわばそれが私たちの接点だった。

愛が冷えたのだったか、と自分に聞いてみる。そうかもしれない。しかしそう思う反面で、愛はむしろ深まっていたという思いがあるのも事実だった。愛。それが何なのか、確信はないけれども、自分の存在とつながっている誰かに対する動かぬ思い、そのようなものであるとすれば、私の中

には彼に対するとっても確かな何かがあったのだ。それがあるから、離れていてもいいと思えるような何か。

それはもはや自分の外の誰かではなくて、私自身の中であって私でないもの、だった。

でも、そんなこと、きっと負け惜しみでしかないのだろう。要するに、男にとって私はどうしても別れられないほどの重みのある女ではなかったというだけのこと。

そんな状態にあって、少なくとも私は杉原さんが嫌いではなかった。もちろん、憎くもなかった。時々、歯が疼くような思いが体の底から湧いてきたが、その思いも、それに堪えることも、私は嫌いではなかった。

情の薄い女なのだ。そう思った。情が薄いだけではない。仕事もたいして有能とはいえない。うっすら愛して、うっすら生きているだけの、じゃまにならない女。そう思って、ひとりで、うっすら笑った。

秋になっていた。気づかぬうちに秋になった。

ある朝、出勤するために木戸をくぐり、閉めた途端に空を振り返って、秋だ、と思った。青い空が澄み切っている。久しぶりに見た空だった。

ずいぶん長いこと、空を見ていなかった。瞬間そう思ったが、もちろんそんなはずはない。寂しい梅雨があって、夏が過ぎた。冷夏だとニュースは言っていたが、格別暑いとも涼しいとも感じなかった。それよりも自分の中に抱え込んだどうしようもない凍えを、そっと庇うようにして生きていた。

だが今日の空は何と澄み切って青いことだろう。これさえあれば、だいたいようぶ、生きていける。そんなふうに感じさせる青さだった。

仕事のほうもあいかわらずだった。可もなし不可もなし。だって、それしかないではないの。これをつづけていくほかないのだから。

そういう割り切りだけは、いつのまにか身についている。でも、いつのまに？ ああ凍える夏のあいだに？ それとも鳴かず飛ばずの会社員生活のあいだに？

そういえば、勤め始めてもう十年以上の年月が経っていた。勤続十年と言われた時は、他人事のように恥ずかしかった。「入社する子は多いけど、十年続く人は少ない」部長にそう言われて、まわりを見回せば、入社当時にいた人で今も残っている顔はとても少ないのだった。小説を書くのだ、と張り切っていた松本さんも、数年前に辞めていた。

「古株だ」部長が私を見て言うその口調に、温かみと、ほんのちょびりの皮肉があった。信頼、いや安心感と言うほうがいいような薄味の情味だった。その部長も人が変わって、かつての課長の沢田さんだ。こんなふうに人生はゆっくりと回転して進んでいく。改めてそう思った。

人が入れ代わったことをのぞけば、この十年のあいだ、会社そのものにはほとんど目覚ましい変化がなかった。いや、しいて言えば、お弁当を会議室で食べるようになった。

会議室といっても十数人が座れるそこその部屋だが、名称どおり会議やミーティングに使われるほか、来客があれば応接室にもなるし、物を広げる必要のあるときには作業室にもなる、ちよつと机を離れたいなどという午後の息抜きや外回りから戻ったときなどは休憩室にもなるという、いかならば多目的空間。中央に大きなテーブルがあって、その周囲の椅子があるだけの殺風景な部屋だが、テーブルの上がすかーんと空いているので、のびのびとお弁当を広げるのに都合がいい。もつといいことには、部屋の隅に給茶器があって、お茶と白湯、冷水が出た。脇にインスタント・コーヒーと紅茶のティーバッグ、細い砂糖の筒とクリームの小さなカップも備えてあるから、つまり簡単な飲み物なら、セルフサービスでいつでも自由

に飲めるのである。

この機械に関しては、ちよつとしたいきさつ、というか悶着があった。私が入社した当時は、若い女性社員が他の全員の分、お茶を淹れて配って歩いた。その「お茶汲み」を次のもつと若い女性社員に引き継ぐのが、毎年ちよつとした山場で、へたをすると一種のしごき、もしくはいびりの様相を帯びることもある。それが代替わりをする当事者たち―つまり、やらせる側とやらされる側―にとつても、サービスを受ける周囲にとつても、少なからずストレスになった。

そもそも大勢の人にお茶を淹れることなど家庭でも学校でも習ったことがないのがふつうである。そして習ったことがないものは、どんなに簡単に見えることでも、初手からうまくいくものではない。したがって会社のお茶も、新人になるとたいはいは不味くなり、たとえお茶ひとつでも不味ければまぎれもなく不味くて、それは楽しいことではなかった。まれにじょうずにお茶を淹れる新人がいて、気の利かない上役が、おお、君はお茶の入れ方がじょうずだね、と誉めたりする。と、それは先代のお茶係に対する嫌みと取られて、実際に不穩の種火になったこともあった。

時折しも機会均等法のとやらの、女にお茶汲みをさせるさせないが、世

の中でまともに論じられた時代だった。

ある日ミーティングの最中に、得意先との交渉について報告をするべき女性社員がお茶を配るのに忙殺されていて、社長から「お茶なんか、そんなものでもないだろう」と怒鳴られるはめになった。彼女はすぐにお茶配りを止めて報告を始め、彼女の直属の上司が代わりに立って配った。がその上司が男性だったので、時節柄、皆の思惑を刺激することになったのだ。

その女性社員は若かったが有能だった。で、怒鳴られた時は黙っていたが、直後、お茶なんて、ほんとにどうでもいいことですよ、とやんわり上役に持ちかけた。微妙なのは、彼女は決して怒鳴られたことを根に持ったわけではなく、むしろこれを機に納得がいかない女性のお茶汲みを廃止しようと画策したことだった。まことに有能な人というものは、自分のミスや災難さえも有利に転換するものだ。私だったら、とてもああはいかない。社長に怒鳴られ、そのうえ上司を働かせてしまったのだから、謝るか、黙って小さくなっていただろう。

かくして我社でもお茶汲みが問題になり、結果的に会社一台、給茶機が導入されたのである。それもあろうことか会議室に。世の中と比べても

早いほうだった。

ちなみにきつかけを作った女性はそれから間もなくして大手出版社に転職し、給茶機だけが残った。が使ってみてわかったことに、これは大成功だった。機械そのものの性能以上に、会議室の性格をがらりと変えたからだ。ひよっとすると訪れた客によつては、女子社員が淑やかにお茶を盆に載せて運んでくれるほうを喜んだかもしれない。しかし社員にとっては、セルフサービスのお茶があるせいで「会議室」が休憩室にも食堂にもなつて、職場環境は著しく向上した。昼食や息抜きの時間におけるおしゃべりは、社内の人間関係をとても豊かにする。

もちろん、会議室だから会議にも使われる。というか、それが最優先の使用目的だ。その他にも来客の応接といった使途があつて、そういう時にはお弁当を持ち寄ることはできないから、しかたなく自分の机をちょこちよこ片づけ、中央にお弁当分の場所を空けて、お昼にするのである。お茶は廊下の隅にある小さなキッチン（往時のお茶汲みの持場）で淹れるしかない。入社当時は私も疑いもせず毎日そうしていたのだが、会議室の広いテーブルと簡単に飲み放題の給茶マシーンに慣れた今では、不自由でリラックスできない昼休みのように感じられる。環境とは恐ろしいものだ。

当初、ランチタイムに会議室に集まるのは女子数人だけだった。そのうち男性が奥さん弁当を持ってきたり、外からお弁当を買ってきて食べたたり、あるいはレストランで済ませてもお茶だけ飲み立ち寄るようになった。大盛況である。

ある日のこと、私が自分のお弁当を広げて、やおら食べ始めようとしたちょうどその時、テーブル越しに長い腕が伸びてきて、おかずのひとつを盗んだ。不意を突かれた一瞬のできごとだった。びっくりして顔を上げると、テーブルの反対側に座っている若い男性が、すでに取ったものを口に入れ、もぐもぐと食べている。そして私の顔を見てにこにこ笑って頷きながら、

「おいしい」

と満足そうに言った。鶏の照り焼きを一口大に切ったものだった。それをゆっくり食べ終わると、自分の手弁当である大きなおにぎりにかぶりついた。

人のものを盗っておいて、ごめんなさいでもなければ、恥ずかしそうな素振りもない。まるで当然の権利のように堂々としている。私は返すことがなかった。

それは私より数年遅れて入社した男性で、たしか営業一筋だったから、私とは接点がなく、ゆえに私には名前もおぼつかない人だった。なんて図々しい、とは思ったが、相手がどういう人か定かでなかったので、言うべきことばが見つからない。それにお弁当のおかずひとつで大騒ぎするものもどんなものかという気にもなってきた、結局その場は何も言わずに収めてしまった。

ところが、その二日後、その青年がまた私のお弁当からおかずを盗った。その時は私の横にいた総務の山本さんが、

「またあ！ 人のおかず取っちゃだめなんだからね。悪い子ね、水野くんは」

私の代わりに叱ってくれた。山本さんは会議室ランチの常連で、最初の時にも見ていたのだが、その時は私同様びっくりしてものが言えなかったらしい。彼女のおかげで私はいかにもケチっぽい文句を言わずにすんだが、それにしてももともと小さいお弁当のおかずは、ひとつ抓み取りされた後はちよつと物足りなかった。

二度目に取りられたのはチーズオムレツの一切れで、またも少なめになったお弁当を食べながら、そういえば水野君ていったつけ、と思い出してい

た。

叱られて反省するかと思いきや、事態は逆の方向に進展した。この水野クンは凝りもせず、前にもまして大きな顔をして私のお弁当から一品を盗った。だけでなく、その罪を重ねつづけたのである。何しろとてもすばやくて、警戒していてもスキを突く。その間髪を入れぬ具合がじつに巧みで、周囲が、お、やった！ と嘆声をもらすこともあった。かと思えば、逆にこちらが取るなら持つてけと鷹揚にかまえているのをチラツと窺ってから、ご丁寧にも軽く会釈などして悠然とつまんで行く。いずれにしても断乎、決然として、盗るのである。

そればかりではなかった。何度か指でつまむことを繰り返した後で、彼はある日、自慢げに箱入りの箸を持ち出した。そして、

「マイ箸……」

さりげなく周囲にお披露目するような、あるいは承認を得るような口調で言うと、わるびれる風もなく小箱を開けて塗り箸を取り出し、それを優雅に差しのばして、私のお弁当箱からその日の一品を取り寄せた。肉じゃがの肉だった。箸があつてよかった、でなければ指が濡れただろう、思わず私はそんなことを考えた。要するに彼はその日以来、もはや出来心でも

なくゲームでもなく、そうするぞと予告して通告している確信犯的行為として、私のお弁当の一部をわがものとしてしまったのだった。

私にしても、もっと大きな物だったら文句のひとつも言っただろう。いや、言うべきだったのかもしれない。しかしお弁の当のおかずの一切れというのはいかにも些細で、じょうずに文句が言いにくい。そうこうするうちに相手は、たった一切れのために箸持参で、当然のように持つていく、まわりも面白がつてそれを見ている。というわけで、いつか奇妙な習慣として定着してしまったのだった。

気がつくと私は、前の晩に料理をしながら、明日、水野クンは何を持つていくだろうか、と考えるようになっていた。水野クンが選ぶのは肉に限らなかった。ニンジン・グラッセの一片のこともあれば、キュウリ揉みのひとつまみのこともある。予測が当たることもあれば、外れることもあった。私としては別段そのためにどうこうするわけではない。が、それでも取られることを想定して量が少し増えたのと、いい加減な料理はしなくなった。どちらも私にとっては悪いことではなかった。家庭もないし、つきあう男性もない三十女には、こんなお弁当泥棒がお似合いかも……、そんな自嘲と太っ腹が相半ばする心持ちで、ムキになって止めさせようと

遠い祭

しないでいた。たった一切れ、たいした損失ではない。

彼が今は当然のように手を伸ばすと、気さくな山本さんが代わりに、

「いつもいつもすみません。でしよ、水野クン。感謝しなさいよ」

誰に向かって言っているのかわからないことを言う。すると彼は、

「ありがとうございます。こんどお返しします」

どういう意味か、冗談のように答えるのである。でも何もお礼はない。私も別に期待していない。

九月始めのある夕方、会社から戻った私を、母屋の奥さんが勝手口から顔をのぞかせて呼び止めた。

「ねえ節子さん、久美子が節子さんとお祭りに行きたいって言ってるんだけど。節子さんのご都合はどうかしら。もしいっしょに行けるようなら、本宮の日曜日にうちに来るっていうんだけど。でもご迷惑かもしれないから、おばあちゃんが聞いてあげるねって言ったの。だって、節子さんだって予定があるかもしれないし。ねえ。デートとか」

言葉尻は冗談めかして言う。

「お祭り。そういえばもうそんな季節ですねえ」

私は思い出したように言った。じっさい、その時まで近くの神社の秋祭りのことはすっかり忘れていたのだった。

クーちゃんと私は、彼女が16歳くらいの時から、いっしょにお祭りに行くのが暗黙の約束になっていた。もしかすると、お祭がふたりだけの最初の外出だったかもしれない。とは言え、二人で出かけたことは数えるほどしかなくて、八年あまりの間に、近所の公園に行ったのが二回か三回、デパートに行ったのが二回くらいだ。どの場合も、私が出かける予定でいた休日に、たまたまクーちゃんが母屋に来ていて、例によって私のところに顔を出したので、いっしょに行く？ と誘った。

それでもお祭だけは、二人にとってちょっと特別な意味を持っていたような気がする。気がするというのは、じつのところクーちゃんが内心どう感じていたのか、私にも確かなところは分らないからだ、このお祭ばかりはいつの間にか暗黙の恒例行事、ちやうど都会で働く青少年にとってのお盆帰省のようなものになっていたのではないだろうか。親しい人たちへの義理というか、めぐる季節の目印というか、成長するクーちゃんにとってお祭はそんな感じだったのかもしれない。小学校に上がる頃から、「お祭、行く？」と向こうから打診してくるようになった。

遠い祭

あるいはこうも言えるかもしれない。クーちゃんにとっては、私とお祭とのセツトは、彼女に許された少ない外の世界だった。近所でなく一人じや行けない遠くへ、お祭という非日常的な空間へ、親ではないよその人と行くことが、彼女にとっては特別の出来事だったのではないだろうか。お祭の日、クーちゃんはいつもちょっとおしゃれをさせてもらって、ママとおばあちゃんに、行ってらっしゃい、と送り出される。四歳や五歳のこどもにとって、それはすてきなイベントであり、文字通りのフェスティバルだった。

あれは四歳の時のお祭だったか。おもちゃの宝石屋の屋台の、色とりどりの光を放つ首飾りの川を食い入るようにみつめたあとで、クーちゃんが、「あれはホンモノなの？」と密やかな声で私に聞いた。まるでアラジンが魔法の洞窟を見た時のような、その感動の眩さが私の胸を揺すぶった。

そしてまた、五歳の時だ。飴でくるんだアンズをじっと見ているクーちゃんに、食べようか？ と訊ねたら、「ママはああいうの買っちゃだめって」。恨めしげな声がかわいくて、「じゃ秘密で食べちゃおうよ。節子さんも食べる」と言うと、バツと顔が輝いた。私もこども時代、お祭での買い食いを禁じられていたから、食べたことがなかった。ふたりは念願のアン

ズ飴をかじったが、想像したほどおいしくはなく、顔を見合わせて、粘つく甘みと、禁を破ったほのかな苦みを共有した。

そんなクーちゃんも、最近では私のところに顔を見せることが少なくなった。それ以前に、母屋の祖母のところに來ることが少なくなった。

「ほんとに孫なんて、かわいいのは小さいときだけね。大きくなると、寄りつきもしない」

そう母屋の奥さんは言うけれど、小さい孫がせつせとやって來たのは、母親が育児の息抜きをしたかったからで、小さい子どもは本人の意志というより親の都合でせつせとやって來ただけ。やって來て、退屈するといつも私の離れを覗いていたのだ。

かわいいのは小さい時だけ、と口では言いながら、母屋の奥さんは孫の話をするが殊のほか楽しいらしい。とくに本人をよく知っている私は、孫の噂話には格好の相手だった。私もクーちゃんの近況は聞き飽きることはない。そんなわけで、クーちゃんと遊ぶ回数が減ったとはいえ、彼女の近況はよく知っている。お祭りが理由にしろ、奥さんにとって久しぶりにクーちゃんは來るのが大きな楽しみであることは、顔を見るまでもなかった。たとえばデートがあったとしても、ここはクーちゃんを優先しないわけには

遠い祭

いらない。

お祭の前の一週間は、私にとっても気持ちの弾む日々だった。杉原さんと別れて以来、待ち遠しいという感情とは無縁だったから、なおさらだった。店々の軒先に町名の入った提灯がともる。日頃は眼に止まらない豆腐屋の横の空き地が、その時ばかりは町会の詰所に変貌して、テーブルと椅子だけの簡略な空間に男たちが出入りし、弾んだ声で話し合う。もちろん張り切っているのは商店街の一部だけで、道一本裏手の住宅街には何の変わりも

ないのだけれど、それでもお神楽の練習をしているらしい笛や太鼓の音が、いつもとは少しちがう何かを空気のなかに溶かし込んでいた。祭の囃子は遠くで聞くと懐かしく、時にもの悲しくさえあるが、近くにあると浮き足立つ思いにさせる。風に乗って遠く、また近く、人の心の襞をくすぐって行く。

会社が早く引けた金曜日、私は帰りがけに駅のそばのスーパーに立ち寄った。

もともとあった八百屋が少しずつ扱う品目を増やして、ある時から当時流行りのスーパーになった。近所の小さな商店にとっては脅威の商売仇だ

ったはずだが、それでも便利さには勝てず、店の主婦たちも自分の商いにはない品を買いに来る。それが面白かった。久しぶりに鳥つ根の奥さん、若いほうではなく、母屋の奥さん言うところの先代の奥さんを見かけたのも、そのスーパー松屋の魚コーナーの前だ。その奥には鶏肉のコーナーもある。行きつけの鳥屋の奥さんに鶏肉コーナーのそばで会うのも微妙だが、当の本人が来ているのだから、これは一種の中立地帯。彼女のほうでも、私と同じく今晚のおかずは魚と考えたのだろうから、気にすることはない。ちなみにこの松屋スーパーは魚が新鮮で、ゆえに暮らし始めた当座は魚を下高井戸で買っていた私も、追々こちらを利用することが多くなった。

奥さんは同年配の女性と盛んなおしゃべりの最中である。

「ほんとに近ごろ体が利かなくなってきた。自分でも情けないよ。医者に行くとおちもこつちも悪いようなこと言われてねえ。太りすぎだって。でも自分でもどうしようもないのよ。ま、あんまり気にしてもしょうがないけど、あんた、どう？」相手が言うのに、鳥つ根夫人は、

「おたがいさまよ。なんていっても年だからね。でもわたしは、どっちかっていうと若いときのほうが体が弱かったかもしれない。最近は特に悪いところはないから」

遠い祭

「昔から細かったしねえ。ほっそり美人。ほら、着物なんか着ちゃってさ」
「そんなことないわよ。その代わり、今になってシワだらけ。見てよ、ほら」

奥さんは、ほっそりした手を相手の前に差し出して見せる。遠目にはなかなか粋な仕草で、シワのほどは私の位置からは確認できない。

「それはそうと、お宅の若奥さん、踊りじょうずだねえ。あたし昨日、神社で盆踊りの練習、見ちゃったのよ。ちよつと用があつて行つたもんだから。びっくりしたあ。着物も似合つてさあ」

「ん。町会のおつきあいでも踊るようだねえ。櫓の上で踊るんだかって。おかげで練習、練習って店を空けるから、わたしが大変。今日もずつと店番させられて」嫁の話になったとたん、鳥屋の奥さんの表情に陰がさす。そんなことはまったく気にせず、相手は、

「でも、ありやちよつとしたもんだわ」しきりと感心している。

「こどもの頃、日本舞踊を習つてたらしいのよ」

「あーら、お嬢さんのねえ」

「さあ、どんなもんだか」

鳥つ根の奥さんの口調は、複雑な色合いを帯びていた。ちよつと自慢し

たい気もあるが、いまいましもある。世間話のお愛想に日頃の鬱憤、それに今日いちにち店番を肩代わりした疲れなんかが混じつて、そこには初老の女性にしかない匂いがあつた。

約束の日曜日の午後、部屋にクーちゃんが来た。

クーちゃんは八歳になっていた。まだまだこどもだが、時に少女といつてもいいような硬質な艶を見せる。その絶妙な混じり合いが、まるで冷たいアイスクリームに温かいソースをかけた極上のデザートのように私を魅了する。こどもが成長していくのを見守るということは、ほんの少し前までの幼さとこれから先の成熟とがともども小刻みに過去と未来へと向かわせて、その振動が見る者の胸をふるわせる。

小さいノックの後に音もなくドアが開いて、クーちゃんの顔が半分覗く。甘えているようで、でも遠慮がちなその表情が、私の心を瞬時に融かした。こんな甘い眼で見てくれる少女がいるというのは、なんてすてきなことだろう。たとえその子が自分の子でなくても、ごくたまにしか会えないとしても。

「セツコさん、お祭りに行くう？」甘えた微かな声があった。

クーちゃんは私のことを「セツコさん」と名前で呼ぶ。まだおしゃべりができないくらい小さい時からそうだった。理由はたぶん、母屋の奥さんが家族に私のことを話す時、「節子さん」というから。それでも奥さんの娘、つまりクーちゃんの母親は、直接私に話しかけるときは「山根さん」というのだが、クーちゃんをはじめのうち回らぬ舌で「チチトタン」と言い、それがゆっくり時間をかけて鮮明な「セツコさん」へと形成されていた。私は愛らしい「チチトタン」も至極気に入っていたが、いま八歳の少女から「セツコさん」と呼ばれて見ると、そこにある種ふしぎな、対等の女同士といった関係も感じられて、心がくすぐつたい。

ちようど陽が少し傾く頃合いで、祭はまさに最高潮の賑わいだった。小さい子どもを肩車している家族連れもいるし、友だち同士で遊びに来ている小学校の高学年、中学生もいる。手をつないだカップルの姿もあって、肘が触れ合うほどの混雑を楽しんでいるようだった。私もクーちゃんという連れのあることがうれしい。一人でここへ来たとしても、あまり楽しめなかっただろう。

本殿脇に小さな櫓が造られていた。見上げるほどの高さに板張りの床があって、簡単な舞台になっている。その中央に三、四人の男たちが固まっ

て、お神楽を奏していた。なんだか間延びのした、やる気があるののかないのか分からないような演奏だが、それでも祭にはなくてはならない効果音である。

クーちゃんはお母さんに貰ったお小遣いを握りしめて、屋台を物色するのに余念がない。買えるものは何か、できる遊びは何か、それを計算できる年齢になった彼女は、遠くの金魚釣りを横目ににらみながら、目の前の小さな指輪の値段を調べている。お金がたりなければ少し出してあげてもいいのだけど、当面は彼女自身の算段にまかせることにする。

「もうすぐ盆踊りが始まるみたいだ」

近くでそう言う声がした。本宮のこの日、踊りは一時、三時、五時と、あいだに休憩をはきみながら何度も行われる。明るい内はこどもたちが中心だが、暗くなると廂に提灯を下げた櫓が闇の中に浮かび上がって、なかなかいい雰囲気になる。クーちゃんは今年、その暗い盆踊りに参加したいと願っていた。

声に促されて、私は櫓を振り返った。そして中央の雛子の中に、お豆腐屋さんのドラ息子の姿を見つけて、少し驚いた。いつも言葉少なに豆腐を売ってくれる青年が櫓の中央で太鼓を叩いているのが意外だったからだ。

遠い祭

がすぐに思い直した。そういえば、あの息子は以前バンドに入っていたのだ。それをやめて家に戻ったのだと、母屋の奥さんは確か言っていた。

私のような素人考えではバンドと言えども洋風、祭のお囃子とは対極にあるような気がするが、考えて見ればどちらも同じ太鼓。習得するのに苦労はないのかもしれない。

櫓の下の方に十人ほど、揃いの浴衣を着てたむろしている女たちがいる。つい先ほどまではいなかったから、いまは間もなく始まる何度目かの上演のために、スタンバイしているのだろう。

クーちゃんが長い検討の後によりやく一つの指輪を選び終え、緊張した面持ちで重々しくお金を払ってしまうと、私たちはゆっくりと人混みを縫って、櫓のほうに近づいた。

まもなく踊りが始まった。スピーカーから大音量で唄が流れる。笛と太鼓の面々はといえば、止めてしまうわけでもなく、円形の舞台の中央に陣取って、スピーカーの音楽に合わせて軽く音を出している。その周囲を、まずは揃いの浴衣の踊り手たちが踊り始めた。お手本というわけだろうか。それに誘われるように、あるいは待ちかねたように、櫓の下でも人々が踊り始めた。その後につづく人がいて、やがて大きな輪ができた。

盆踊りというのを、私は踊ったことがない。生まれ育った郷里にも祭があつて、みんなはよく踊っていた。小学校の時から、同級生の多くにとつて踊りは大きな楽しみだったようだ。中学、高校と進むと、特に女の子たちは、浴衣を着て輪に加わり、周りを囲む観衆から眺められるのが、言うに言われぬ悦びであるようにも見受けられた。

けれども私は踊らなかった。なぜだろう。思い返してみる。はじめはただ気が進まないというだけだったのが、小学校の四年生の時、その頃仲の良かった子が、いっしょに踊ろうよ、ねえ踊ろうよ、と執拗に私の手を引いて誘った。その手を強く振りほどいた時に、自分で思っていた以上の力が入って、相手がちよつとよろけ、びっくりした顔で私を見た。しいて理由を上げるとすれば、その時の顔がいまも忘れられないということになる。

いまも、だから、私は踊らず、クーちゃんだけが輪に加わった。私はそれをずっと眼で追う。輪の流れに乗ったクーちゃんの背が遠ざかり、櫓の足組の向こう側を見え隠れし、やがて遠ざかったのと反対側からゆっくり近づいてくる。それを迎えるのである。クーちゃんは立って見ている私をみつめて安心し、少し恥ずかしそうに、また少し誇らしそうにほほえむ。その瞬間が、私はとても好きだった。

目の端でクーちゃんの姿を確認しながら、その一方で私はあちこちと眼をさまよわせた。ワンピースにサンダルで踊る娘たち、小さい子を肩車して腰だけでリズムを取りながら列についてく若い父親。そして眼を上げて、ねじり鉢巻きで太鼓を叩く豆腐屋の息子を眺め、その眼の先に鳥つ根の若奥さんを見た。お揃いの浴衣を着ているせいで始めは気がつかなかったが、彼女は舞台の上のお手本連中のなかに入って踊っていたのだ。

ああ、これがあの時スーパード話題になっていた……。私はそう思って、改めて踊る若奥さんを見た。同じ出立ちとはいいいながら、確かに彼女の立ち居は抜きんでていた。腕の上げよう一つ、足の出し方一つも他とどこか違うように思うのは、あの噂ばなしを聞いたせいだろうか。そうは思いつつも、しかしふしぎに引き込まれていく自分に気がついた。

あの人には何か周囲と隔絶したものがある、私はそんなふうに思った。踊っているのだから、絶えず手足を動かし、刻々に場所を変えているはずなのに、少しも騒々しいところ、ざわついたところがない。まるでそこだけ深い静寂が包んでいるみたいに、しんと静まりかえって見えるのはなぜだろう。その超越した静けさの中を、群れを離れた深海魚さながら、彼女はひとり陶然と踊りつづけているように見えた。

それから、ふいに気がついた。彼女の物憂げな、それでいてメリハリの利いた動きに、柔らかな太鼓の音色がびたりと寄り添っている。それを眼で追い、かつ耳で聞いていると、女のしなうような形と、男の脈打つリズムが一体になって、他にはなにも存在しないような気分になってくる。あのふたりは、それぞれが相手のためにだけ舞い、打っている。この世界には自分のために舞う女と、自分のために打つ男しかないように、感じているのではないだろうか。

そう思ったあとで、私はまた思い返した。踊っているのは彼女だけではない。演奏しているのも彼だけではない。誰でも踊れる単純な振りで、皆が二重三重の輪になって踊っている。誰もが知っている盆踊り歌のレコードに、お雛子の笛や太鼓が調子を合わせ気分を盛り上げている。みんながひとつのるつぽで解け合っている。それがたぶん盆踊りというものなのだ。そのなかで、一人の女の踊りと一人の男の太鼓を思うなんて、私はどうかしている。男と別れたことをまだ引きずっている、そう自分をたしなめた。

宵闇の迫る頃、私はクーちゃんを連れて家に戻った。クーちゃんは、もつと踊っていたと言ったが、これからおばあちゃんたちとお夕飯を食べべ

遠い祭

て、眠くなる前におうちに帰らなくてはならないのだからと、私はあらかじめ母屋の奥さんに言い含められたとおりに説得した。帰りの道々、お祭楽しかったねと言う私に、クーちゃんは「うーん！」と元氣よく答えた。

しかし私たちのお祭はそれで終わらなかったのだ。

夜も更けて、そろそろ寝る準備にとりかかろうとしている時だった。ほとほとドアを叩く音がする。もともと敷地の裏手に立っている離れのことから、押し売りもセールスも通り過ぎる。それでも日中なら、まれに訪なう人もないではないが、日が暮れてからのノックの音は私を少なからず緊張させた。そっと細めに戸を開けると、母屋の奥さん。まあそういえばそれ以外にはありえないな、とひと安心して、それにしても何事と、今度は心のレーダーの距離がぐっと身近に絞られる。

「夜分にごめんなさいね」奥さんの声はほんとうに申し訳なさそうだ。

「久美子がねえ、指輪を落としたって言うの。ぜったい神社で盆踊りしている時に落としたんだって言い張るのよ。それでもう一度行くってきかないから、私がついて行こうと思ったんだけど、私じゃわかんないかもしれないと思って」

そう言う奥さんの背中に隠れるように、ほとんど泣きべそをかいたよう

なクーちゃんの顔が覗いた。

クーちゃんは、お祭から戻ったあと、母屋のみんなと夕ご飯をたべて、さあうちに帰ろうという段になって「指輪がない！」と言い出したのだそう。最初みんなは訳がわからず、ない！ない！と騒ぐクーちゃんに一部始終を話させたが、それが混乱して大変だった。まずはママが服のポケットを始め丁寧に探したけど、やっぱりない。それからお祭で何があったか、いつ、どこで、その指輪を買って、どこにしまって、それからどこへ場所を移動して、何があったか、いちいち聞き出して、順序立てた。

「そんなおもちの指輪なんか、どうでもいいじゃないのって、言ったのよ、ママも私も。でもどうしても探すって、きかないの。それでね、しかたないから娘がいっしょに行って探すっていうことにしたんだけど、ひよっとしたら節子さんのほうがわかるんじゃないかって主人が言って。ほら、神社で何をどうやったか、どこを歩いたか、知ってるの節子さんだけだから。でも、ほんとにご迷惑な話だわよね」

奥さんの声には嘘いつわりなく申し訳なさそうな響きがあった。ど同時に、自分の手に余ることを順ぐり隣に送る、そう、ババ抜きのような狡猾さもうっすらとあって、この手にかかる私には奥さんには打つ手がない。

遠い祭

それに私としては、じつのところ、さほど迷惑ではなかった。ちよつとした夜の散歩。それに何より奥さんの背中の中のクーちゃん表情が、私がいっしょに来てくれることを切実に願っていた。その気持ち私にはわかるような気がする。彼女としては、お祭をめぐる一切を家族の外の領域で処理したかったのだろう。それは彼女の小さな自由と自尊心に関わる事柄でもあったのだ。

私は躊躇なく承諾した。奥さんもクーちゃんも一瞬、とてもうれしそうな顔をした。

ただ問題は見つかるかどうかだ。私とクーちゃんがその日に辿った道筋、そこで取った行動、それはちゃんと頭に残っている。確かに私しか知らないことだった。家に着いた後のことは、家族全員で考えて探したそうだから、それとつなぎ合わせれば、全体もれなく確認することはできるだろう。それでも見つかるかどうかは、わからない。ちゃんと探しても無い可能性はある。いや、そのほうが大きかった。クーちゃんと手をつないで神社へ行く道々、指輪がなかった場合の彼女の気持をどのように収めるか、私はひたすらそのことを考えていた。

祭はもう終わっていた。が、社務所には明かりが点って、なかで動く人

影があったし、手と口をすすぐ水槽を覆う小屋根の端にも小さな電球が光っていた。まだ完全に片付けの終わっていない境内の、おそらくは防犯の意味でもあっただろう。

昼間の賑わいとは裏腹の疲労感たどよう乱雑のなかを、私とクーちゃんは歩いてみた。このあたりで金魚釣りを見たよね、あっちがアンズ飴のお店かな、そんなことを言いながら、あちこちする。祭の後の境内は昼間の印象よりずっと狭くて、記憶のなかの配置をももう一度立て直して辿っても、すぐに終わってしまった。足下の地面を見て、昼に立ち止まったと思う場所ではぐると周囲を見回しても、めざす指輪は見つからない。商人たちがざっと片付けただけで、まだゴミの落ちている境内は、クーちゃんの眼と心にも何かしらの印象を染みこませたのだろう。つないでいる手から、当初の熱っぽい高ぶりが消え、それが少しずつ冷えた諦めに変わっていくのが感じられた。

最後にやったのが盆踊りだね、そう言いながら私たちは櫓に近づいた。昼間はひととき賑わっていた木組みの舞台も今は半ば闇に溶けて、何か恐ろしげだ。背後にある小さな林さえも実際より遙かに大きく奥深く感じられる。たぶん指輪はクーちゃんが輪に入って踊っている時にポケットから

落ちたのではないか、私はそう思っていたのだけれど、夜の神社に足を踏み入れた瞬間から、おとなの眼にも近づきがたく思われて、つい櫓の周囲を確認するのを最後に回した。

このへんからクーちゃん踊りだしたよね、思い出しながら、私とクーちゃんは櫓の周囲を円形に辿り始めた。しかし屋台が並んでいた場所とちがって、盆踊りの跡地には目に立つゴミは落ちていない。仄暗いなかを眼を凝らしてみても、小さな指輪が見つかりそうには思えない。

ないみたいよねえ、うん、そんなことを言い合いながら、裏手に回ろうとしたその時だ。私は柱の影に人がいるのに気がついた。ひとりではなく、びったり寄り添う、いや絡み合っているふたりだった。

私ははっとして立ち止まった。自分の驚きよりもクーちゃんのことを気づかっていたような気もする。かすかな、しかし激しい息づかいが聞こえる。抑えていても次第に高まるその密やかな吐息が私の胸を騒がせる。ふたりが身を身を凭せかけている柱が小刻みに揺れ始めた。小さいのに臆面もない、われを忘れて止めようもない揺れだった。

私は思わずクーちゃんの手を握りしめた。柔らかく温かいその手がの感

触が、なぜかひどく胸に堪えた。

「もう帰ろ」

隠しようもない緊張をクーちゃんも感じたように、「ん」と小さく答え、踵を返す私の動きにすなおに従った。

境内を足早に突っ切って鳥居に近づくまで、私もクーちゃんも黙ったままだった。クーちゃんは何と思っただろう。そのことに初めて心が向いた時、私の手を握るクーちゃんの指に力が入って、

「暗くて怖かったの？ セツコさん」

こどもながらに精いっぱい優しさをこめたその声に、張り詰めた私の気持ちちはどっと崩おれた。

「ごめんねえ。びっくりした？ セツコさん暗いところ嫌いなよ」

われながらだらしなく、ちよつと声がぐもっている。

「だいじょうぶよ。私がついてるから」

クーちゃんは明るく私を励ますように言って、今度ははっきりわかるように私の手を握って振った。

まだ煌々と明るい商店街を私たちは安心と懐かしさの眼で眺めた。そして探索と冒険に失敗して帰途につく二人の冒険者のように、旅の不首尾に

ついて語りあった。

「指輪なかったねえ。すごくきれいだったのに。クーちゃんくやしい？」

「キラキラ光ってたから、地面に落ちててもわかると思ったんだけどなあ」

「来年また買おうよ。もつときれいな。こんどはセツコさんが買ってあげる」

「うん！来年また買う！」

家ではおばあちゃまとママが心配顔で待っていた。その彼らにクーちゃんは、

「なかった。でも来年のお祭でまた買うことにしたんだ。もつとずときれいな。あのね、セツコさんがね、暗くて怖くなっちゃったから帰ってきたの。私がいつしよなんだからだいじようぶなのに」

クーちゃんの言葉に、おとなは声を合わせて笑った。

第五章

鳥つ根の若奥さんが家を出たのは祭の後だった。つまり祭の日、夜になっても家に帰らなかったのだった。

終日店に出ている彼女は、いつてみれば鳥つ根の顔。その姿が突然消えたことは客の注意を引かずにはいなかった。まして周囲は根を生やしたように永年近所づきあいを続けてきた商店街で、出入りするのは噂好きな主婦たちである。彼女の出奔はあつという間に人々の知るところとなった。

この件について、どれほどの立ち話、どれほどの井戸端会議が持たれたか、私は知らない。しかし祭が過ぎて二日目か三日目の夕方、私が帰宅してドアに鍵を差し込むやいなや、待ち伏せでもしていたように、母屋の奥さんが姿を現した。

「ねえ節子さん、聞いた？ 鳥つ根の若奥さんが家出したっていう話」

「あ、いえ、知らないと思いますけど。いつのことですか」

私は用心深く、ちょっとあいまいな返事をした。まず聞いたか聞かないかが判然としない。もしかしたら、ずっと前に聞いたことで、私が忘れていただけかもしれない。母屋の奥さんが相手だと、ほんとうに、そういうことがままあるのだ。ああ、前に言ったじゃないの、と言われて、そういうば聞いたかも、ということが。

「こないだのお祭の日。ほら、久美子が指輪落としたってたいへんだったじゃない？ あの日かな。もしたかしたら、その次の日。あら、どっちだったかしら。ちゃんと聞かなかったわ、私」

自分としたことが……。奥さんはちょっと慌てた。

「とにかくね、家を出ちゃったのよ。店もほっぽり出して。ほんとに無責任な話よね。まだ小さい子もいるっていうのに」

「ああ、いましたねえ、こども。女の子がたしか」

私はカウンターの下から「いらっしやいませ」と言った柔らかな声を思い出していた。あれはいつのことだったろう。

「それと弟もいるの。上の女の子がたしか久美子よりひとつ下で、いま二年生だったと思うわ。下の子はまだ幼稚園よ。まあ、手が離れたと言えば

言えるけど、でも母親がいなくていいっていう歳じゃあないでしょうが」
奥さんの声に非難がましい響きが混じって、尻上がりに高くなる。噂ばなしもいよいよ佳境に入る印だ。

「それに店だってたいへんよ。これまでほとんど若奥さんひとりでやってたんですもの。そりゃ、仕入れとかお金のことなんかはご主人が、あの前の人じゃなくて、いまの若い方の主人がやってたらしいけど。でもお店で忙しいのは店番でしょう。それも、みいんな、放り出したんですって」

みいんな、と奥さんは声を張り上げ、胸を反らして、上から私を見る。

見られた私は、理由もなく、申し訳ない気分になる。

「お店どうしてるんですか」

お得意さんとはいえないにしても、気に入って時々は通っていた店だから、私にもまんざら無関係なことではない。

「しかたないから、奥さんが、つまりお姑さんの奥さんが店に出てるの。でも慣れないもんで、たいへん。あの人も老けたわねえ。お釣りひとつ出すのにも時間がかかって、かかって。それにほら、なじみのお客さんに長々愚痴ったりしてるから、ますます時間がかかるのよ、困ったもんだわ、まった。今日なんか、さばききれないお客さんが店のなかで押し合いへ

し合いだったわよ」

それはおそらく、噂を聞きつけた好奇心旺盛な人がみな、今晚のおかずを鶏肉にしたせいではないか。

家出の理由について、人々があちこち触覚を動かしたのであることは想像に難くない。ありそうなところでは主人の浮気、嫁姑の不仲。外から見ている限り、どれも当たっているともいえないとも言えそうなものばかりだ。嫁と姑はどちらも気が強くて、人前でも時に激しい口調の応酬があった。夫が近くの下高井戸の Snackbar に入りびたっているということも、この私でさえ母屋の奥さんから聞いて知っていたくらいだから、近所では周知の事実だったにちがいない。しかしそれが妻が家出するほどのおおごとかといえ、なるほど、それだ、と頷く者はなかった。そこでみずから鳥屋に赴いて、当事者かもしれない姑に当たって真相を探ろうとしてみるのだが、どうもはかばかしい成果は得られない。そうした野次馬の一人、いやもう少し踏み込んだ街角リポーターである母屋の奥さんにしてからが、何ひとつ収穫なしに帰ってきて、こうして私に報告しているのだから。

「おばあちゃんのぼやくことぼやくこと。いまさら店をやれたって、この年じゃ動けやしないよって、あのおばあちゃん。ほんとになんで家出な

んかするのかねえ、わけ分かんないだって。

「そしたらね、ほらあの薬屋のおばさんが、だれか男がいたんじゃないのって言ったのよ。知らない？ あの髪を染めてる若作りの人。薬屋のくせに髪染めるなんて、どうかと思うでしょ。あの人ほんとに図々しいの。ふつう聞けないわよね、男がいたんじゃない、なんて。なのに平気で聞くのよ。そんなふうだから、あの薬屋、行きたくないんだわ。聞かれたくないことずけずけ聞くから。そしたら鳥つねの奥さん、さすがにむっとしたのね、いえ、それはないわよ、ってきっぱり言ったわ。いちんちじゅうここか家で、外に出ることもなかったし。でもねえ、だからなおのこと、わけわかんないのって。ほんとに」

鳥屋の姑の「わけ分かんない」に同調して首を振り振り、母屋の奥さんはその日、夕飯の仕度をつづけるために台所に戻って行った。

鳥屋の若奥さんと同じ時に、豆腐屋の息子も姿を消していた。

しかし、こちらのほうは何の噂にもならなかった。いや、誰も気がつかなかったと言っている。

そもそも、豆腐屋の息子がいなくなったことは、母親さえあまり深く考えなかったのである。彼はそれより数年前、学業を中途に家出していた。

つまり両親の了解を得ず、今後の見通しも説明せずに家を出たのだった。そのときはさすが母親も悲しみ、うろたえて、近所の人やなじみの客、つまりうちの母屋の奥さんなんかには、愚痴をこぼしたらしい。

「まあねえ男の子も二十を過ぎれば、立派に一人で生きていける歳だから、っておばさんは言ってたの。でもねえ、父親が死んで店がどうなるかわからない時に、一人息子に出て行かれたんですもの、それはつらかったと思うわよ。もともと大学に進学させる決心をした時、店のことは諦めてたけど、っておばさんは言ってたけど、でもねえ」

そう母屋の奥さんは以前、私を相手にしみじみ話したことがある。私はいえ、その豆腐屋については私なりの思いがあったものの、そこに住む人間のことまでは興味が湧かなかったので、ほとんど聞き流している状態だったのだが。

その家出息子が、ドラマーとしてなんとかやっていることがわかったのは、家を出てから数ヶ月後のことだった。息子がひょっこり帰ってきて「ドラムで食ってる」と言ったそう。そのとき母親は、ドラムで食うということがどういうことなのか、さっぱりわからなかった。がともかくも食っていると云うからには、心配したように悪い仲間に入ったりしていたわけ

はなく、何かしら働いているらしいと、ひとまず安心した。

「おばさんたら、ドラムが何だか知らなかったんですってよ。で、ドラムって何さって聞いたら、太鼓だよって。太鼓をどうすんの？ 叩くんだよ、って。おかしいわよね、おばさんたら、太鼓叩いてお金が貰えるのかねえ、なんて言ってるの。どうすれば、そういう仕事につけるもんかねえ、だって」

豆腐屋のおばさんが抱いたその疑問は、じつのところ、母屋の奥さんにとっても解答が見つかからない問題であったし、笑って聞いている私にしても、聞かれてすぐに返事のできるような事柄ではなかった。

人は如何にしてドラマーになるか。

それはともかく、ひょっこり戻った息子は、ほんの数十分家にいて、またすぐ出て行った。しかし今度は家出ではなかった。どこにいるのか、何をしているのか、詳しくは知らないなりに、いまは母親は息子に関して、これまでとまったく違う精神状態でいることができた。それは言ってみれば、心の奥の影の部分から明るい日向に出たようなもので、客や知人の誰彼から息子について聞かれれば、「ドラム叩いてんですよ」と胸を張って答えることができる。それはとても、とても、大きなことだった。

やがて病気の父親が死に、さまざまな経緯をへて豆腐は売り物にならないほどにまぶくなった。しかし息子は家に戻らず、ドラムを叩いていたらしい。とはいえ時々家は足を向けることもあって、言葉すくなく近況を報告する。ずいぶん身勝手な息子だが、それなりに母親の身を案じていたものだろうか。隣近所や店の客たちは、豆腐や納豆を買うついでに母親の口から息子の活躍しているらしき自慢を聞きかじり、それがどの程度のものかは半信半疑だったが、でもドラマーといえはいわゆる芸能人の端くれ、それはこの住宅街ではあまり出会うことのない人種なので、あれこれと噂が伝わってはいたのだった。

その息子がまた家に戻ってきたのが一年前のことだ。最初の家出から三年の月日がたっていた。母親にとつて、これはめでたいような、めでたくないような、微妙な出来事であつたらしい。ドラムで食つてはるはずの息子が帰ってきたということは、つまり、ドラムで食えなくなったということなのか。が彼はそのへんのことを詳しく語ろうとはしない。黙っている息子を問い詰めような母親でもない。だが、息子の活躍を多少自慢げに話していた彼女にしてみれば、息子が家に戻つたのは失敗したからに他ならず、それはこれまで自慢した人たちに対してちよつと面目のないことでもあつた。

しかし彼は何も言わずに稼業を手伝い始めた。そして小さい時から親の動きを見慣れていた仕事を少しずつ復旧し、数ヶ月のうちに自分で豆腐を作るようになったのである。

その豆腐が、意外においしかったのだ。豆腐屋の青年の個人的な事情については、私も母屋の奥さんの立ち話を通して知るばかり、そしてその講釈には多分に彼女自身の想像と独断が混じっていたにちがいないが、豆腐の味については自信をもって言うことができる。それは確かに、非常に深い味わいのあるものだった。

豆腐のおいしさ、不味さなどたいしたことではないと言う人がいるかもしれない。いてもふしぎはない。私もずっと以前はそんなふうに思っていたような気がするし、今だっておいしい豆腐を探し求めて歩くほどの執念は持っていない。しかし、勤め帰りに買うにはそこしかな一軒の豆腐屋で買いつづけ、その味が上下に変動するのに否応なしに付き合わされた結果、まぎれもない事実として、この世にはおいしい豆腐と、まずい豆腐が存在することを知った。私は豆腐のおいしさ、まずさに通暁することができたのは、ひとえにこの小さな商店街の豆腐屋の家庭の事情を通してであつた。

おいしい豆腐は見た目の肌合いがよく、口にふくむとほのかな香りがある。これ以上でも以下でも良くないという固さのなかに、絶妙な味が包まれている。そのどれもが行き過ぎてはいけない。足りなくてもいけない。この一点がまさに芸術なのである。そして驚いたことに、豆腐屋の息子が作る豆腐は芸術的な一品だった。それこそは才能というものではないか。そして私はドラムに関してはいままでの無知だけれども、こんな豆腐を作る人間がドラムを叩くとしたら、それは決して味わいのない響きではないはずだと思えてしかたがないのである。

出来にムラのない、おいしい豆腐を売るようになって、商いはしつかりした。母親にとっては、もちろん、うれしいことだった。

その息子がまた家を出た。そしてその事実には人に知られることがなかった。

知られなかったのには幾つかの理由がある。第一に彼自身、近所とのつきあいが少なく、ほとんど存在を認知されていなかった。商店街の若い者と遊び歩くわけでもない。いつも家にいて豆腐を作っている。豆腐作りという仕事とはまだ暗いうちに始めて、人々が朝食を取る時間にはもう出来上がっていなくてはならない。息子は午前中はぶらぶら休んで、午後にな

ると店に出たが、客に愛想を言うわけでもなく、ただ言われた品を出して、札に書いてあるとおりの少ない金額を受け取り、場合によっては釣り銭を出すだけだったから、さして口をきく必要もないのだった。私も会社帰りに豆腐を買いに寄って、たまたま母親ではなく息子に売ってもらうことがあったからよく知っているが、彼は客が店の前に立つか、あるいは声をかけると、のっそりと姿を見せるだけで、いらっしやいませ、と口に出して言うわけでもない。いや、言っているのかもしれないが、それは口のなかで不明瞭な音がこもるといった感じのもので、耳に印象を残すような挨拶ではなかった。口は聞かないが、彼は相手の目をじっと見る。それはほんの一瞬のことだったが、とても心に残るまなざしだった。そんなまなざしで、注文を理解し、金のやり取りをする。そこにことばは要らないのかもしれないなかった。

彼がいなくなったことに人が気づかなかった第二の理由は、母親がそれについて語らなかったからである。母屋の奥さんのレポートもそうだが、これまで豆腐屋に関する情報の一切はおばさんのおしゃべりによって外に伝わったのだった。しかしこの時は、母親は何も言わなかった。

もしかすると母親も事態をどう捉えていいか、わからなかったにちが

ない。数日、家を空けているだけなのか、また戻ってくるのか。最初の家出の時のように、いつかふらりと帰ってきて、いま、どこで、どうこうしている、ことば少なに報告するのもかもしれないし、そうでないかもしれない。前に家を出た時も、ドラムを叩いていると告げた時も、豆腐を作ると決めた時でさえも、息子は母に相談などしなかった。ただそうしただけだった。そんな息子を、母はだまって見て、何も言わずに受け入れたただけだった。

母が何も語らなかったのは、多少は面目なかったからでもあるだろう。これまでもいろいろあって、そのどれもがばつとしない首尾に終わっていたから、今度の家出も、向こうから聞かれもしないのに進んで話したいことではなかった。だいいち、ほんとに家を出たのかどうかだって、わかりやしないんだから、と母は思った。明日にも帰ってくるかもしれないし、母親とは大方そんなふうに考えるものだ。どのような巣立ちであれ、母は子どもが家を出たことを、ほんとうは信じていない。彼女にとってはその間の不在でしかない。

そして人々に気づかれなかった最大の理由は、同じ時期、鳥屋の若奥さんが家出したからである。こちらはもう、翌日から噂にならずにはいなか

った。ほとんど騒動と言ってもいい。いつも店に出て、客あしらいが良いかどうか、そこは見解が分かれるにせよ、いざれ言動の派手な女盛り。姿が見えなければ、誰もが気づく。親しい主婦なら、あら奥さんは？ と訊ねないわけはない。すると急場に助っ人を頼まれた姑が、心配と憤懣をなやませにして、こうなんですよ、そうなんですよ、としゃべらずにはいない。しゃべりたくなくても、何か答えずにはすまされない。こうして噂はまたたく間に広まり、私に近い例を持ち出せば、さっそく母屋の奥さんの夕方のレポートとなり、翌日のゴミ出し会議の議題になった。

とはいえ鳥屋のほうでも、真相はさほど明瞭だったわけではない。

一番の身近であるはずの夫は驚き慌て、途方にくれて母親にすがった。が、「いったいどういうわけなのよ」と詰問されても、筋道のおった説明ができなかった。気性のしつかりした母親は、妻が家を出るについてはまずは夫に非があると考えるのが道理だと思ったが、姑である自分にも後ろめたいところがぜんぜんないかといえ、そうとも断言しかねる。事実もって若い頃には嫁と自分との確執で息子が自分に文句を言ってきたこともあったから、彼を一方的に追求するの何となく矛先が鈍る感じだ。で客に対しても、「まったく、わけわかんない」と彼女の年齢にしては妙に

若々しい感想で締めくくらざるをえなかったのである。

まことに数日というものの、町内はその噂で持ちきりだった。日頃は近所づきあいにもちよつと距離を置きたがる山の手の住宅街だったが、こういうことがあると、奥様たちの親しさはとたんにふくれ上がる。ゴミ出し、子どもの見送り、買い物帰り、一日の小さな活動のたびに、顔を合わせればついおしゃべりが始まり、きまって、あのこと、についての情報交換になり、ついでに「昨日ね、…」という些細な出来事の報告になり、「ああら、そうなの、知らなかったわ、ありがとう」となって、要するに皆が皆、母屋の奥さんになってしまったのである。

ご近所にはいつもにない活気があった。気のせいかな、すれちがう奥さんたちの表情が晴れやかに見える。事件というものは（といっても、この段階ではまだ、ほんとうの事件ではなかったのだが）人々を元気にし、幸せにするものらしい。テレビが事件を扱うのも当然なのだ。

しかし、わからないことには人はすぐに飽きる。そしてこの出来事には、驚いたり呆れたりするに十分なほどのものが何もなかった。なにしろ家族さえ「わけわかんない」のであってみれば、その先を他人がどうして知り得ようか。

それに、驚くべきことではあったが、考えられないことではなかった。家にしばられ、家事と育児と店の仕事に疲れた中年の女性がすべてを放り出したくなるというのは、理解できないことではない。苦勞してるのに、だれにも正当に評価されない。それどころか、ぐうたら遊んでると思われるのだ…。

「あたしだって、家出したいと思ったことあるわよ」

「ま、結局やらないけどね」

「勇気がないっていうか…」

「勇気より甲斐性かも」

「そうよねえ、自力で生きてくの大変なもの」

「一人じゃなくてもいいじゃない」

「なら、まず誰かみつけないきゃ」

「でも、そっちのほうがもっと大変よ」

「まったく。こう所帯じみてしまっただけね」

「がんばりましょ、おたがいに」

そこで彼女らはお腹を抱えて大笑いする。が、

「やっぱり子どもよ。放り出してはいけないもの」

「うん、それはそう」

子どもがいる主婦にとって、それはすべてをする、あるいはしないの言い訳になりうる大義名分だ。こうして彼女たちは自身の確たるアイデンティティを再認識して、心頼もしくそれぞれの巣へと戻っていく。

人の噂は七十五日といえけれど、鳥屋の若奥さんが家出したというこの噂は、一週間と保たなかった。

そしてすべては退屈な平穏を取り戻した。

その間も、私個人の生活はまったく変わり映えがなかった。いや、微妙な変化はあったけれども、人の話題になるようなことはまったくなかった。

私は編集部の部長になっていた。部長といえば聞こえはいい。だがそれは、会社の組織が変わって、真上の上司であった部長が名目上、取締役に上がったというだけのことで、出世したとか、偉くなったということではなかった。

そもそも時に十人を割ることもある小さな会社だ。長いこと辞めないでいると、上にいた人が一人また一人と去っていく。するとその空気に押し

出される。それは緩やかな流れに乗っているのと変わらない、いわば自然の成り行きのようなものだった。それともそれを世間では出世というのだろうか。私はといえば、部長という肩書が面はゆくて、名刺もほとんど使わなかった。もつとも、使わなければならない状況もそうはなかったけれど。

仕事の内容だって、たいして変わったわけではない。たいいていのは一人で処理できるようになったが、わからないことや判断に迷うことがあれば、元部長の取締役のところ相談に行く。私がヒラの時は課長で、私が課長代理だった頃は部長、そしていま取締役である沢田さんは、時には私が相談に行くのを喜んでいるふうに見えた。相談にかこつけて、私も世間話で息抜きをする。わが社の人間関係はそこそこ良好と言えるのではないだろうか。

もう少し言うなら、月給が上がった。じつのところ、思いの外に上がった。後にバブルと呼ばれることになる時代で、私はそのことに気づいていなかったのだが、およそ金銭に関わる数字が風船玉のように膨らんだ時代だった。でも私は昇給が役職の変化によるものなのか、そのままのポストにいても徐々に増える額なのか、いまいち判断できなかった。いずれにし

ても世間的には自慢できるような華々しい給与ではないはずだ。それでも私には十分だった。銀行の口座に入ってくる給料は、月々には使い切れずに残って、いつのまにかまとまった額になっていた。びっくりもしたし、うれしくもあった。

貯まったお金をふつう人は何に使うのだろうか。周囲を見回して想像するに、女だったら服やアクセサリーでおしゃれをする。男ならつきあいに使う。旅行やゴルフをするというのもありそうだ。私も洋服を買わないわけではないし、誘われれば誰彼とつきあわないわけではないが、それもさほど頻繁ではなく、そのためにもっとお金がほしいと思ったことは一度もなかった。

たぶん、大学を卒業して就職した時からずっと同じ離れに住み続けたのも、経済面では良かったのだ。なにしろ家賃が上がらなかった。家が古くなっていくのに、家賃だけ上げるわけにいかないもの、というのが母屋の奥さんの言い分で、考えてみると、そうは思わない家主もいただろうし、何より関係が悪化して出ていきたくなくなることもあっただろうから、最初にここを選んだのが幸運だった。

家はたしかに前より古くなった。しかしこの離れは母屋よりかなり後に

建てられたから、当然ながら母屋のほうがもっと古くなっている。それでもちゃんと使えているので、私としては自分の小さな巣がさして古びたとも感じないのである。

窓にガタがきて、新しいサッシに変えたことがあった。夕方の世間ばなしのついでに、雨が染みこむと言ったら奥さんが、あらあらそれは大変と言って、母屋の差配で今風のサッシになった。経費は家主持ちだった。木枠の窓でなくなるのは、私には少し残念なことだったが、物件の持ち主のすることなので、文句は言えなかった。

マンションに移り住むこともできないではなかった。勤め始めて十年ほどの年月が過ぎた頃から、勤め先や大学時代の知人友人が、マンションを買ったり引っ越したりし始めた。それにつられて新聞の折り込みなどを眺めてみれば、新しくて美しい2LDKの写真があふれんばかり。そこに書かれた頭金だの月々のローン返済だのの段取りでは、手が出ないというわけではなかった。

しかし、どうしてもその気にならなかったのは、おそらくこの地域と、そしてこの離れに、いつのまにか馴染んでしまったからにちがいない。新築マンションなるものに鎮座している自分を想像してみても、あまり居心

地がよさそうには思えないのである。より良きものに向かってでなくては、人は変革に向けて跳躍する力が湧いてこないものだ。

あまつさえ母屋の奥さんは、「節子さんが結婚するときは、うちからお嫁入りしてほしいわ」などと言うようになった。初めてそれを言われた時、私は親身な言葉か、それとも皮肉か嫌みか判断できなくて、思わず奥さんの顔に見入ってしまった。だがどうも悪い気持ちでいるようではなく、それどころか、いつもになく潤んだ目元をしてるように見えたので、ただバツの悪い心持ちでうつむいてしまったものだ。

結婚……。たしかに世に言う結婚適齢期を私はいつのまにか通りすぎてしまったらしい。二十八のときに杉原とつき合い初めて、その六年後に別れるまでが、いまにして思えば私の適齢期だった。その時はそうは思わなかったし、結婚という世間並みの事態から最も遠ざかっていると思い込み、じじつ客観的にはそのとおりだったのだが。なぜといって、そのとき自分にとって唯一の男性である人とは結婚の可能性は皆無に等しかったし、伯母たちが持ち込んできたがる縁談も、かたくなな態度で無下にはねつけていたのであったから。

婚期を逃した女、そんなふうに自分のことを思ってみる。そこには何か

しら个性的で新鮮な感覚もあって、別段みじめとか心残りの気持ちではなかった。たぶん適齢期と人の呼ぶ人生の花盛りに、私は私なりの花を咲かせていたのだ。その咲き具合は、私自身にとっては納得のいく花盛りだった。

私はたぶん、世間の目には、行き遅れの寂しい中年女になりつつあった。だが内面的には、それまでで一番豊かで、不安のない日々を過ごしていた。

もちろん自ら課したルールのようなものがないわけではなく、快調な活動も平穏な精神もそれら自分相手の単純な約束事におおきく支えられている。

たとえば規則的な生活をする。これは会社暮らしをしていればいやでも守らずにいられない。あとは……、夕食の仕度はできるだけ丁寧にする。新鮮な食材を少しづつ、でも種類多く買い求め、なるべく早く使い切る。これは言うに易しいが、なかなか難しい課題だった。なぜなら新鮮なものはその日その季節のメインの収穫だから、とかく大量に売られがちで、安いのはいいけれど、使い切るのに頭を使う。同じ野菜を茹でたり炒めたり、手を変えて調理すると、種類多くの条項に反するし、第一厭きがくる。そのへんのやりくりをめんどうがらずにするのは、時に片足でバランスをと

遠い祭

り続けるような、微妙に神経の要るゲームだった。

一人分の食事でもまた作りにくいもので、たいていは二人分作って二度に食べることになる。そして早く食べ切るためにはお弁当にするのが得策だった。ふしぎなことに、私は夕食を二日つづけて同じ料理で食べると気持ちが萎えるのだが、お弁当にすると前の日に作ったものでも気分が変わっておいしく食べられる。出先で自分の味に出会うのも、妙な言い方だが、懐かしくてホットする。

お弁当のおかずの良い食材となると、鶏が一番だった。煮ても焼いても、冷めてもおいしい。小口に切れて箱に詰めやすい。魚も肉も嫌いではないが、お弁当のことを考えるとどうしても鶏の料理が多くなった。

そういうわけで、会社帰りに鳥つ根に寄る習慣は相変わらずつづいていった。

鳥つ根では、若奥さんが始めて仕切っていたチキンロールやつくねなどの惣菜カウンターはやめてしまったが、生の鶏肉は姑の奥さんが店に出て商っている。昔を知っている年配の客のなかには、そのほうを喜ぶ人もいて（じつはうちの母屋の奥さんもその一人だ）、客足が落ちるということもなく健在だった。

「おばさん、よく頑張るわねえ」

客が愛想を言うのに、

「年ですからねえ、もう大変」

元気に答えている。思いなしか以前より若返ったようでもある。年を取ってやることができたのが幸せだったのかもしれない。「大変」ということばと裏腹に、老女の顔は場を得た張り合いで生き生きしていた。

店の奥には若奥さんがいた時と同じように、こどもたちの気配があった。と、澄んだ高い声が、

「宿題はちゃんとやったの？ 学校のお知らせは忘れずに見せなくちゃだめよ」

と言っている。若奥さんが子どもたちに向かって話していたのによく似たその口調に私はびっくりした。がそれは姉娘の声だった。姉が弟にむかって言っているのだ。それをチラッと振り返って、おばあちゃんは、

「母親みたいに面倒見るのよ。まったく、子ども放っぱりだしてどうしようもない母親なのに、そのぶん娘がしっかりしてる」

声をひそめて言ったが、ちいさい娘は聞き逃さず、キッと振り返った。若奥さんによく似た眼が薄闇に光って祖母をにらんだ。

「母親の悪口を言うのと怒るの。怖いのよ」

おばあちゃんは何も肩をすくめて、客に釣り銭を差し出した。

その日は鳥のもも肉を照り焼きにした。帰宅してすぐ、着替えをするより先に鶏肉を醤油につけ込む。そうしておいてから洗濯物を取り込み（できるだけ陽に当てたいのだが、会社から戻る頃にはどうしても陰ってしまふ）、バッグから仕事関係の雑物を取り出して明日の準備をし（食事をし、特に少量のアルコールが入った後では明日の手順を整えるのが面倒で、良い加減になるから）、その後でキッチンに向かうと、鶏肉にはちょうど良いあんばいに醤油が染みている。醤油は染みすぎてもいけないし、薄すぎてもいけないのだが、正直のはなし、ちょうど良いことは稀である。でもそれでいいのだ、人に食べさせるわけではない、食べるのは私なのだから。ごま油をしいて鶏肉の皮に焦げ目をつけながら、私は鳥つ根のちいさな女の子のことを思っていた。鳥屋さんにきれいなお嫁さんが来たのは、私がこの離れに越してきた二年後くらい。その次の年にはもう赤ちゃんが生まれた。だとすると、女の子はいま十歳か十一歳か。たぶん母屋のクーちゃんと同じ年頃のはずだ。

まだあどけなさを残している小学校の四年生が、二歳年下の弟の母親代

わりになっている。そう思うと胸がいっぱいになった。かわいそうという気持ちもあったがそれ以上に、女の子の健気さに感動しているようでもあった。母親の家出はどれほど大きなショックであったにちがいないのに、それを必死にこらえて、幼い弟を支えている。あるいは弟の母親代わりと勤めることで乗り越えようとしている。少女のそんな気丈さが痛々しくて、胸がいっぱいになった。

杉原さんの噂を耳にしたのはその頃、つまり鳥つ根の若奥さんの家出騒ぎがどうにか落ち着いて町が平常の顔を取り戻し、毎日のお弁当作りが私の重大関心事という、じつに凡庸で平穏な時期だった。

晩の料理はそのままお弁当のおかずになるから、夕方の買い物は翌日の昼のためもある。その微妙な経路を辿って、鳥屋の家庭の事情は私という人間の外に向いた部分にまで通じていたようだ。ある日、鶏の照り焼きを一切れ失敬した水野くんが「うん、おいしい」と頷いたら、まるでその顔と対をなすように、母親代わりの少女の顔が浮かんできた。自分でもびつくりした。ふたりが似ていたわけではない。と思う。そういうことではなくて、一方が他方の陰画であるような、あるいは私の気持ちのバランス

遠い祭

を取るために両方で明と暗、陰と陽のように一体になっているのかと、その時はそんなふうに自分の心の反応を分析した。

それは私の周囲のいろいろな事象が集まって網の目のように総合的な構造を持ちはじめた時期だった。状況そのものが変わったわけではなく、私のものを見る目が変わったと言わなければならない。人によっては、それを、おとなになったと言うのだろう。

私の個人的な状況と、私には直接関係のない事柄とが奇妙に絡み合って、ひとつの景色として構成されていく。それはまるで山を登っていて、辺りが深い木立であるときは自分の位置さえも定かでなかったのが、細い道を抜けて峠に出たとたん、さあっと展望が開けるようなものだ。いままでも自分の足元だけをみつめて登って来た細い道、その道に隣接していたのに見えていなかった崖下の谷川、それだけでなく、すぐ近くにある小高い山の頂きや遠くの峰々が一望に見渡せる、それに似ている。

そうした近くまた遠い景色に囲まれて、そのただ中のこの一点に立っているのが自分だ。いわば立ち位置そのものが自分。そう考えると、いま登ろうとしているわけではないし、この先も一生登ることはないかもしれないあの遠い山も、私に私というもののありようを教えてくれていると言う

ことができる。

とすれば私はただこの小さな一点に立っているだけでなく、この広大な景色、天地そのものではないか。いま私がここにいるから、この地点まで登ってきたから、この景色が存在する。

そのように私は、私という殻を抜け出して、私の周辺というもっと広くて不定形の空間に拡散しているように感じ始めていた。そしてそんな視点に立って見ると、かつての自分には見えていなかった自分と、その時の自分の立ち位置とが明らかに、切実に感じられるような気がするのだった。峠からいま来た道を振り返って、あんなところを歩いてきたのだとはじめて自分の行程を確認するように。

ある決裁を受けるために沢田さんを訊ねたときのことだ。沢田さんは今は常務になっていた。偉くなったといえばその通りだが、この私も編集部長だから、肩書きと仕事内容は変わっても関係は変わらない。顔を見てみると、昔を思い出してほっとする部分もあった。向こうもそんな気分だったのだろう、用事が終わってドアに向かった私の背に、

「そういえば先週、杉原に会ったよ」

と声をかけてきた。突然のことで、私の心のなかを稲妻が駆け抜けたが、

すでに顔をドアに向けていたおかげで、一瞬の間をとることができた。ゆっくり振り返った私に萩原さんは、

「大学の同級会だったんだ。おたがい出たり出なかったりで、彼に会ったのは何年振りかなあ、相変わらずなんか青年ぼくてき、ふしぎな男だよ」私と杉原さんの関係を知らないはずだが、こういう顔をしたらいいのか、私はたぶん間の抜けた笑顔だったはずだ。

「彼、奥さんが東京に戻ってきただろ、あ、知らない？ 杉原の奥さん厚生省の有能な女性官吏なの。女性進出のトップランナーみたいな人。で三年だったかな、単身で海外赴任してたんだよ。ロンドンだったっけな。そういうやあ、君がよくあの研究所に行ってたの、ちょうどその頃じゃなかったっけ」

杉原さんの奥さんが東京に戻ってきたって？ 私の頭のなかを、自分が知っている幾つかの事柄と、知っていると思いきやこんでいた事柄とが交錯して絡み合った。彼の妻は病気で入院していたのではなかったのか。杉原さんが嘘をついていた？ それとも私の思いちがい？ 頭のモニターには激しい混乱の波線が映し出された。けれども今、記憶はすでに摩耗していて、自分がそう思った時の彼と私の会話を正確に再現することができない。た

だ混乱を堪えながら、明白な事実をいささかの疑いもなく語る沢田常務の声を聞いていた。ありがたかったのは、それらが私のまったく知らないことだったからだ。知っていることだったら、知らない顔をするのに苦労したかもしれない。

「ああ、そうなんですか？ 知りませんでした」

と私は答えていた。その通りだったし、それ以外に言いようはなかった。

「あんな男だからそういう有能な女性のパートナーが勤まるんだよねえ。僕なんかぜったいむりだな。考えるのも怖いよ、自分より偉い女房なんてさ。家に帰ったって気が抜けないじゃない。かといって浮気もできやしない」

そういえばあの時杉原さんは、異動になった、とだけ言った。とても端的なことばだったが、今にして思えばどのようなにも取れる、いやレインボーカラーのようにさまざまな意味とニュアンスに変換できる言い方だった。その言葉から私は単純に、彼が研究所を辞める、と受け取ったのだった。そしてそれはあながちまちがってはいなかった。私は杉原さんの言葉を、彼が異動になり、どこかへ転勤して、これまでのように逢えなくなる、と敷衍して理解したが、しかし彼自身がそう語ったわけではなかった。私

はただ、これまでのように逢えなくなるという一点だけを、むしろ心情的なレベルで受け止めていた。それは話している彼にとってもそうで、その意味で、私たちの会話は真実で誤解の余地のないものだった。他にも何か聞いたような気がするけれど、でも彼が何を、どこまで、どのように話したのか、いまとなつてはもう正確なことを思い出すことができない。

ある意味、嘘とか真実というのは単なるフィクションにすぎない。たとえば広野を走る一本のレールのようなものにすぎなくて、その他の多くのものごとは、そこから少し外れたところに散在している。たいていの事柄は嘘であつて、同時に真実でもあるのだ。あるいはそのどちらともつかない空漠とした領域にある。

杉原さんのことばも、もし私が彼を追求して「あの時こう言った」となれば、「言わなかった、君が勝手にそう思っただけだ」と答えるにちがいない。それが正しい。そしてすべては宙に舞う。

だました、だましてない、私と彼がそんなふうにありきたりな痴話喧嘩や別れ話で出口のないのしり合いをすることを想像して、私は愉快な笑いがこみあげるのを感じた。それこそ演歌のような男と女ではないか。残念ながらそれはあまりに彼と私に相応しくない、ゆえにテレビのお笑い番

組のように喜劇的な情景だった。

ほんとうは、彼が私をだましたというより、私が彼のことばを勝手に解釈して、自分から進んでだまされたのだ。もう少し言うなら、私はそういうふうになまされることを望んでいた。波風立てずにだあしてほしいと願っていた。だから渡りに舟のように彼のことばを捉えて、それを自分で敷衍したのだろう。まるで舟の舳がゆるんだのいいことに、細い櫓をあやつって自力で急流を渡るように。あのとき思わぬ所へ運ばれたのは、もしかしたら私ではなく杉原さんだったかもしれない。私はそれも考えた。そんなふうを考えるのは初めてだった。そしてそう考えてみると、それはそれなりにありうる真実であるように思われた。

それにしても私はなぜ別れに向かう解釈を選んだのだろうか。今となつてみれば、私は心の深いところで別れることを望んでいて、そのきっかけを探していたとしか思えないのだが、それがなぜなのか自分でもよくわからない。人間的にふたりがいかにしっくりしていたとしても、関係そのものに居心地の悪さがなかったわけではない。だがそれが別れる理由ではなかった。というか、ことばにするとひどく奇妙に感じられるけれども、別れたのはたぶん、別れる理由がなくなっていたからではないか。満ちて飽

和した心情には欠けたものがなく、ゆえにもう求めるものがなくて、別れる理由さえもなかった。欠落しているものがあれば、そちらに眼を向けることもできただろうし、それを求めるがゆえに、別れないでいる意味があっただろう。別れないための絆に力をこめただろう。あの時の杉原さんと私には、そうしたものが何もなくなくなっていった。あとは別れるだけだった。そうならずにいられなかったのは、おそらく彼と私が男と女だったから。それまでふたりの関係が、男と女のあいだに働く磁力に支えられていたからだ。あの時もし別れずにいたら、私たちはもう恋人でいつづけることはできなかったにちがいない。恋人ではなく、夫婦か友だちになることはできたかもしれないが、恋人としてはあれが極点だった。少なくともあの時の私にとっては。

思いがけず沢田常務から杉原さんの噂を耳にし、別れのいきさつをもう一度考え直してみる機会をえたことで、私はようやく自分のなかの杉原さんから自由になった気がした。それまでは、なぜかしら後ろめたい自分がいたのだ。しかし後めたいと言って、いったい誰に對して？何に對して？無下に傷つきたくない気持ちもあって、予防線を張っていた。彼とつきあったことと、彼と別れたことの両方から、そのようにして眼を背けてきたとも言える。その予防線を萩原常務はいともあっさりとぶち破ってくれた。

沢田さんという人は、いつも私に對して、そういう貴重な鈍感さを持っている人だった。たぶん本人はまったく気づいていないにちがいないけれど。でも私は彼の鈍感さにある時は守られ、ある時は背中を押される。まさに今度のように。

いまこのとき杉原さんは不幸ではない。不幸だとしても、それは私のせいではない。彼には私の関与できない世界と未来がある。世間話めいた常務のことばを聞いて私が受け取った唯一確実なことはそれだった。その他のことは後からゆっくり考えたことにすぎない。いまこの時、彼が私とは関係のないところで幸せだと思えることが、私の大きな喜び、そして確かな解放だった。

ドアに辿り着いたとき、私は晴れやかな気持ちで萩原さんの顔を見た。そして、むしろ感謝をこめて彼に会釈しつつドアを閉めた。常務の机からドアに至るまでのほんの四メートルのあいだに、私の人生はひとつの局面を通り越していた。

その数日後のことだ。会議室で昼食を終えて、部屋に戻る廊下で水野ク

ンとすれちがった。

「今日の夜、空いてますか」

前置きもなく唐突に言う。

「今日の夜ね、空いてることは空いてるけど…」

でも、母に手紙を書こうと思っていた。母は電話もいいけど、手紙がうれしいと言う。暇なときに何度も読み返せるからだそう。なので、ほんの時たま、たいして意味のない手紙を書く。だけど、それは別に今日でなくともいい。

「夕飯おごらせてください。いつものお返し」

言いながら、ふまじめな顔で笑っている。この子が言うのと、どんなことでも冗談みたいに聞こえて、怒る気も、かわす気もそがれてしまう。で、いい加減にうなずいた。

「六時半にあの角の本屋で待ってます。店入った右側の雑誌のどこ」

それだけ言うと、人のお弁当を盗んで「おいしい」と言う時の自分勝手な笑顔でうなずいて、さっさと行ってしまった。

夕方、言ったとおりの時間と場所ので私たちは出会った。水野クンは何も言わずに自分から歩き出して、新宿の外れにある小さな店に私を連れてい

った。レストランというより食堂といったほうがいい、薄汚い店だったが、店は満員で、私たちより後から来た客は店の外で待たされるほどだった。

「人気のある店なの？」

「最近では、一番おいしいスパゲッティを食べさせる」

語尾を飲み込む独特の言い方。やがて水野クンはいかにも慣れているように、私の好みも聞かずにきばきと注文し、また私を見てにっこり笑った。

こうして運ばれてきたスパゲッティは、私がそれまで知っていたスパゲッティとはいささか違っていた。まず注文した三種類が一つの大皿に盛られていて、それを各自が自分の皿に取り分けるようになっていた。水野クンは大きなフォークとスプーンを使って器用な手つきで私の分も取り分けると、何も言わずに自分からさっさと食べ始めた。

それはほんとうにおいしいスパゲッティだった。少なくとも私がそれまで食べたことのないおいしさだった。私が知っているスパゲッティといえば、たとえばハンバーグの脇に小さな山になっているケッチャップ味のそれか、それよりももう少しましな程度だったから。

たかがスパゲッティ、されどスパゲッティであった。

「おいしい…」

お世辞でなく心からそう思って、私は言った。水野クンは何とも満足そうに笑ったが、しかしひとつ首をかしげて何も言わない。

その日ごちそうになったスパゲッティだけで、それまで水野クンがひと掴みずつくすねたおかずを全部合わせたとしても十分に埋め合わせがついた。量としてはともかく、おいしい、珍しさも加算すれば、補って余りあるというものだった。それまであった僅かな腹立たしさも（正直、バカにしないですよ、という気持ち）がまったくなかったとは言えない）これですっかり帳消しになって、帰りの電車を待つホームで、私は年下の男に改めてきちんとお礼を言った。

「ほんとうに、とてもおいしいスパゲッティに出会うことができたわ」

「まあね、いまの東京で手軽に食べられるスパゲッティとしてはトップクラスかも。でも一番ではないな」

それから少し間をおいて、

「一番はボク」

えっ、私は耳を疑った。水野クンには時どき耳を疑う思いをさせられる。冗談なのか本気なのかわからない。「マイ箸」のときもそうだったが、



こんどもそうだ。笑っていいのか、まじめに受け入れるべきなのか。たぶん眼が宙に浮いていた私を、水野クンは少しのあいだ例によってムツとしたように眉をひそめて見ていたが、

「ボクが作るスパゲッティはさっきのよりもっとおいしいの。食べてみたい。うん。スパゲッティは嫌いじゃないし」

とろりとした口調で、たぶん私のことなのに、まるで自分のことのように言う。そう、スパゲッティは嫌いじゃない。というか、とても好きだということを私はその日、自分でも発見したばかりだ。

「じゃあねえ」

ゆっくり語尾を伸ばして言いながら、水野クンは手帳を取り出してページを繰る。

「こんどのウィークエンドは実家に帰るからだめ。とすると次の次の日曜、予定は？」

次の次の日曜日？ まあ、あまり重要な用事はなかったと思うけど、でも…、と私も手帳を取り出そうとしてバッグをこそごそ探る。それを水野クンは手で止めて、

「あ、もし都合がつかないようなら会社でメモをくれればいいし。いまは

とりあえず、うちに食べに来るということにしておこう」

そして、なぜだか横を向くと、

「では次の次の日曜日の二時半に阿佐ヶ谷の駅の改札口を出たところで待ってます」

それから私をまっすぐに見て

「わかった。ちゃんと覚えた」

また自分のことのような言い方をした。この人は自分と私をいっしょくたにしているみたいだ、と私は思った。

次の日曜日、言われたとおり私は阿佐ヶ谷の改札口の向こうに水野クンを見出した。彼は私を見て妙なぐあいに頬をゆるめ、ちよっと赤くなつて横を向いた。それからすぐに向き直るとひとつ頷いて、また何も言わずに先に立って歩き出した。

駅前のロータリーから大通りの一本裏手に入ると、あたりはもう住宅街といつていい町並みで、時々保育園とかクリニックが混じっているだけだ。閑静な裏通りだと思っていると、古めかしい小売店の並ぶ商店街になり、また人気のない住宅街になる。そんな道筋を水野クンは知り尽くしたようすで歩いて行く。ひどい方向音痴の私は、しばらくすると自分がどちらに

向かって歩いているのか、駅はどちらなのか、それすら分からなくなつてしまった。

そんなふうにして三十分も歩いた頃、ようやく辿り着いたのは小ぶりの瀟洒なマンションだった。

「いいぐあい。お腹が空いた」

彼はまた自分にも私にもつかない口ぶりで言うと、さっきとリビングの一角のキッチンに向かった。何か挨拶めいたことでも言うべきなのかと迷っている私は、ひとりテーブルに座らせられて手持ちぶさただ。することもなく、キッチンに立つ水野クンの背中を見ていた。

まな板でトマトをザクザク切っている水野クンは、私にとってふしぎな光景だった。こんなふうに料理している男性を身近で見たことがない。男の人って、こんなに背中が大きいんだ、と思う。そのわりに腰に短いエプロンを巻いたお尻が小さくて、記憶にある台所の母の後姿とはまったく印象が違う。

自分のために男の人が料理しているのを、他にすることもなくただ眺めている。それはもしかしたらものすごく贅沢なことかもしれないと思うけれど、でも同時に変に後ろめたく不安な感じもあって、私は時間と空間を

もてあます。

水野クンが作ったトマトとハムのスパゲッティは、それぞれの皿にこんもりと小さな山をなして、まるで貴重な芸術作品のようだった。作者があれほど自負しているのだから、まずいわけはないだろう。とはいえ私に十分その価値が判断できるだろうか。小山にフォークを差し入れる、それだけのことがとても気が重かった。

だが小さな一巻きを口に入れて驚いた。想像を超えておいしかったのだ。二週間前の、あのレストランの、私にとってはスパゲッティ開眼になった、それよりもっとおいしかったのである。

「……」

口にものが入っていてしゃべることができず、しかもそれが絶妙な味と風味と適度な歯ごたえの混合物で、そのおいしさをどう形容したらいいのか言葉も見つからず、私は食べることに夢中になりながら、言うに言われぬ思いを眼で伝えようとした。

水野クンは私の表情から言いたいこと（おいしいー！）を察すると、眼と口を大きく開けて天井を振り仰ぎ、それから何も言わずに二度頷いた。帰る時、彼はまた駅まで送ってくれた。道は似たようなものだったが、

なぜだか十分足らずで駅についてしまった。

日々は流れていった。思えば私の人生はいつも無風状態だ。人に語れるほどの不運も経験しなかった代わり、人がよく言うチャンスとか、幸運とかにもあまり縁がなかった。

私より七年後輩の玉城ちゃんは大変な星座マニアで、今年は恋愛運がどうの、仕事運がどうのと騒いでいる。病こうじて、他人にもちよっかいを出す。同僚の大方を星占いで征服したあげく、山根さんの星回りも見てあげましょうかと何度か言われたけれども断った。あの時は良かった、あの時は悪かったと、自分で振り返ってさえどっちとも見分けがつかないのに、今が良い、悪いと他人に言われてもどうなるものでもない。けっこうよ、と言ったら、それ以上は固執しなかったが、たぶん他人の目から見ても、私というのは物語に乏しい、たとえて言うならゆるい流れに漂う木の葉のような人間なのだろう。

波も立たず、流れているのかいないのか分からないような川の面で、でもしばらく見ていると、いつのまにか浮かぶ木の葉が位置を変えている。それなりに緩やかな流れがあるらしい。そんな流れに乗って一片の木の葉

遠い祭

が進んでいく。飛び跳ねることもないし、沈みもしない。穏やかに川に運ばれて、岸辺の藻にひっかかるとすれば、そのまま朽ちて水に溶けるかもしれないし、あるいはまた別の木の葉に押しやられて流れに乗るのかもしれない。そのいずれを幸せ、不幸せと言うのだろう。

他人には面白みのない人間かもしれないが、自分ではさほど面白くないとも感じていない。人が私に退屈するのはしかたがないが、私は別に退屈していない。

季節が移ろい、空が色を変える。かすかな違いだが、でもそれはとても明らかにで確かな変化だ。枯れたと見えた枝が小さく芽吹いて、いつか豊かな繁りに変わる。ある日つぼみが現れて、やがて花が咲く。花盛りはもうたくさん、いつそ苦しいと思い始める頃、いぐあいに萎んで落花する。高く澄み切った秋空の下で、葉がいまはの彩りを増し、そして木々は枯れ枝の素顔に戻る。そんな飾りを捨てた時節が、じつは一番心安らかで美しい。

人生は巡る季節に似ている。そう思うようになったのは、いつ頃からだろう。人との別れを経験したあたりからか。それとも他所ながら小さな命がすくすくと育つのを見たからだろうか。さもないければ自分のなかの命の

炎が少しずつ衰えているのを、知らぬ間に感じているからかもしれない。冬枯れはいい。静謐な安らぎがあつて何ともいえず心に適う。初めてそう感じたのは、さほど昔のことではない。そしてそれは、とても喜ばしい発見だった。何というか、自分の命にこだわらずにすむような。自分が静かに消えていくことを受け入れることができるような。

とはいえ、好ましい冬枯れもけっして長くはつづかない。すぐに芽吹き、季節が来て、蕾がほころび、胸苦しいほどの花盛りが過ぎてもお、残る葉群が燃えさかる。季節はじつにめまぐるしいほどの祝祭だ。

しかしそんなの祝祭はいつも私の外にあった。私の庭には、人目に立つほどの花もなく、心燃え立つ紅葉もない。あるのは年上の男性との人目に立たない関係。そしてお弁当のおかずを盗みつつけて、お返しにスパゲッティをご馳走してくれた男の子。パツとしないが、それでも景色は巡っていく。

思えば鳥屋の若奥さんの家出しにしても、近所の主婦たちにひととき話題を提供し心を沸き立たせたとすれば、それはまだ薄ら寒い春先に桜の花が人々を駆り立て、うだるような暑さの最中にも百日紅が過激な紅を保ちつづけるのと似たようなもの。あのひとの命の花がその内なる摂理のままに

はじけ飛んだのか、あるいは狂い咲きしたのであったか、それは私のような遠い人間にはついにわからなかったけれども。

そんな折しも、鳥屋の若奥さんの噂が再燃した。それも前回と比較にならない爆発的な華々しさで。彼女が殺人事件の被害者としてスポットを浴びたのだ。そして近所の人たちはその時はじめて、鳥屋の若奥さんが單純に家出をしたのではなく、あの豆腐屋の息子と駆け落ちしたのであったことを知ったのだった。その殺人の加害者が他でもない豆腐屋の息子だったから。

家出からすでに三年の月日がたっていた。

事件のあらましはこうだ。都内某所に住むG.O. (27歳) が警察に出頭して同棲中のM.T. (38歳) を殺害したと告げた。殺すつもりはなかったが、行きがかりで首を絞め、気がついたときは息が絶えていた。警察ではなおも状況、事実関係を取り調べ中である。

二、三の日刊紙に短く報道されたいが、記事そのものは小さく、注意を引くことはなかった。実名は伏せられていたし、近所でもでも殺された女性が鳥屋の若奥さんだと気がついた人はいなかったようだ。

しかしおそらくは身元確定のために婚家先の鳥屋さん、常村家には警察から確認ないしは事情聴取のための出頭要請がいったはずだ。数日の後には、事件は近所の誰しもの知るところとなった。そして鳥つ根の若奥さんが真のヒロインになったのは、正確にはこの時点からのことである。

最初の新聞報道から一週間後には、民放のワイドショーが短いドラマに仕立ててこの話を扱った。三週間の後には実話を標榜する週刊誌が、主人公の名前や職業を変えて、この事件を題材にした一頁か二頁の短編小説を掲載した。そして主婦たちは頭を寄せて、それぞれ自分が見たテレビの番組や読んだ週刊誌の内容を持ち寄ってゴミ出し会議に明け暮れた。

私はそうした会議にももちろん参加することはできなかったし、会社で話題になるようなことでもなかったのだが、なにしろ母屋の奥さんにとっては、私相手に語る作業は自分の見聞した事柄を総合し再編集して自主的にレポートする、つまり彼女の才能をいかに発揮するまたとない機会であったから、それを受容する役割を逃れるすべはなかった。

こうして近所の人たちは、テレビや週刊誌によって、かなり信憑性の疑わしい「真実」を手にし、私はといえば、それを更に脚色した「母屋の奥さんバージョン」を受動的に呑み込まれることとなった。それによると

遠い祭

…、
事件に先立つ三年前、ふたりは神社の祭礼の夜に駆け落ちして、下町の安アパートで同棲を始めた。女のほうは初めのうちパートの店員として働き、男は元の仲間のつてを頼ってドラマーの仕事をしていたが、不安定な仕事のせいで生活は苦しかった。やがて彼女はより高い収入を求めてホステスとして働くようになる。その頃から口論が絶えぬようになり、男が暴力沙汰に及んで、ついに悲劇に至った。

客観的にはまことに陳腐なストーリーだったが、しかし私が実際に知っているあの働きの若奥さんと寡黙な豆腐屋の息子の話として聞くと奇妙な異和感を排除できず、しかもそれが事実だと言われると、自分がそれまで持っていた心象もしくは実感が薄らぎ、嘘っぽい「実話」に場を譲ってしまう。

母屋の奥さんは熱心なテレビ視聴者だったから、事件を扱った昼のワイドショーを幾つも見ていた。そして私にはその報告に彼女ならではの感想も付け加えた。たとえば**テレビに出てきた若い男はまるでヒッピーみたい、長髪でよれよれのジャンパーなんか着てるのよ、いくら何でも豆腐屋さんの「おにいちゃん」はあんな格好はしてなかったわ、といったぐ

あいに。

私も気になって事件について書いている週刊誌を幾つか買ってきた。記事はどれもじつに確信ありげで、細かい描写が添えてあり、まるで現場に立ち会っているような心持ちにさせられる。それはほとんど創作、もはや小説と言ってよかった。

とはいえ商店街のようすなどは、読みながらほんとにその通りだと思つて、こんなふうに自分に身近な場所やものごとについて書かれた活字を読むことはあまりないので、ふしぎに新鮮な心持ちだったが、肝心の主人公たち、つまり駆け落ちして果ては女性の殺人に至った男女は、私の知っている鳥屋の若奥さんと豆腐屋の息子とはどうにもうまく重ならなかった。

駆け落ちするずっと前からふたりが人目を忍んで逢い、深い仲になっていたという記事もあった。ほんとにそうだったのだろうか。信じられない話だ。でも、いったい私が何を知っているだろう。そうだというのなら、そうなのかもしれない。

そんなことをあれこれ行きつ戻りつしていると、始めのうち私が知っていると思っていた実像と、週刊誌の記事が語る幾つもの虚構に分離してし

ていた映像がしだいに近寄ってひとつになっていく。

下町の小さな木賃アパートに住み始めた頃、ふたりはとても仲が良く、しあわせに暮らしていた、とある記事には書いてあった。夜遅く、ふたりは肩を並べて閉店近い銭湯に通った。そう、同棲中の若いカップルのように。

男がでかける時は、女は半開きのドアから身を乗り出して、「いつてらっしゃあい」と若やいだ声で送り出した。新婚夫婦のようだった。これは記事の著者の想像だろうか、あるいは当時の隣人にでも聞き込みをしたのだろうか。

まれに日中、近くの商店街で買い物をするような時、年上の女のほうはときばきとことを進め、男は斜め後で手持ちぶさたにそれを見ている。まるで姉が下宿の弟の世話をしているようでもあった。

しかしそんな蜜月はやがて終わりをづけ、ふたりの間が陰り始める。女が盛り場のホステスになり、通うのに便利なマンションに転居した頃からだ。がそんなふたりの間柄についても、記事の見解はそれぞれ異なっていて、同じではない。女の同僚の話として、「あのひとは彼にすっかり惚れ込んでたのよ。白バラみたいな男の子だって言ってたもの」と語る記事も

ある。

白いバラ。私の記憶にあるのは白い作業服に身を包み、これまた真っ白な豆腐をすくいあげて薄いプラスチックの箱に滑らかに落とす入れ、私に差し出す姿だけだ。潔くて白いのは同じでも、白いバラとはちよつと違う。それとも、日ごと豆腐を買いに四つ辻を走った彼女にとっては、あれが白バラだったのだろうか。

つづいて、これこそは見てきたようなセックス描写だ。読者の下心に答えるべく、迫真の生々しさだが、いくらなんでもこればかりは見てきたはずはない。

年上の女はベッドでも積極的に相手をリードしていた。若い男もそれなりに遊んできたつもりだったが、心身の成熟では、年を重ねた女の豊潤と内的に発酵したエネルギーに押されるばかりだ。女の体が燃え上がると、その芯には赤いバラが咲き誇って、男の頭を狂わせる。そんな自分を若い男は頭のどこかで嫌悪しながらも、のめるように傾斜していくのを止めることができなかった。

白いバラと赤いバラ、まるでバラ戦争。そう思って、私はふっと笑った。だって、ぜんぜん違うだろう。

情熱的に愛し合うふたりが落ち込んでいったのは、奇妙な深遠だった。引き返すことはできないし、引き返したくもない。けれども行く手に光がない。そればかりか、ますます暗くなっていく。闇の中に言い難い魅惑があった。そうして男と女は、どうしようもない憧れに責め立てられつつ不幸になっていった。

不幸の理由はもとから存在した。家と夫と子どもを捨てた女は、それについての覚悟がなかったからだ。後悔と自責は遅まきにじわじわと押し寄せ、たとえ女が口にださなくても、ふとした表情に滲み出て、若い男の気持ちをごらつかせた。

こっちが望んでしかしたことじゃない。男は舌打ちする気分で考える。正直いって、ちょっとした遊びのつもりだった。だってろくに知らない仲だったのだから。悪いのは女のほうだ。そう思いつつ、それでも四肢を絡め合って一体になり、鎖鎌に締め上げられるように離れがなくなる毎日のなかで、ひとりが不幸に浸されればその痛みがこちらの身に及ばずにはいなかった。

それだけではない。ホステスになって、その道で次第に腕を上げていく女に、男の心はこれまで覚えのない風で波立った。

夜遅く戻る彼女を送ってくる男がいる。たいていはマンションの前でタクシーから彼女を降ろして走り去るのだが、なかには明らかに運転手付きの黒塗りの車を止めさせて、彼女をエントランスまでエスコートしてくる男もいた。豆腐屋の息子がそれまでそばに近寄ったこともないような肩の分厚い中年男は、怯えにも似た感情を起こさせた。無意識のうちに若さに驕り、それにもたれて女の温みに甘えてきた年下の男は、否応なしに脆弱な自分を外の眼で見ることを強いられ、そのような自分の姿に苛立ち、そのように自分を苛立たせる女に腹を立てた。

それでもふたりは別れることはできなかった。逆に、不穏なすきま風が吹けば吹くほど、心のうちが波立てば波立つほど、相手の存在が生々しく感じられて、ただやみくもに体を重ね合わせることに執着していった。

そして遂にある午後、男は組み敷いた女の首を絞めて殺してしまった。警察の取り調べて、男は殺害の意図はなかったと供述した。警察で取材し、それを元に多分の創意を加えて構築したある実話週刊誌の記事によれば、いつからか情事のたびに、女は「殺して」「死なせて」と言うようになった。それがいわゆる睦言だったのか、それとも女がほんとうに死にたがっていたのか、男には判然としなかった。だが深く立ち籠める性愛の霧

に自身も朦朧と包まれて、男は女の口にする死が愛の究極であるようにも思われる。そしてその時の女の願いに従うことが、自らの愛の到達につながると感じるのだった。彼女が死ぬほどに愛したい、その瞬間はそう思っただが、それは決して偽りではなかった。

男は女とひとつになり潮が満ちて解き放つ頃合いが近づくと、女の首に手をかけるようになった。初めはただの真似で。いや、最後まで真似だった。なぜって、殺したいなんて、まったく思っていなかったんだから。最後の最後まで、殺す気はなかったんだ！

殺意があったかどうか、それが罪状ひいては刑の裁定に大きく影響する最大の要因となるはずであった。

男は当初、殺意を完全に否定していた。女が死亡したことに最も衝撃を受け悲嘆にくれたのが男自身だったのだ。

しかし日が経つにつれて、男の言うことに少しずつ変化が見られるようになった。女を殺したあと自分も死ぬつもりだったが、死ねなかったと言った。彼女がいっしょに死のうとと何度も言い、自分もこのまま生きていくのには疲れ果てていた。女との生活はまったくの出口なしだった。

そのうち、殺そうとしたのかもしれない、そう呟くようになった。死に

たい、死にたいと言う女を、もう死なせてやるしかなかった。それにまた、自分のなかにも、殺したいという気持ちにはみじんもなかっただろうか。少なくとも、少なくとも、首に巻いた指に思わず力をこめた瞬間、殺してやる！ そう心の中で叫んだのは確かなのだ。たとえそれが、愛してる！ という臓腑の喘ぎと一つのものであったとしても。

何冊もの週刊誌を、私は夢中になって読んだ。どの本にも私の知らないことが書いてあり、それが事実かどうか考える暇もなく次の事実が気になって、漁るように事件のリポートのある週刊誌を買いきつた。おかげで、それまで名前も知らなかった実話週刊誌にも手を伸ばした。

するうち、妙なくらいに心と頭が毒されていった。それも、毒は一種類ではなかった。一方では、事件に関して何か少しでも新しい事柄はないかという、情報への渇きのようなもの。もう一方で、ますます扇情的になる描写への、耐性と裏腹の欲求。情報の渇きは焦りに似ていたし、描写の欲求はアルコール依存に似ているようだった。

そんな自分に、ある日、ふと気がついた。事実だという確証もないこと、いや、おそらくは記事の書き手の恣意的な（芸術的な、と言うべきか）

想像にたあいもなく踊らされて、知っているつもりでいたあのふたり、鶏屋の若奥さんと豆腐屋の息子について、ありもしない空中楼阁をふくらませている自分に。

私は週刊誌を捨てることにした。が、ゴミ出しの日になって考えを変え、ひとまず、捨てずに取っておくことにした。けれども読み返してみると、それらの記事はまるで気の抜けた酒のように刺激が薄らぼやけ、香りの乏しいものと思われた。

こうして何度かためらいを繰り返した後に、私はやっとほんとうに雑誌の束を捨てたらしい。らしい、というのは、捨ててから何日もたった後に、私はもう一度読み直そうとして週刊誌を探したからである。その時は、ふたりが最初に暮らした町の、電車の駅名を確認しようと思ったのだった。しかし雑誌はどこにも見あたらなかった。そうだ、ほんとに捨てたんだ、と私は思い、胸の奥に後悔の小さな渦が巻くのを感じた。

知る手がかりを失った時の私の気持ちをはたと言えば、結局のところ私は何も知ってはいない、という空しい確信だった。

世間もまた、どうかして私と同じ空虚を感じていたのかもしれない。新聞やテレビは完全にこの事件を見限り、それと歩調を合わせるように井戸

端会議も退屈そうな平穏を取り戻した。知ろうとしなくなってみると、知っていたはずのことも確かではなくなり、結果、すべては幻覚のように取りとめがなくなる。とりわけ、こうした事件はそうだった。

そんなある夕方のこと、母屋の奥さんが他の話題のついでに私に言ったのだ。

「あのふたりね、あんなことになるまでろくに口をきいたことがなかったはずだって、お豆腐屋さんのおばさんたら言うのよ、ワタシに。まあ、言うにこと欠いて、ねえ」

私が何も言わずにいると、
「ほら、鳥屋さんの若奥さんのこと。ほらあれよ、お豆腐さんの息子が殺しちゃったかもっていう話」

奥さんはおしゃべり好きだが、使用する用語に関してある種の規範を持っていて、使いたくないことばがあった。その葛藤を越えながらの言いようである。

母屋の奥さんによると、お豆腐屋のおばさんの言い分はこうだ。祭の夜に駆け落ちするまで、ふたりはろくに言葉を交わしたことがないはずである。

息子に店を任せるようになってからも、自分は店の隣の茶の間にいて、ガラス戸一枚隔てた店のようすはあらかた知っていた。別に聞き耳をたてたりしていたわけじゃないけど、初めのうちは息子がちゃんとやってくれるか心配だったし、数少ないお得意さんのことも気になった。息子のほうでも、何かというとき母さんって聞いてくることがあったし。それに階下^{した}は店と台所と茶の間だけの小さな家で、もう何十年も昼間は茶の間で暮らしてきて、他に居る場所もないのだ。

鳥屋の若奥さんは確かによく豆腐を買いにきた。それは若奥さんだけじゃなくて、前の奥さんの時からそうなのだ。うちの豆腐がおいしいと言って。まだうちの父さんが元気でやっていた頃は、うちの豆腐は評判がよかったから。

そんなわけだから、若奥さんが豆腐を買いにきてもあたりまえ。あたしだって、向こうの鳥を買いに言ったもの。おたがいさまよ。

で、あっちも店や子どもの世話なんかで忙しいし、夕食の仕度時になると小さなボールを抱えて、角を斜めに突っ切って走ってくる。

「お豆腐ください」って、いつもあの人は言っていた。買うのはたいてい一つだったから、それで通じる。一つじゃないときだけ「今日は二つ」と

か言う。冷や奴にでもするのだろうか。向こうが口にするのはそれだけで、値段も分かっているし、あとは何も言わない。

息子は礼を言っていた。でも「ありやと…」しか聞こえない。ちゃんと言うんだよって、何度も言ったけど、あの子、ハキハキしないっていうか、口下手っていうか、父さんに似たのだ。いくら言っても、やっぱり「ありやと…」だけだった。誰に対しても。

二日か三日に一度は買いに来てただろう。二日つづけてというのも珍しくはなかった。豆腐とか揚げ、納豆なんでものは、昔はそんなふうで毎日食べてた物だから。

ほんとにそれだけだった。ふたりがそれ以上に話することなんてなかった。

息子の母親の言い分を私に伝えながら、母屋の奥さんは少し腹を立てているようでもあった。いくら何だって、ろくに口もきかないそんなふたりが、駆け落ちなんかすると思う？バカにしないでよ。

とはいえ、お豆腐屋さんのおばさんにしても、得意客である奥さんをバカにしてそんな話をするわけはないだろう、そう私は思った。たぶん、テレビや週刊誌で息子の事件が騒がれて、おばさんなりに辛い思いを（それ

は、どんなにか辛かったはずだ）していたあいだじゅう、彼女の脳裏には、ことばも交わさず、ただ豆腐と代金のやり取りだけで数ヶ月を送った二人のことが、世間の騒ぎとはまったく違うふうに刻まれていて、それを誰かに言わずにはいられなかったのにちがいない。

それは確かに信じがたい話と取られてもしかたなかったし、最後にあのようなことをしでかした者の親であればなおのこと、口に出して言えることではなかった。それでも、あの人ならと、お豆腐屋のおばさんは誰にも言えないことを母屋の奥さんにもらしたのではなかったろうか。

しかし奥さんは、そんな母親の言うことが信じられず腹を立ててしまった。それは単に、彼女の想像の範囲を超えたことであつたからなのだが。けれども私は、奥さんからその話を伝え聞いたとき、母親の言うとおりなのではないかと思つた。なぜかやつと納得のいく筋道をえたようで、気持ちすつきりしたのだつた。ああかこうかと世間は騒ぎ立て、あることないことで粉飾したあげく、勝手にうんざりしてしまつたらしいが、事実はずっと単純で、結果としてこうしかなりようがなかった、そんなものなのかもしれない。止むにやまれぬものがあつた、それしか言いようはないのかもしれない。

「それでね、おばさんたらこんなこと言うのよ、あたしゃ、ふたりが羨ましくなつたよつて。まあ、あきれるじゃないの、言うに事欠いて、羨ましくなつたなんて、おばさん頭おかしくなつたんじゃないかしら、ねえ」

確かに奥さんの言うとおり、あんなふうに世間を騒がせた男の親としては言うべきではないことだつた。それでも、羨ましいというその言葉には、息子に対する優しさがあると私は思つた。息子にしても、そう言われることで救われるものがあるのではないかと。

そうやって少しねじれたふうに腹をたてながらも、奥さんは彼女なりに豆腐屋のおばさんのことを気にかけているのである。

「年取つてこの先ますます心細くなつていくのに、たった一人の子どもがあんなことになつちやつて。運の悪い人だわよ。でもまあ、子どももそう当てになるものじゃないから」

そう、子どもは当てにならないというのが、このところのおばさんのテーマだつた。というのも、ある日、血圧があがつて「フラフラになつちやつたとき」、いくら電話をかけても娘の睦子さんと連絡がつかず、私が病院につきそつて行つたのだつた。

「孫が小さい時はさんざん面倒を見させておいて、手が離れたらもうすつ

かりお見限り。まったく子どもなんて現金なものよ。節子さんがついてきてくれなかったら、どうなっていたことか」

特有のオーバーな口調で言いながら、奥さんはうるんだ目で私を見た。私にしてみれば、それはちっとも迷惑でないばかりか、たまたま役に立てたのがうれしかった。家族のいない暮らしたから、誰かの手助けができるとかえって元気になるような気がする。母が遠くにいて、何やかや日常的に手助けをすることができないぶん、母屋の奥さんを母親代わりになっているような気持ちもある。母にも身近にそんな人がいてくれるといい、そう思う。

「遠くの親戚より近くの他人で、ほんとだわ」

奥さんはそう言ったが、私もそうかもしれないと思う。気にかける相手がいることは、人に活力を与えるのかもしれない。

そんなことがあってしばらくしてから、奥さんは私に指輪をくれた。朱色のまん丸い珊瑚の指輪だった。

「私にはもう似合わないし、それに太って入らなくなったの。節子さん指輪つけないけど、持ってるって何かの時にいいかと思って」
まるまるとした指を組んで、そう言った。

私はとてもうれしかった。指輪ではなくて奥さんの気持ち。なので、時々小さなケースを開けて、眺めている。でもまだ一度もはめて外出したことはない。

このところ迷っているのは、水田くんのことだ。相変わらず私のお弁当の一切れを盗みつけ、そのお返しのもりか、ときどき日曜日にはお手製のスパゲッティをご馳走してくれる。そんなことが続いた。弟というものを持ったことはなかったが、もしいたとしたら、そして私と弟どちらも一人暮らしだったら、こんなこともあるかもしれない。そう思って、あまり深く考えないことにしていた。なにしろ彼のスパゲッティはおいしいので、それは手放したくなかった。

ある日、彼のマンションで、ザリガニのスパゲッティを食べていた時のことだ。水田くんはそのザリガニを前日、どこぞの洋風食材店で買い出しに行ったということで、とても自慢げだった。私にはもちろん初めて食べるしろものである。

おいしいと思うけどザリガニの肉が少なくて、ちょっと食べにくい。扱いに苦労していたら、彼がテーブル越しに身を乗り出して私の皿にナイフとフォークを突っ込んだ。彼の頭が私の鼻先にぬっと出た。密生した黒い

髪から微香が漂ってくる。それを至近距離で感じたたん、私の心臓がトクトクと音を立てて打ち出した。そんなことは初めてで、自分で自分に驚いた。

どうしたことだ。何かの気のまちがいだ。私はそう思っただけで、何食わぬ顔をするのに精一杯だった。水田くんはまったく気がつかなかったらしく（当然だ）、次の週も律儀に私のお弁当からちよろまかした。

それから一と月ばかりが過ぎた頃。やはり彼のマンションで、私は食べ終わった皿をトレイに乗せてキッチンに運んでいた。いつのまにか、皿洗いは私の仕事になっていった。その私を彼が後から黙って抱きすくめた。私はもちろんびっくりにしたが、両手はトレイでふさがっているし、それを落としてはならないから動くことができない。何も言えずにじっとしていると、私の背中に顔を押し当てて、

「ぼくもうがまんできない」

くぐもった声で言った。そして抱きしめていた腕をほぐくと、後から私がささげ持っているトレイを取り、そのままシンクの横の台にそっと置いた。彼の胸が私の背中に張りついた。そのまま私を背後から抱くようにして、隣の寝室に押し寄せていった。

ベッドに横にされたとき、あのときの微香、たぶん彼の体臭とシャンプーの香りが入り混じったものが私を濃厚に包み込んだ。そして私は一切の抵抗力を失った。

新しい局面がつけ加わったが、私たちの関係は表向き何ごともないように持続していた。

が、二ヶ月ほど過ぎた頃、昼休みの後の廊下で山根さんが私の肘をつかんで、

「水田くんと何かあった？あなた文句でも言ったの？ 彼、あなたの顔、上目づかいでチラチラ盗み見てたよ」

そう、何かあったのだ。水田くんは私にプロポーズしたのである。それは私にとって晴天の霹靂というほどではないにしても、ある種の衝撃がないわけではなかった。まったく予測できなかったかと言えば嘘になるが、しかし直面したくない事態だった。

なぜだろう、と考えて見る。彼が嫌いなわけではない。とても惹かている部分があるのは確かだ。それでも彼をまるごと受け入れるためには、いまの私を変えなくてはならないだろう。

何も変えることはない、いまのままのあなたでいい、と彼は言う。

「ぼくはあなたと言う人を、重要な点でしっかり押さえてあるからね。どんな味の食べ物を作るか知り尽くしているし、いっしょに長く歩いてもちつとも疲れないってこともわかってる。それに腹を立てた時にどんな顔をして、どんなふうに怒りを消化するかも知ってる。会社で問題が起きたときのあなたを前から観察してたから。」

「食べ物の好みと味つけが気に入って、長い間いっしょに気分良く歩いて、それで怒りをどう乗り越えるか理解できたなら、それ以上の何を知る必要がある？　そういうのって、いっしょに生きていくのに一番重要なことじゃない」

それはそうかもしれないけれど…、私はことばを飲み込んでしまう。そうかもしれないけれど、でも何かがすぐちぐはぐな気がする。というか、水田クンという男性と私という女がびったり嵌らない感じだのだ。そんな私を見て彼は、

「ぼくは用意周到な人間だからね。もともと長期戦を覚悟で始めたことだし、じっくり迷ってくれてかまいません」

余裕綽々、につこり笑った。びつくりである。だけでなく、ちよつとムツとする。長期戦で始めたって、何を？　もしかしてお弁当をチヨロまか

すこと？　考えようとして、いやいやと内心頭を振った。いま考えるのはやめにしよう。

長期戦とは言ったが、水田くんはそのあと時々この問題を蒸し返した。そして、まだ答えが出せないでいる私に、

「節子さんで、すごく鈍感で不器用で、そのうえ意地っ張りだからなあ。ほんとに手間のかかる人だ」

笑いにごまかして、ちよつと皮肉っぽく言った。これにはとっさに返事もできなかった。で黙っていると、

「自分ではとてもデリケートで素直な人間だと思ってるんでしよう」

と、からかう口調で追い打ちをかけた。じつはその通り。会社でだれかと角突き合わせたこともあまりないし、けっこう人には流されるほうだと思っていた…。

がそのことよりも、初めて節子さんと呼ばれたのが、もう一つのショックでもあった。それまで私を「節子さん」と呼んだのは母屋の奥さんだけだったからだ。節子さんだって、水田くんが…。

そんなやりとりはあったものの、そして一人になるとあれこれ考え込むことはあったものの、ふたりでいる時間は楽しかったし、良質だった。彼

がすっと私の体に腕を回して引き寄せる。すると私の体はごく自然に彼のいいなりにたわんだ。少しも意地っ張りではなく、まるで柔らかいプラスチックのように。そして素直に反応した。ちっとも鈍感ではなく、自分でも驚くほど敏感に…。

だから彼のプロポーズは、さほど本気にしなくてもいい話、ともすればお決まりのジョークというか、私たちだけの会話のキャッチボール、ふたりの関係の暗黙のルール、手慣れたゲームみたいなものにもなりそうだったのだ。そうなるならそれでもいい、むしろそのほうがいい、と私は思っていた。なにも結婚なんかしなくても、いまのままで身も心もじゅうぶん満たされている。

もし結婚するとしたら…。仕事と家事と、それに年下の彼を家族に引き合わせる時のこと、その逆の場合とあれこれ考えて、ああ、とても自分にはやれそうにないと思われた。

独身で恋人の噂もなく、寂しそうな女だと他人には見えたとしても、私は少しもかまわないのだ。そんなふうに見える自分が、いやではない。そうも思った。

そんなある日、彼は決定的な台詞を口にした。

「要するに節子さんはケチなんだ」

ケチ！ 私が？ これは思いもかけぬ一撃だった。よりによってケチとは。他にいろいろ言われても、そう、たとえば鈍感だと言われたって、そういうところもあるかもしれないと思う。でもケチだとは思わなかった。それまでも、そんなふうに言われたことはなかった。

水田くんが昼食を食べながら私の顔をチラチラ盗み見ていたと山根さんが言ったのは、その翌日の月曜日のことだった。さすがに彼も、私が気分を損ねたのではないかと気になって、顔色をうかがっていたのにちがいない。

しかし私は腹を立てていたのではなかった。むしろその逆だったのだ。そうか、私はケチだったのか、と考えていた。前日、水田クンのマンションで帰り際にそう言われて以来、ずっとそのことを考えていた。

自分がケチだということは、なぜか私を納得させてしまったのだ。晴天の霹靂、いやそれより目からウロコの衝撃だった。簡単には説明のつかないことだが、ケチという視点は私の人生や行動のすべてとは言わないまでも、かなりの部分を説明するような気がしてきた。

勉強にも仕事にも華々しい欲を出したことがない。たいして贅沢もしな

かったし——浪費家でないことだけは確かだ——、引越しもせずに安い家賃の離れに住みつけた。これってもしかしたら…、みんな私がケチだったからなのだろうか。そうだと言い切ることはできないけれど、でもそう考えることもできそうだ。

それまで自分のことをケチだ思ったことがないだけに、そういうふうにしてみることに何か新鮮な感じもあつた。ストンと腑に落ちる、そんな感じだ。

そうか、私ってケチだったのか！

確かに、人に隠れるような（しかも露見を心配するほどの大秘密というわけでもない）恋をして、人並みの結婚もしなかった。そのことに自分だけで納得してしまっていた。ひよつとして、これも私がケチだということなのだろうか。それは確かにありうることもかもしれない。

ちゃんと自分で炊事をしているのに、ゴミ出しの日のポリ袋は気遅れするほど小さい。あれも、もしかするとケチだったせいなのか。そのために、何となく恥ずかしい気がしていたのだろうか。

節子さんて、ほんとに始末のいい人。そう言った母屋の奥さんの声が脳裏をよぎる。誉めてくれているのだとばかり思っていたが、ほんとにそう

だったのだろうか。

あれこれ考えていくと、私という人間のほとんどが、ケチのひとことで説明できるような気がしてきた。ケチではないと言い切れないところが、何とも微妙だった。

ふしぎなのは、自分がケチだということがさして厭でないことだ。こじんまりと地味だけど、でも気分のいい生活を送っている。それで別に不足とも感じなかった。ケチ…、なるほど！でも、それでもいいじゃないの、と思う。さりとてもちろん、ケチでありたいわけでもない。それには別に執着してはいない。

それにしても、浪費しなければ即ちケチだというわけでもないだろう。ケチというのは使うべきもの、出すべきものを惜しむことを言うのではないだろうか。だとすれば、私はいったい何を惜しんだのだろう。私が惜しんだのは何だったのだろうか。

そんなことをあれこれ考えていた時、まったくのついでのようにして、あの駆け落ちした二人、鳥屋の若奥さんと豆腐屋の息子のことを思い出した。そして、少なくともあの二人はケチではなかったと、感嘆のため息をつきながら考えた。ことの善し悪しは別として、あのふたりの生き方には、

遠い祭

ケチということばだけは当てはまらない。それどころか、何かがパーツと弾けとぶような華やかさが、命の浪費とでもいうか、そう、羨ましいような輝きがあった。それは他所事のように遠望していたあの事件について、私が始めて自分の立場から、自分との関連で発した思いだった。

しばらくの間、自分自身のケチについて思いをめぐらしていた。自分の言ったこととか、やったことについてではなく、自分自身についてこんなに長く考えたのははじめてだった。

そしてそんな時はいつも、水田くんの存在が私の斜め後あたりに感じられた。ケチだ、と言った時のちよつとむっとした顔、おにぎりをほおぼりながら私のほうをちらちら見ていた気配なんかが思い出されて、その度に心の芯がふつと柔らかくような気がする。もしかしたら私は、そんなふうに柔らかい気持ちになるのが心地良くて、ケチについて考えていたのだろうか。

もうすぐ夏が終わる。

考えなくてはならないことがないわけではないけれど、今日も私は会社

に出勤する。

木戸を開けると、空は澄み切ってどこまでも青い。これほど青い空はひさしぶりだ。いや、空がこんなにも高く青いことに、はじめて気がついたような気がする。はじめてのはずはないけれど、でもはじめてみたい気がする。

ゴミ出しの日なので、私は手に小さな袋を下げている。プラスチックの白い袋は相変わらず引け目を感じるほど小さい。始末がよくて、波風を立てない——そしてケチな（ふつ）——私自身のように。

私はゴミ置き場の角をそつと見やる。奥さん連中は、もう解散したか、それとも今日はタイミングがずれたか、人影はない。私はホッと小さな息を吐く。

柔らかい風が木々の枝を揺らしている。振り返ると、私の戸口の脇に立つ柿の木も微かに揺れて、葉陰にもうかなり大きな実が見え隠れしている。まだ色づく前で、よく見ないと葉の色と見分けがつかない。こんなに大きいのに、気をつけて見ないと見逃してしまうその隠れようが、なんだかいいらしい。

もうすぐ秋祭りだ。どこからともなく風に乘ってやってくる祭の音、し

遠い祭

すっかり間合いを取っている御神輿の太鼓とか、聞き分けがたく風の波間に見え隠れするお囃子の遙かな音が、私はとても好きだ。肌にくれてむせかえるような人の賑わいではなくて、空耳かとい瞬耳を澄ますほどの祭の気配。そんな遠い祭を感じると、一瞬、心がしんと静まって、自分の心臓の穏やかな音が聞こえるような気がする。

終わり

(平成二十五年八月)